

The

58th

第58回日米学生会議
日本側報告書

Japan-America

二国間を超えた未来 ～伝統への回帰と私たちの挑戦～
Examining the Future of the Japan-America Relationship
within a Global Framework

Student

Conference



開発：貧困と発展.....	43
科学技術と社会.....	47
市民参加の発展と非国家主体.....	51
多国籍企業とビジネスモデル.....	55
多文化主義とマイノリティ.....	59
文化とアイデンティティ.....	63
第5章 JLP (ジャパデリリードプロジェクト)	67
JLPとは.....	68
焼き鳥プロジェクト.....	68
お好み焼きプロジェクト.....	70
よさこいプロジェクト.....	71
第6章 JASCソング.....	73
JASCソングとは.....	74
58th JASC SONG作成の試み.....	74
第7章 参加者の声.....	77
第8章 第59回日米学生会議概要.....	111
第9章 ご協力頂いた方々.....	117
第58回日米学生会議 協力者.....	118
第58回日米学生会議 賛助者.....	122

目次

第1章 第58回日米学生会議概要.....1

日米学生会議のあゆみ.....	2
第58回日米学生会議テーマ.....	3
第58回日米学生会議活動概要.....	4
第58回日米学生会議参加者一覧.....	5
ブッシュ大統領からのメッセージ.....	7
メディア掲載.....	8
略語について.....	10

第2章 事前活動.....11

事前活動とは.....	12
春合宿.....	13
ディベートとロジカルシンキング講座.....	16
防衛大学校見学.....	17
ソーシャルイノベーターズ Vol. 2.....	18

第3章 サイト活動..... 21

本会議・サイト活動概要.....	22
直前合宿.....	22
コーネルサイト.....	23
ニューヨークシティサイト.....	25
ワシントンD. C. サイト.....	26
オクラホマサイト.....	30
サンフランシスコサイト.....	33

第4章 分科会活動.....37

分科会活動とは.....	38
外交と国家ブランディング.....	39

第1章

第58回日米学生会議概要

日米学生会議のあゆみ.....	2
第58回日米学生会議テーマ.....	3
第58回日米学生会議活動概要.....	4
第58回日米学生会議参加者一覧.....	5
ブッシュ大統領からのメッセージ.....	7
メディア掲載.....	8
略語について.....	10

日米学生会議のあゆみ

初期の日米学生会議（1934年～1940年）

日米学生会議は、1934年満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、彼らは「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念を掲げ会議創設に努めた。

当時の学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会（国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも4名の学生使節団が渡米し全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名の米国代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国（当時）への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで日米両国で毎年交互に開催された。しかし、太平洋戦争勃発に伴い、日米学生会議の活動も中断を余儀なくされた。

戦後の日米学生会議（1947年～1954年）

戦争の終結によって会議は再開を見たものの、戦前とは異なり、1953年までは日本のみでの開催となった。翌1954年、戦後初の米国開催として第15回日米学生会議がコーネル大学で開催されたが、その後、資金問題、日本人学生の参加者の不足、米国における財政援助の中断などに悩まされ、会議は1955年から1963年まで再び中断された。

今日の日米学生会議（1964年～2006年）

1964年、OB/OGからの会議再開を望む声に応え、会議創始者の一人である故板橋並治が理事長を務める財団法人国際教育振興会の全面的支援の下に、会議が再開された。第16回会議はリードカレッジで開催され、77名の日本人学生と62名の米国人学生が参加した。1973年の第25回会議では、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎回テーマを設定し、期間を1ヵ月とするなど現在の会議の基本形態が整備された。日米学生会議は、70年の歴史において、学生による企画、運営という方針を貫いてきた。しかし創設時と今日で日米両国を取り巻く環境は大きく異なっており、会議の形態自体も変化を重ねている。日米両国が新たな関係の構築を迫られている現代において、日米学生会議は、創設当時の理念を受け継ぎつつ、時代の変化に対応してゆく柔軟性を求められているといえよう。

第1章

第58回日米学生会議概要

日米学生会議のあゆみ.....	2
第58回日米学生会議テーマ.....	3
第58回日米学生会議活動概要.....	4
第58回日米学生会議参加者一覧.....	5
ブッシュ大統領からのメッセージ.....	7
メディア掲載.....	8
略語について.....	10

日米学生会議のあゆみ

初期の日米学生会議（1934年～1940年）

日米学生会議は、1934年満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、彼らは「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念を掲げ会議創設に努めた。

当時の学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会（国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも4名の学生使節団が渡米し全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名の米国代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国（当時）への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで日米両国で毎年交互に開催された。しかし、太平洋戦争勃発に伴い、日米学生会議の活動も中断を余儀なくされた。

戦後の日米学生会議（1947年～1954年）

戦争の終結によって会議は再開を見たものの、戦前とは異なり、1953年までは日本のみでの開催となった。翌1954年、戦後初の米国開催として第15回日米学生会議がコーネル大学で開催されたが、その後、資金問題、日本人学生の参加者の不足、米国における財政援助の中断などに悩まされ、会議は1955年から1963年まで再び中断された。

今日の日米学生会議（1964年～2006年）

1964年、OB/OGからの会議再開を望む声に応え、会議創始者の一人である故板橋並治が理事長を務める財団法人国際教育振興会の全面的支援の下に、会議が再開された。第16回会議はリードカレッジで開催され、77名の日本人学生と62名の米国人学生が参加した。1973年の第25回会議では、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎回テーマを設定し、期間を1ヵ月とするなど現在の会議の基本形態が整備された。日米学生会議は、70年の歴史において、学生による企画、運営という方針を貫いてきた。しかし創設時と今日で日米両国を取り巻く環境は大きく異なっており、会議の形態自体も変化を重ねている。日米両国が新たな関係の構築を迫られている現代において、日米学生会議は、創設当時の理念を受け継ぎつつ、時代の変化に対応してゆく柔軟性を求められているといえよう。

第58回日米学生会議テーマ

Examining the Future of the Japan-America Relationship within a Global Framework

二国間を超えた未来 ～伝統への回帰と私たちの挑戦～

日米学生会議は1934年、満州事変以降失われつつあった日米相互の信頼回復を目指した日本人学生たちにより創設された。この日本初の国際的學生交流プログラムは「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という創立当時の理念に基づき、様々な試練を生き抜き現在まで継続されてきた。日米学生会議は創立以来、学生の相互理解と友情、信頼関係を醸成し続け、毎夏日米交互で行われる約一ヵ月間の会議は、すべて学生の手で企画・運営されている。

第58回日米学生会議は「二国間を超えた未来～伝統への回帰と私たちの挑戦～」”Examining the Future of the Japan-America Relationship within a Global Framework”というテーマの下、ニューヨーク州イサカ、ワシントンDC、オクラホマ、サンフランシスコで開催される。

様々なネットワークが相互に結びつき依存し合う現在、二国間関係を超えたグローバルな枠組みの中で日米関係を見つめなおすことなしに、日本そして世界の未来を考えることはできない。それは、創立以来日米学生会議が掲げてきた理念に回帰することでもある。テロリズム、環境問題、貧困、グローバル化、地域主義、非国家主体、情報化社会など様々な要因によって世界情勢は日々めまぐるしく変化している。そんな現代において、世界の平和とは何か、日米関係は其中でどのような位置にあるのか。そして、その実現のために私たち学生にできることは何か。第58回日米学生会議の活動を通し、参加者一人ひとりの答えを見つけて欲しい。その答えを胸に、それぞれの未来へと歩き出してもらいたい。それが、私たちにとっての挑戦である。

以上の目的を達成するために、本会議における各分科会の活動やプロジェクトは、それぞれ明確な目標を設定し、その成果を社会へ発信することを目的とする。それを参加者全員が共有することで、日々のグループワークやフィールドトリップは全体の流れの中で意義付けられ、相互に結びつくことになる。多種多様なテーマと切り口を持った活動は有機的に繋がり、その中で自由な発想と柔軟性を持つ学生たちが活発に意見を交わす。こうした異なる価値観を持つ参加者同士の協働によって、より深い相互理解と信頼関係の醸成、人間的成長が実現されることを切に願い、第58回日米学生会議を開催する。

第58回日米学生会議活動概要

事業内容

主催

財団法人国際教育振興会

後援

外務省 文部科学省 米国大使館 日米文化センター

財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会

企画・運営

第58回日米学生会議実行委員会

期間

2006年7月27日～8月21日

開催地

アメリカ合衆国 ニューヨーク州イサカ、ニューヨークシティ、ワシントンD.C.、
オクラホマ州ノーマン、カリフォルニア州サンフランシスコ

参加者

日本側・米国側 各36名(実行委員各8名を含む)

会議運営

第58回日米学生会議は、2005年度開催された第57回日米学生会議の参加者から選出された日米各8名の実行委員からなる第58回日米学生会議実行委員会によって運営される。第58回日米学生会議実行委員会は、主催団体である財団法人国際教育振興会および後援団体の協力・監督のもと、本会議のテーマ、期間、開催サイトや分科会の決定、参加者の選考、会議に必要な資金調達のための財務活動など、会議の運営に関わる諸般の活動を行い、本会議では会議全体のコーディネートをを行う。

会議の運営は、第58回日米学生会議実行委員会発足時に実行委員全員で制定した実行委員会の憲法である”Tokyo Agreement”に則って行われ、会議テーマに掲げた目標を達成すべく、委員全員が一丸となった会議運営を行う。

第58回日米学生会議参加者一覧

日本側実行委員

井上裕太（委員長）	慶応義塾大学法学部政治学科	4年
島村明子（副委員長）	東京大学法学部	3年
井上雅章	慶応義塾大学大学院理工学研究科	1年
唐澤由佳	慶応義塾大学経済学部	3年
国松永喜	明治大学政治経済学部	4年
生板沙織	慶應義塾大学総合政策学部	3年
波多野綾子	東京大学教養学部	4年
山田裕一朗	同志社大学経済学部	4年

日本側参加者

青山泰司	東京大学法学部	4年
池田早希	千葉大学医学部	3年
大原学	早稲田大学人間科学部人間基礎科学科	4年
小笠原瞳	熊本大学法学部法学科	4年
尾田亜沙美	同志社大学経済学部経済学科	3年
笠井寛子	国際基督教大学教養学部国際関係学科	3年
川口耕一朗	東京大学教養学部文科一類	2年
菅家万里江	慶応義塾大学文学部人文社会学科	2年
小迫由衣	東京大学教養学部文科一類	2年
佐藤友紀	早稲田大学大学院アジア太平洋研究科	1年
真田雄太	立命館大学法学部政治行政学科	2年
杉山亮太	慶應義塾大学法学部政治学科	2年
須藤淳	早稲田大学政治経済学部経済学科	3年
高井竜輔	東京大学文学部フランス文学科	3年
高橋裕美	青山学院大学法学部法学科	4年
長崎智裕	国際基督教大学教養学部国際関係学科	3年
永田隆介	東京工業大学大学院理工学研究科	1年
平岡萌子	上智大学国際教養学部	1年
廣瀬裕子	慶応義塾大学経済学部	2年
黄アラム	上智大学国際教養学部比較文化学科	3年
松田浩道	東京大学教養学部文科一類	2年
三窪英里	慶応義塾大学法学部政治学科	3年
宮崎あゆみ	立命館大学国際関係学部国際関係学科	3年
源飛輝	早稲田大学法学部	2年
安田雅治	千葉大学文学部行動科学科	3年
安田立	岐阜大学医学部	3年
由井啓太郎	東京大学文学部フランス文学科	2年
王雄揆	東京大学教養学部文科二類	2年

アメリカ側実行委員

Mr. Ken-Cheng Hsiang	Washington and Lee University	Economics / East Asian Studies	Junior
Ms. Yoko Kamitani	George Washington University	International Affairs	Post Graduate
Mr. Stanton Lawyer	American University	Comparative Regional Studies	M.A.
Mr. Geoffrey Lorenz	Duke University	Political Science	Senior
Ms. Rachel Olanoff	Tufts University	Biopsychology / Asian Studies	Junior
Mr. Benjamin Seligman	Cornell University	Biological Science	Junior
Mr. Sheehan Scarborough	Harvard University	Government	Junior
Mr. Loc Van	Cornell University	Biology / Business	Junior

アメリカ側参加者

Ms. Risa Abe	Earlham College	Spanish and Hispanic Studies	Junior
Ms. Tierney Ahrold	Duke University	Japanese / Psychology	Senior
Ms. Erica Carson	Washington and Lee University	Undeclared	1st Year
Ms. Eun Kyung Choi	Corcoran College of Art & Design	Digital Media	Senior
Mr. Michael Collins	Harvard University	History	Junior
Ms. Karenth Dworsky	University of Alaska Anchorage	Political Science	Senior
Ms. Elissa Furutani	Princeton University	History of Science	Junior
Mr. Lucas Hannell	University of Pennsylvania	International Studies & Business	1st Year
Ms. Jennifer Hayden	Boston University	Int'l Relations / East Asian Studies	1st Year
Mr. Farhang Heydari	Harvard University	Government	Junior
Ms. Kelly Hill	Hendrix College	International Relations / English	Sophomore
Mr. Kendall Jackson	University of Oklahoma	German	M.A.
Mr. Jason Knudson	Occidental College	Diplomacy / World Affairs / Asian Studies	Sophomore
Ms. Sonya Kuki	University of Southern California	Business Administration	Sophomore
Mr. Justin Long	Cornell University	China-Asian Pacific Studies	Sophomore
Ms. Alissa Marque	University of California, Berkeley	Political Science	Junior
Ms. Paninya Masrangsang	Smith College	Chemistry	Sophomore
Mr. Brian Miller	Sonoma State University	Business Administration	Senior
Mr. Hiroyuki Miyake	Macalester College	Economics / Asian Studies	1st Year
Mr. Daniel Orlowitz	Simon's Rock College of Bard	Asian Studies / Electronic Media & Arts	Senior
Mr. Andrew Ruffin	Duke University	Economics / Political Science	1st Year
Mr. Casey Samulski	Sarah Lawrence College	Creative Writing	Junior
Mr. Patrick Sheridan	Washington and Lee University	East Asian Languages & Literatures	Junior
Ms. Erika Sloan	Princeton University	Psychology	Junior
Ms. Rachel Strange	University of Oklahoma	East Asian Studies	Sophomore
Ms. Morgan Swartz	Kalamazoo College	International & Area Studies	Senior
Ms. Mako Tagata	University of Nebraska, Lincoln	Journalism	1st Year
Mr. Phillip Vu	Duke University	Economics / Japanese	Sophomore

ブッシュ大統領からのメッセージ



THE WHITE HOUSE
WASHINGTON

July 19, 2006

I send greetings to those gathered for the 58th Japan-America Student Conference.

The United States and Japan today celebrate one of the most accomplished bilateral relationships in modern times. Our nations are bound by common interests, values, and goals, and we are building on our strong global partnership as we continue to promote peace and prosperity throughout the world. Since 1934, JASC has served as an educational and cultural student exchange that has helped promote diplomacy and strengthen ties between American and Japanese citizens.

I appreciate all the participants of JASC and those who encourage international relations. Your efforts contribute to the advancement of hope and democracy around the globe.

Laura and I send our best wishes for a successful conference.

A handwritten signature in black ink, appearing to be "George W. Bush".

メディア掲載



THE OKLAHOMAN

THE STATE NEWSPAPER SINCE 1907

AUGUST 10, 2006

NEWS

4A... | THURSDAY, AUGUST 10, 2006

NEWS

Japanese students get taste of Oklahoma

By Judy Gibbs Robinson
Staff Writer

NORMAN — Three dozen Japanese college students are getting a taste of Oklahoma this week during a first-ever trip to America's heartland for a 72-year-old cultural exchange program.

The Japan-America Student Conference, founded in 1934, usually meets in cities and campuses on the East and West coasts, Executive Director Regina McGarvey said.

"The students actually came to me at the end of last year's conference in Japan and said, 'We want to learn about the 'red state' phenomenon, and we want to visit a mega church,'" McGarvey said.

The four-day stay at the University of Oklahoma also may open eyes among the 36 American students traveling and studying with the same number of Japanese students.

"I've been looking forward to this for a year," said Sheehan Scarborough of Harvard University. "I've only been to the East Coast and the West Coast and I knew America is more than that."

American Indian debut

Every year, 72 students — half Japanese and half American — are chosen to travel together in one country or the other while studying and discussing global problems of their choosing.

The University of Oklahoma agreed to host the students for one of the conference's three weeks. They already have visited Cornell University, New York City and Washington. Their last stop will be San Francisco.

ternational issues they have chosen.

The conference ends with presentations on what they've learned.

"We fill their head with more knowledge than they can handle," McGarvey said. "But the real lasting thing that happens ... they become really, really good friends."



BY JACONNA AGUIRRE, THE OKLAHOMAN

Loc Van, a student at Cornell University, looks over an American Indian publication during Wednesday's session of the Japan-America Student Conference at the University of Oklahoma.

Students arrived on three flights Tuesday night and attended a welcome reception. They spent much of Wednesday learning about contemporary American Indian issues from a who's-who of Oklahoma tribal, academic and cultural leaders.

The session was an eye-opener for Marie Kanke of Keio University.

"The only thing I know about the Native American is a movie about the western United States," Kanke said. "I was really impressed that they have tradition but also begin to integrate," she said.

American students also had plenty to learn, said Jason Knudson of Occidental College.

"People in this conference are from all around the United States, so a lot of people don't know that much about Native American culture," he said.

Global ties sought

Japan also has indigenous people, and one goal of the Oklahoma stop is to allow students to make connections between the groups.

"We're hoping students can draw comparisons between issues in the U.S. and Japan and apply it in a global context," said Ken-Cheng Hsiang of Washington and Lee University, the Oklahoma site coordinator.

Today, the students plan to visit the American Indian Exposition in Anadarko. Friday, they will see the Oklahoma City National Memorial, the National Memorial Institute for the Prevention of Terrorism and the state Capitol.

Between excursions, the students work in teams studying and discussing in-

さらに交流深めよう

日本とアメリカの学生が1カ月の共同生活と議論、研修を通して相互理解を深める「日米学生会議」の参加者72人が14日、最終訪問地のサンフランシスコに到着し、SF総領事館で歓迎レセプションが開かれた。参加者らは積極的な交流を続けた。

日米学生会 参加者がSF到着

学生たちは7月24日から、ニューヨーク、ワシントンDC、オクラホマ州ノーマンに1週間ずつ滞在、二国間を超えた未来―伝統への回帰と私たちの挑戦―をテーマに、サブカルチャー、国際開発、グローバル企業、科学の発展と社会での受け止められ方など7つの分科会で議論を続けてきた。グラウンドゼロやオクラホマ連邦政府ビルなどテロ事件の跡や、連邦政府施設の見学、文化プログラムを通して、交流を深めてきた。



ユニオンスクエアで「よさこい」を披露する日米の大学生70人

分野で両国関係に貢献する人材を輩出している。レセプションには、ベイ



学生らと談笑する山口首席領事(中央)

SFでは、20世紀初頭に移民局が置かれていたエントネルアイランドを訪れるほか、企業を見学する。最終日の18日に全体会議を開き総括する。アメリカ側を代表してあいさつしたシロクさんは、「3週間を共にした今、学んだことを共有し、後輩のためにプログラムをさらに改善していくべきだ。SFでグラウンドファイナレを迎えた」と話した。

レセプションを主催した山口一義首席領事は「国際関係に携わるならば、物事を批判的に見る姿勢が大切。強い日米関係に貢献できる人材になつてほしい」と激励した。

今年、58回目の日米学生会議は、1984年、満州事変で悪化した両国関係を憂慮する日本人学生らが創設。宮沢喜一前首相や、航空大手エアバス・ジャパンのグレン・フクシマ社長ら、多彩な

エリア在住の学生会議OBも招かれた。

ユニオンスクエアで元氣に「よさこい」

日程2日目の15日、ユニオンスクエアで学生たちがそろいの赤いTシャツ姿で「よさこい」を披露した。SFの空に威勢のいい掛け声に、通り掛かった人も楽しそうに見入り、中には飛び入り参加する者もいた。

パフォーマンスを思い立ったのは、早稲田大の「よさこい」サークルに所属する大原学さん。参加者のきずなを強めようと呼び掛け、会議の合間を縫って練習をした。

パフォーマンスを終え、大原さんは汗をぬぐいながら「ほんのちよつとしか練習しなかったのですが、予想外にうまくい出になったらうれしいです」と満足そうだった。

略語について

日米学生会議には参加者が日常的に用いる略語・慣用語があり、それらは本報告書にも登場しています。以下、一覧の形でよく使われる略語を紹介いたします。

- ・ JASC (ジャスク) : 「日米学生会議(Japan America Student Conference)」の略
- ・ JASCer (ジャスカー) : 日米学生会議参加者の意。過去の参加者も含む場合がある。
- ・ JASC, Inc : アメリカ側主催団体 “The Japan-America Student Conference, Inc”の略
- ・ EC : 実行委員あるいは実行委員会 Executive Committee の略
- ・ AEC : アメリカ側実行委員会 American Executive Committee の略
- ・ JEC : 日本側実行委員会 Japanese Executive Committee の略
- ・ デリ : 参加者 delegation の略
- ・ ジャパデリ(Japadele) : 日本側参加者 Japanese Delegation の略
- ・ アメデリ(Amedele) : アメリカ側参加者 American Delegation の略
- ・ アルムナイ/アラムナイ : 日米学生会議の過去の参加者 alumni の意。
- ・ サイト : 本会議開催地の意。サンフランシスコサイト等。
- ・ テーブル/RT : 分科会/Round Table の意。参加者はいずれかの分科会に所属する。
- ・ リフレクション : Reflection、反省会の意。
- ・ JLP : Japadele Lead Project の略。日本側参加者主導の文化交流企画を指す。

第2章

事前活動

事前活動とは.....	12
春合宿.....	12
藤原帰一氏基調講演.....	13
ソーシャルイノベーターズ Vol. 1.....	14
国際コミュニケーション基礎講座.....	15
ディベートとロジカルシンキング講座...	16
防衛大学校見学.....	17
ソーシャルイノベーターズ Vol. 2.....	18

事前活動とは

第58回日米学生会議では、夏の本会議に向けた準備として事前活動を行った。事前活動は、会議参加者の顔合わせに始まり、現在進行形の国際社会のトピックについてのレクチャー、コミュニケーションスキルの講座など、本会議をより充実させ、円滑に進行するための活動を指す。本章では、これらの事前活動の様子を紹介する。

春合宿

(2006年5月5日～7日)

2006年5月5日から5月7日にかけて東京新宿区の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された春合宿において、第58回日米学生参加者全員は初めて顔を合わせた。参加者の自己紹介、実行委員による日米学生会議の歴史説明、主催団体である財団法人国際教育振興会からの事業説明、分科会オリエンテーション、基調講演、ワークショップも行われるなど充実した三日間に、参加者はそれぞれのモチベーションと会議の意義を再確認した。



春合宿参加者感想

(第58回日米学生会議参加者 佐藤友紀)

2006年5月5日～7日、国立オリンピック記念青少年総合センターにて第58回日米学生会議（以下 JASC）春合宿が開催された。初めて全員が集う場ということもあり、各々が想いを胸に全国各地から集結した。

3日間は、自己紹介に始まり、英語でのディスカッション、2つの基調講演、パネルディスカッション、コミュニケーションワークショップ、OB・OGの方々との交流レセプション、そして各分科会に分かれ、これからの方向性の追求と発表を行い、夏に向けての課題を明らかにした。発表しあう事で、他分科会との関連性も発見することが出来たと同時に、莫大な課題の量と不安に駆られた仲間も多いだろう。実際、私もその一人だが、それ以上にやり遂げた先にあるものが大きい事は明らかなので、この不安は直に刺激へとシフトした。

春合宿の3日間で、私たちは何を学び、何を覚え、何を感じたのだろうか。日米学生会議の目的は、「世界平和の構築」である。それに対して何かしたい、共に考えて行きたい、と言う共通の想いを持った私たち。既にこの想いを共有していた私たちは、秋山社長のお話にもあったように、互いに信頼し、尊敬し合い、そして日米学生会議の歴史

とそれに携わることの出来る誇りを持つことを、この3日間で学んだのではないだろうか。

委員長を始め、実行委員8名のこれまでの膨大な努力は、参加者側に直球ストレートで伝わり、その熱い思いを共有出来る喜びを参加者28名は感じたのではないだろうか。それは参加者の春合宿中の真剣な雰囲気と、常に何かを得ようとする積極的に捉えるべき貪欲な姿勢、合宿終了後の参加者のモチベーションの高さを見ていると明確だ。

自らを除く35名一人ひとりと語り合う時間的余裕を持つことは出来なかったけれど、もっと話したい、もっと一緒に居たいと思わせるメンバーばかりと出会うことができ、今から夏が待ちきれない。

JASCを知った瞬間に、JASCに一目惚れした8人プラス28人。

この春合宿で、JASCと36人の恋がスタートしたのではないだろうか。

この恋の未来は、私たちの手に掛かっている。この恋を実らせる、つまり2006年の日米学生会議を成功へ導く鍵となるには、各々が責任と誇り、そして春合宿で得た絆と高い意識を胸に、着実に前進して行くことが不可欠である。その為の強固な基盤を作ることの出来た大変充実した3日間であったのではないかと考えている。

藤原帰一氏基調講演（第58回日米学生会議春合宿内企画）

第58回日米学生会議春合宿においては、今後の活動の指針となるべく複数の講演会・パネルディスカッションなどの企画を行った。初日に行われた東京大学の藤原帰一教授によるレクチャーでは、「日米関係の現在～Japan-US Relations: Past, Present, Future～」と題し、東南アジアの外交における日米関係の意義を学んだ。また、対米関係において、現在少ない親米リベラル思考のあり方についても解説を受けた。



基調講演参加者感想

（第58回日米学生会議参加者 黄アラム）

As a foreign participant of 2006 Japan-American Student Conference, it is such a meaningful experience to be able to perceive Japan-US relations from a third-person's perspective and get a whole picture of how US-Japan alliance functions in East Asia's overall framework. Professor Fujiwara has provided this basic understanding of Japan-US relations and how it has evolved through time until it reaches the turning point of the 9.11 incident.

The part of the lecture that has provoked me the most was towards the end when he has mentioned

that ‘Asia’s diplomacy and Japan-US relations are NOT separate entities but must be considered in relation to the other’ - critical judgment is crucial in varying circumstances. This has also reminded me about the current situation of Japan’s lukewarm attitude towards the East Asian Community (EAC) agenda, in contrary to the efforts of other countries in East Asia hoping for regional integration. Japan has solely emphasized the importance its relations with the US as its cornerstone of foreign policy and has been prudent in taking any actions that may jeopardize its relations.

However, as Professor Fujiwara might have implied, I realized that Japan must understand that promoting East Asian regionalism may not only serve Japan’s interest but also in maintaining and strengthening the US alliance. Just like how Britain’s Prime Minister, Tony Blair, has recognized that the stronger Britain’s influence in the European Union, the stronger its relationship with the US, Japan, by taking active participation in the process of regional integration, may find itself more important to the United States. A possibility of Japan to become *a bridge to Asia* - as some scholars in East Asia had already been keen about - is not all pipe dream.

As the theme of our 58th Japan-America Student Conference indicates - ‘the Future of Japan-America Relationship within a Global Framework’ - the importance of Japan-US relations cannot be emphasized enough. Recognizing its role and carefully scrutinizing the reality cannot be neglected. I believe that Professor Fujiwara’s lecture has provided us, the Japan Delegates, a courageous ‘first-step’ towards this approach.

ソーシャルイノベーターズ Vol.1 (第58回日米学生会議春合宿内企画)

日米学生会議では、企業(=産)、学生(=学)、行政(=官)の社会的役割を再考し、今私たちが仕事を通して生み出せる価値を模索していきたいと考え、ビジネス分野の企画を設定した。その一つが本企画である。

第一部では、株式会社インテグレックス代表取締役社長の秋山をね氏より、「仕事を通して実現したいこと」と題したご本人のキャリアパスと将来の展望のお話を頂いた。第二部では、秋山氏に加えて経済産業省の深宮智史氏、AI コンサルティングジャパン代表取締役の松瀬理保氏、さらに第58回会議参加者の源飛輝と廣瀬裕子の二名が、NPO 学習学協会代表理事の本間正人氏のファシリテーションの下、企業の役割についてのパネルディスカッションを行った。



ソーシャルイノベーターズ Vol.1 参加者感想

(第58回日米学生会議参加者 廣瀬裕子)

CSR、企業の社会的責任。キャッチーな名前であり、最近良く耳にする言葉ではあるが、その文字を見ただけではイメージが湧きにくく、深く追求したことはなかった。しかし、国際協力という分野への興味が深まり、同じ興味を持つ学生と話をしているうちに今現在取り組んでいる活動と、就職し社会に出た時の仕事がいかにかけ離れているかということに驚いた。その想いを企業のCSR部に活かせないかと考えるようになり、今回のパネルディスカッションに思い切って応募した。

講師の方々は私のみでなく、会場の方々の疑問をまっすぐ受け入れ、丁寧に分かりやすく説明して下さった。いただいた答えは、企業のCSR部を発展させるということよりも、社員一人ひとりがそのような意識を持つことが大切だということ。会社を構成しているのは一人ひとりの人間。目に見える結果やこの場合は具体的な社会貢献活動を求めがちだが、まずは一人ひとりの想いが大切だということを教えていただいた。

そして、秋山氏も想いの大切さというものを講演会で強調されていた。想いから新たなステップが踏める、想いがあるからこそ、困難にも立ち向かえる。最初はその時代に合っていないと思われるチャレンジでも、諦める前に三年は続けてみる。どんなことも想いから始まる。このようにCSRについてだけでなく、自分の根本にある想いを大切にすることを学んだとても基調な機会だった。これからたくさんのお会いがあり、たくさんの想いが生じるであろう私達にとってとても心強いメッセージをいただいた。

国際コミュニケーション基礎講座 (第58回日米学生会議春合宿内企画)

コミュニケーションスキルは、日々の生活上はもちろん、日米学生会議のように様々なバックグラウンドを持つ人間が集う場所ではきわめて重要な能力である。このため、本春合宿においてもコミュニケーションスキル講座を開催した。

ソーシャルイノベーターズ講演会でファシリテーターを務めたNPO 学習学協会代表理事の本間正人氏に、「国際コミュニケーション基礎講座」と題した講演をして頂いた。ブライندウォークを初め



する参加形式のワークショップによって、言葉の重要性、説明が不足している場合の不安感などを再認識した。

国際コミュニケーション基礎講座 参加者感想

(第58回日米学生会議参加者 小笠原瞳)

春合宿2日目の午後、「国際コミュニケーション基礎講座」と題したワークショップが

開かれた。「学習学」を提唱される本間氏には、学習することが人類の強みであり、そのためコミュニケーションがいかに大事かということを様々なアクティビティも織り交ぜながら熱心にご指導いただいた。

ペアになってお互いの趣味や性格を推測して言い当てるゲーム、目を閉じたパートナーをもう一人がガイドするブラインドワーク、自らのアイデンティティを円グラフで表すアイデンティティ・ポートフォリオなど、実際体を動かし、五感を活用することで様々な発見があり、ゲームを通じて JASCer の親睦も一層深まった。

本間氏のまさに「エンターテイナー」と呼ぶにふさわしいユーモア溢れる言動に、JASCer は終始大爆笑で、3 時間半という長時間にもかかわらず、あっという間に時間が過ぎていった。英語学習方法についての本間氏ならではのアドバイスもあり、今後の勉強へのモチベーションも上がる充実した時間だった。

ディベートとロジカルシンキング講座

(2006 年 5 月 31 日)

5 月 31 日に文京区本郷の Leanology, Co. Ltd. 事務所において NPO 学習学協会代表理事の本間正人氏による、「ディベートとロジカルシンキング」ワークショップを行った。第 58 回日米学生会議春合宿において行われた同氏の「国際コミュニケーション基礎講座」に引き続くものとして、「デート代は男性が負担すべきか？」という日常的なテーマを通じて、ディベートスキルの実践を行い、またその日常的なテーマについてのディベートは参加者の交流をより深める結果となった。



ディベートとロジカルシンキング講座 参加者感想

(第 58 回日米学生会議参加者 笠井寛子)

NPO 学習学協会代表理事、本間正人氏を講師として迎え、ディベートとロジカルシンキング講座を行った。まずは、アイスブレイキングとして、アメリカの全州をアルファベット順に並べ替えるというアクティビティを 5 人程度の班に別れて行った。これがなかなか難しく、他の班を盗み聞きする等の行為までみられるほどの盛り上がりを見せた。

本題のディベート・ロジカルシンキングとしては「デート代は男性が負担すべきか」という命題のもと、グループを賛成派・反対派に恣意的に分け、作戦タイム (15 分) ⇒ 賛成側立論 (2 分) ⇒ 反対側反論 (2 分) ⇒ 反対側立論 (2 分) ⇒ 賛成側反論 (2 分) ⇒ 賛成側まとめ (2 分) ⇒ 反対側まとめ (2 分) の順でミニ・ディベートを行った。本来は『デート代

『男性負担』に反対の男性メンバーが、『エスコートの一環として、デート代も負担すべきだ』と、たじたじの立論を行ったり、ここぞとばかりに『日本の男性はレディファーストが希薄すぎる』と、賛成論を繰り広げる女性メンバーもいたり、会場は非常な盛り上がりを見せた。

ディベート中は、強固な反論を用意するため、相手チームの立論を予想するのだが、これは『相手の立場に立って考えること』の重要性を実感するよい機会となった。ミーティングやディスカッションなどにおいて、相手が意見を言い終えるまで待てず、自分の意見をかぶせてしまうことが無意識に行われがちだが、相手の意見を真に理解するためには、最後まで相手の意見をじっくり聞き、それに対し慎重にレスポンスをすることが大切であると実感した。今日得たこれらの姿勢を、本会議中のディスカッションにぜひ活かしていきたいと思う。

防衛大学校見学

(2006年6月9日)

安全保障分野は戦後一貫して、日米関係を語る上では欠かせないキーファクターである。この安全保障分野のレクチャーを受けるため、6月9日、日米学生会議参加者は横須賀の防衛大学校を訪れた。

防衛大学校では、太田安全保障・危機管理教育センター長による安全保障講義、課業行進、また安全保障関係の蔵書では日本随一を誇る図書館において影山館長より明治から平成に至る安全保障政策の変遷の説明を受けるなど、大変充実した内容であった。

また、防衛大学校の学生らとも交流を深め、同世代の人間としてお互いの考え方を交換するなど活発な交流も行われた。



防衛大学校見学 参加者感想

非常に貴重な体験をしました。私の価値観が大きく変わった一日でした。正直にいうと、この日以前、文学部の私には、「防衛」や「安全保障」といった事柄は関係ないように思っていました。それは、別世界の出来事で、政府高官とか、軍とかそういった人たちだけが考えればよいような問題だと思っていました。(そして、それは、ほとんどの日本人が持っている感情だと思います。)しかし、今回の研修を通して、安全保障が決して他人事ではな

いということを感じました。自分の安全のために人生をかけて努力してくれている人が、確かに、そこに、存在している。そして、その人たちは、自分と何も変わらない人たちなんだということを知り、自分の無知さが恥ずかしくなりました。ある防衛大生の方が言っていました。「(相手を) 殺すのは僕たちだけれど、殺させるのはあなたたちだ。」と。自分の責任の重さを軽んじていた私は、その瞳をまっすぐに見ることが出来ませんでした。そして、その責任の重さを日本の何人の人が感じているのでしょうか。それを考えると、私たちがこの貴重な体験を通して感じたことを伝えていかななくてはならないと強く思いました。

(第58回日米学生会議参加者 菅家万里江)

ソーシャルイノベーターズ Vol. 2

(2006年7月7日)

2006年7月7日(金)、春合宿講演会に引き続きものとして国立青少年オリンピックセンターにてソーシャルイノベーターズ講演会 vol.2 を行った。最近頻繁に耳にする「企業の社会的責任」を多様な観点から考える企画として、第一部ではタリーズコーヒーージャパン株式会社代表取締役会長兼 CEO の松田公太氏に「私の夢～食を通した文化の掛け橋～」と題したご講演を頂いた。



第二部では、NPO 法人学習学協会の永堀宏美氏のファシリテーションの下、「食を通してつながる世界～日本食に秘められた可能性にかける想い～」と題したパネルディスカッションが行われた。パネルには、農林水産省の高橋一成氏、慶應大学教授の鈴木透氏らと共に第58回日米学生会議参加者の宮崎あゆみと須藤淳が参加し、学生の観点からの意見を披露した。



ソーシャルイノベーターズ Vol. 2 参加者感想

「目的」と「目標」…この二つの言葉をこれほど意識したことは、私にはなかった。タリーズコーヒーージャパン CEO の松田公太氏の講演は、私を含む多くの学生に人生の目的と目標を持つ意味を伝えたとと思う。あまりにも漠然とした「夢」よりも具体的な人生の「目的」を説く氏の姿は、私の脳裏に焼きついている。自分はどのようにありたい、会社をこのようにしたい、そういった目的を持って取り組むことが成功への条件だと松田氏は言い

切った。

タリーズコーヒージャパンは、その経営理念つまり「目的」を「食を通じた文化の架け橋」と定め、その実現のために具体的な目標設定を行い成功してきた。使命感とも言える目的は、松田氏の幼少時代の経験から来るものである。高校時代までの多くをセネガル・米国で過ごした松田氏は「日本人」としてのアイデンティティを意識するようになり、その発端となった「食」に基づいたビジネスを築いたのである。

松田氏の言葉の一つ一つは、私たち若い世代がどのように過ごすべきかを示唆していたように思われた。学生の質問にもあったように、現代の若者は「目的」を意識すること自体が難しい環境にいるのではないだろうか。そのような中で、目的を持つためには毎日の生活で感じたこと、考えたことを大切にすることだと思えた。特別な生活環境におかれなくても、このような事を継続することによって、自身の目的＝使命が見つけれられるような気がした。21歳の夏に氏の講演を聞いたことを幸運だと思う。

引き続き、パネルディスカッションでも多くの刺激を受けた。慶応義塾大学の鈴木透教授は「食を他者との関係の入り口」として、食の持つ文化的要素の重要性を説いた。米国が現在抱える、人口構成や対外関係といった問題へのアプローチの一つに、食文化を通じた多様性への敏感さを挙げている点は非常にユニークであった。

一方、農林水産省の高橋一成氏は、日本食を通して繋がる世界を意識していたように思われた。日本食に対する需要の高まりは、日本の農産物の輸出増加に貢献すると同時に日本自体への理解を深めることに繋がると氏は言った。

両講師の意見は、「食の多様性」という観点で異なっていた。鈴木教授は特定の日本食というものは存在せず、他の食文化との融合の産物として日本食を捉えているのに対して、高橋一成氏は、「純粋な日本食」の重要性を説いていたように思われた。この二つの意見は対立的なものではなく、補完的なものと私は考える。寿司などの古来より続く「いわゆる日本食」を輸出することで、日本を理解してもらうことは重要であると同時に、海外からの文化を融合させて生まれた「日本食」も食の歴史を考えるのと同じく重要だからである。

今回、このような貴重な場に学生パネリストとして参加できたことに感謝すると同時に、もっと多くの学生に日米学生会議の存在をアピールしたいと思うようになった。

(第58回日米学生会議参加者 須藤淳)

第3章

本会議・サイト活動

本会議・サイト活動概要.....	22
直前合宿.....	22
コーネルサイト.....	23
ニューヨークシティサイト.....	25
ワシントン D. C. サイト.....	26
オクラホマサイト.....	30
サンフランシスコサイト.....	33

本会議・サイト活動概要

1934年第1回の日米学生会議は、当時の満州を含む日本国内各地を移動しながら、日本の実際の姿をアメリカ側参加者に見せることを目的としていた。以来、伝統的に日米学生会議本会議は日本あるいはアメリカ合衆国の各地を移動しながら開催されている。訪れる土地はサイトと呼ばれ、その年の会議テーマに沿った形で選択される。目的を持って選択されたサイトでは、日米双方の参加者が共に施設訪問、講演会、分科会活動などを行い、その過程で意見の交換、交流を行っていく。現代社会において重要な施設や機関を日米双方の参加者が共に訪れることは、本会議以外では有り得ない活発な意見交換を生み出し、また各サイトを回りながら1ヶ月の共同生活を行うことは、他に類を見ない濃密な相互交流の機会となる。

以下、第58回日米学生会議のサイト活動の様子を紹介する。

直前合宿

(2006年7月26日～7月27日 東京)

アメリカ開催である第58回日米学生会議では、渡航を前に参加者全員が国立青少年オリンピック記念センターに集合し直前合宿を行った。

一泊のスケジュールで行われた直前合宿では、分科会の中間発表、それに対する主催者財団法人国際教育振興会側からの講評を始め、本会議前最後の勉強会となる大江博東京大学教授及び橋爪大三郎東京工業大学教授による講演が行われた。

アメリカ側参加者と合流する本会議に向けての決意を新たにした参加者は、期待と緊張の面持ちでバスに乗り込み、成田空港より一路NY州J.F.K.空港へと旅立った。



コーネルサイト

(2006年7月27日～7月30日 ニューヨーク州イサカ、コーネル大学)

コーネルサイトは第58回日米学生会議最初のサイトである。本サイトでは、初めて出会うことになる日米双方の参加者のアイスブレイキングと今後1ヶ月の活動予定確認、分科会のオリエンテーション等を行う。学内に滝すら有する雄大で落ち着いたコーネル大学の4日間は、参加者が打ち解ける環境を作り、以後のサイト活動の基盤を作った。

7月27日

長時間のフライトを終え J.F.K.空港に降り立った第58回日米学生会議日本側参加者は、空港で出迎えるアメリカ側実行委員と共にバスに乗り込み、最初のサイトである N.Y.州 Ithaca、コーネル大学へ向かった。

到着した時点で既に夜10時を回っていたが、コーネル大学で出迎えるアメリカ側参加者と出会った瞬間、長時間の移動の疲れも吹き飛び、参加者全ての表情が輝いた。

第58回日米学生会議が始まった。



7月28日

午前9時、澄み渡る青空の下、優しい緑の芝生でブリーフィングを行うことでコーネル大学での活動がスタートした。この日は、異文化コミュニケーションを行う際の注意事項説明、アメリカ側主催団体 JASC, Inc.の Robin White 代表及び Regina McGarvey 氏による会議の意義の説明、またハラスメントに対する事前の注意等が行われた。夕方には日米参加者合同では初めてとなる分科会セッションが設けられ、夜には過去の参加者や会議への協力者を招いたオープニングセレモニーが行われた。



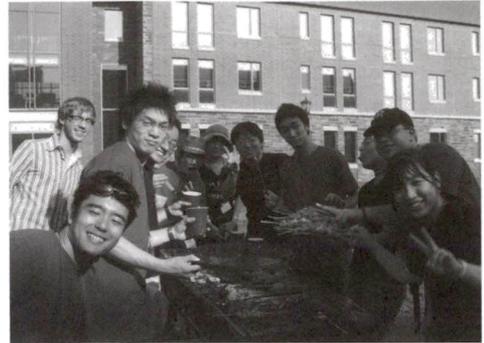
7月29日

分科会セッションで始まった7月29日は、午後にはドッジボールやスキット交換による交流も行われた。夕方には初めての自由時間が設けられ、大学敷地外のダウンタウンでの食事や買い物など、アメリカ風のアフター5を日米双方の参加者が入り混じって過ごした。



7月30日

前日と同じく分科会セッションで始まった本会議 4 日目は、早くもコーネルサイト最終日である。午後にはコーネル大学の教授陣による国際政治についてのパネルディスカッションが行われ、日本側参加者はさながら米国に留学した様な感覚で講義を体験した。夕方には日本側参加者主体の JLP (ジャパデリリードプロジェクト) 企画が行われ、日米の参加者が焼き鳥と焼きそばのディナーを楽しんだ。



コーネルサイト 参加者日記

朝7時半に目が覚めると、20 時間にも及ぶ昨日の旅の疲れにも関わらず不思議とわくわくした感情につつまれていた。シャワーを浴び、服を着替えて朝食の場所へと向かうと、そこには多くの JAScer 達がおおり、ベーグルを頬張りながら笑顔で楽しそうに話している。この光景を見たとき、「ああ、いよいよ日米学生会議始まったんだな」と初めて実感した。

本会議 1 日目から日程はハードでかつ充実したものであった。午前中は EC の紹介とこれからの日程等の説明を受け、お互いの文化や行動特性を学び、Jasc としてどのような姿勢で臨むかをみなで共有した。

その後に長い間外交に携わってきた Mrs. Robin より、どのように人脈を作るか、またその大切さについてレクチャーを受けた。それに刺激され、今日 1 日みな積極的にコミュニケーションを取ろうと努力していたと思う。

午後は初めての分科会と、ビジネスフォーマルでのレセプションを経験した。これから一緒にやっていくメンバーを知り、また JASC の軌跡を知ることで、学生会議が様々な人の支えで成り立っていることを実感し、改めて身の引き締まる思いがした。

58th JASC の船は、始まりの合図と共に動き出した。

(第 58 回日米学生会議参加者 大原学 7 月 28 日日記より抜粋)

ニューヨークシティサイト

(2006年7月31日～8月1日 ニューヨーク州ニューヨークシティ)

第58回日米学生会議2つ目のサイトは、恐らく世界で最も有名な都市、ニューヨークシティである。世界の経済の中心地であり、ファッションの発信地である街は同時に、2001年9月11日の悲劇を経験した街でもある。参加者も打ち解け始めるこのサイトでは、日米学生会議最大の目的である相互理解のための活動が本格的に開始される。日米の参加者が共にアメリカのビジネスのあり方を学び、また世界の流れを変えた震源地である世界貿易センタービル、のグラウンドゼロを訪れる事で活発な意見交換が開始されるサイトとなる。

7月31日

前夜にパッキングを済ませた参加者は、午後1時から予定されている企業訪問のため、コーネルを朝6時出発、ニューヨークシティに向かう…、はずであった。ところがチャーターしたはずのバスが来ないという大トラブルが発生する。いつバスが来るかも分からない状況に実行委員全員が顔面蒼白となる脇で、日米の参加者はなんと、サンフランシスコで予定されているよさこいダンスなどの練習を始めた。参加者は文句を言わないどころか、自発的に会議のイベントのための練習を始めたのである。実行委員にとっては、トラブル中にも会議成功への手ごたえを感じた朝となった。

目的地に着いたのは午後4時、予定されていたJapanese-American Associationでのレセプションの後、眠らない街のトワイライトを散策した。

8月1日

トラブルのため前日ニューヨークシティのビジネス面を見ることが出来なかったが、この日は政治面を見る事が出来た。午前中はあのグラウンドゼロを訪れ、道義性について、悲劇について、何故9.11が起きたのかについて、参加者の自発的な議論が行われた。午後には国際連合に本政府代表部を訪れ、次席代表である北岡伸一大使から日本の常任理事国入りについての講演を受けた。

夕方にはこの街に名残惜しいものを感じつつも、ワシントンD.C.に向かうバスに乗り込んだ。



ニューヨークシティサイト 参加者日記

今日はグラウンドゼロ・国連訪問の後にワシントン D.C.へ移動を行った1日だった。グラウンドゼロは、高層ビル群に平然と存在していた。現在は記念館を建設するための工事が進行中で、遠くから見るとそこが単なる大都会の中の工事現場の1つに見えたことに、違和感を覚えた。現場に近寄ってみると、工事中のフェンスの周りには、9月11日にアメリカで何が起きたのかを時系列に従って詳しく説明するプレートと、被害に遭った方たちの名前を並べたプレートが掲げられていた。9月11日の時系列のプレートを見てみると、アメリカ人参加者の「あのとき自分は…をしていた」という会話が聞こえてきて、ワールドトレードセンターが崩壊した瞬間、自分がどこで誰と何をしていたかを今でも鮮明に覚えている人や、後から知ったのだが、未だにグラウンドゼロの場に立つのは辛すぎると、訪問を避けた人がいたことを知った。また、被害に遭った方たちの名前は、“Hero”としてプレートに掲げられていて、その Hero という言葉の解釈について深く考えることとなった。9.11がアメリカに与えた影響について深く考える一日となった。

(第58回日米学生会議参加者 笠井寛子 8月1日日記より抜粋)

ワシントンD.C. サイト

(2006年8月2日～8月8日 ワシントンD.C.)

ニューヨークシティが経済の中心とすれば、ワシントン D.C.は政治の中心である。ワシントン D.C.では、連邦議会やホワイトハウス、国務省など、政治の中核となる施設を訪ねることでアメリカ政治の構造を見る事を目的とした。また、アメリカ政治の中心地から世界の諸問題を見るための企画として、中国人参加者を招いた Trilateral Forum、そして世界各地の紛争問題を紛争地域出身者と考える Conflict Resolution Forum を開催した。ハードスケジュールに加え酷暑で疲れが出始めた時期であったものの、議会やホワイトハウス、世界銀行の見学など、第58回日米学生会議テーマ文“Examining the Japan America Relationship within a global Framework”を考えるにあたり重要な機会となった。

8月2日

ワシントン D.C.サイト初日となるこの日の午前中は、これまでの2サイトの経験を全員で振り返る Reflection を行い、頭の切り替えと経験の整理を行った。

午後にはアメリカ連邦議会を見学し、上院議会での審議の様子を直接見学する事が出来た。ホテルに戻ってからは、JLP 企画第2弾となるお好み焼き企画が行われ、ホテルの宿泊客を巻き込んだディナータイムを過ごした。



8月3日

ワシントン D.C. サイト 2 日目のこの日は早朝から地下鉄で、中国人留学生を招いての Trilateral Forum を行った。Trilateral Forum は第 57 回日米学生会議より継続された企画で、中国人留学生と共に国際政治についての講演を聞き、意見を交わすものである。

夕方からは在米日本大使公邸にてレセプションを受け、米国における日本外交中枢の雰囲気を感じた。久しぶりの日本食は日本側参加者達にも日本食を再評価させる機会となった。



8月4日

3 日目のこの日は、早朝よりアメリカ国務省を訪れ、施設見学と東アジア外交に関するブリーフィングを受け、日米双方の参加者からの質問にもお答え頂いた。午後にはホワイトハウスを見学し、館内の設備や歴代大統領の肖像、ニュースでよく見る中庭を見学した。セキュリティの都合上カメラが持ち込めなかったが、アメリカの中枢の画は参加者の記憶に残ったものと思われる。

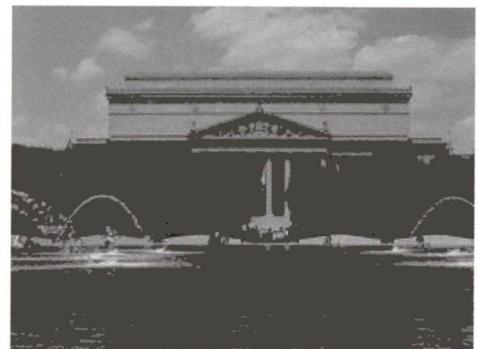
夕方の分科会セッションの後、過去の参加者とキャリアについて懇談する Career Mentoring Night 企画が催された。新旧の JASCer が会する光景は、日米学生会議の歴史の長さを感じさせた。ホステルに戻った後は、参加者が思い思いのトピックについて語るスペシャルトピックの時間が設けられた。



8月5日

ワシントン D.C. サイト折り返し地点のこの日の午前中、それまでの疲れを癒し次の企画に臨むための休養時間となった。参加者は不足がちな睡眠時間を補ったり、あるいはホステル付近の博物館やショッピングセンターを散策したりと思いつきの休養時間をとった。

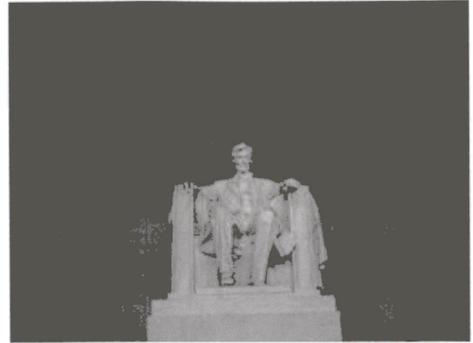
午後からは、前夜懇談した過去の JASCer を招いた分科会セッションを行い、夕方からはアメリカ側の JASC 賛助者らとの懇親会が行われた。



8月6日

この日は参加者が待ちに待ったワシントン D.C.の観光を行った。午前中は、アメリカンインディアン（ネイティブアメリカン）の資料館を訪れ、来るべきオクラホマサイトのための準備を兼ねた観光となった。

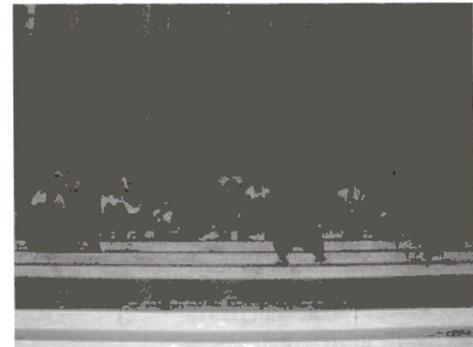
午後は D.C.の誇る博物館地区の自由散策となり、アートの博物館に行くもの、航空博物館に行くもの、あるいは戦争資料の施設に足を伸ばす者もあった。夕暮れ時からはチャーターしたバスで D.C.を回りながら、キング牧師がああ有名すぎる”I have a dream”の演説をした Lincoln Memorial や、朝鮮戦争やベトナム戦争、あるいは第二次世界大戦で戦った人々を祈念したメモリアルを訪れた。



8月7日

実質上 D.C.サイト最終日となるこの日の午前は、世界中の貧困国への支援活動を行っている世界銀行を訪問し、その活動内容のブリーフィングを受けた。

その後あわただしく American University に移動した JASCer が次に参加したのは Conflict Resolution Forum である。このフォーラムは、世界中で絶えず起きている民族紛争の原因を参加者一同が考え、解決への糸口を探るきっかけを作るものである。参加者はまず小グループに分かれて「紛争とは何か？何故起きるのか？」「アイデンティティとは何か？多様性とは何か？」についてのディスカッションを行った。その後アメリカ国務省アフリカ局の Anyaso 氏らによるパネルディスカッションが行われ、軽食のレセプションの後に「NGO を始めるためには？」といった題でグループディスカッションが持たれた。紛争の原因分析から解決策の模索まで、大変に充実した内容に参加者は新しい価値観を見出した。



8月8日

飛行機の関係で深夜2時、参加者は次のサイトであるオクラホマに向け、充実した D.C.サイトを後にした。



ワシントン D.C. サイト 参加者日記

“The early bird gets a worm.”なんて諺があるけれど、ワシントン D.C.を後にする我々ジャパデリの朝はとて早くって、具体的に言えば朝の 2 時に起床せねばならず、2時に起きるということは従って、厳密に言って寝ているかどうかさえ不明なのだけど、その辺の神学論争には立ち入らないようにして、8時出発をいいことに隣で大の字になっていびきをかいてる Philip Vu の脚を軽く蹴飛ばしつつ同時に寝ぼけて頭の回らない自分自身をパッキングしてしまわないよう気をつけながら、なかなか来ないエレベーターがやっとのことでスーツケースを階下まで運んでいくのを見届けた後、時間通り来たバスに満を持して乗り込んだ。空気に炭を溶かし込んだような漆黒の闇の中を 1 時間弱かけて空港まで走るバスの座席で思い出すのは、思い出として整理されることを頑に拒みながら生起し続ける D.C.での出来事の数々で、それは日米中の知性が集う熱い熱いトライラテラルフォーラムだったりホステルを満たしたあの香ばしいお好み焼きのにおいだったりリンカーンを背にした息詰まる接近戦だったりするのだけど、自らの思いを思い出として人類普遍の文字という媒体を通じて綴り、可視化するなかで総体という名の波に洗われ失われていく断片もきっとあるんだろうな、なんて考えているうちに定員 100 名弱の小型旅客機は既に僕らをオクラホマの大地まで運んでいたことを、目の前の客室乗務員の笑顔は知らせていた。

40 度を超える気温も湿度が無ければ存外涼しいことは大きな発見で、オクラホマの光る風を全身に感じながら実りも多いけれど過密なスケジュールから逃れられたことにほっと一息ついて部屋に戻るとルームメイトとして僕を迎えたのは何を隠そう Philip Vu で、妙な気を利かして夜間部屋を空けてやるといってニヤリと笑う彼と JASC 本来の意義を巡って拙い英語を駆使して滔々と討論した僕は歓迎レセプションを終えると早速 Cornell から温めていたタレント・ショウの内容を具現化させるべく相棒 Lucas の部屋のドアを叩いた。準備は踊りされど進まず、結局徹夜することになった僕らは early birds にはなれそうも無いけれど、一晩中練りに練った脚本で臨む明日のタレント・ショウはきっとコップの外にも大きな嵐を巻き起こすにちがいない、そんな夢とも妄想ともつかない思いに火照った体で寝返りを打って、白みつつある空にお別れすべくそっと目を閉じた。

(第 58 回日米学生会議参加者 高井竜輔 8 月 8 日日記より抜粋)

オクラホマサイト

(2006年8月8日～8月13日 オクラホマ州ノーマン、オクラホマ大学)

第58回日米学生会議のサイト決定の基準は、アメリカの政治を見ること、経済を見ること、そして多様性を見ることであった。4サイト目となるオクラホマはジャクソン主義に追われたチェロキー族他多くのネイティブアメリカン部族が辿った涙の旅路の終着点であり、現在なお全米で最もネイティブアメリカンの多い地域である。会議参加者はオクラホマにおいて数々のネイティブアメリカン資料館を見学、また彼らの祭典にも参加し、超大国における少数民族のあり方を学んだ。また、全国的にもキリスト教の影響が強いこの地域においてホームステイを行い、ホストファミリーと一緒にミサに参加することで、人々と宗教の関わりについて学んだことも意義ある経験だったと言えよう。

8月8日

飛行機の関係でアメリカ側参加者より先に到着した日本側参加者を迎えたのは、摂氏40℃ほどにもなる灼熱と、乾燥した空気、そして果てしなく広がる地平線である。東西海岸の大都市は日本人にも割合なじみの深い場所であるが、伝統的にキリスト教保守層の多いここ中部オクラホマは、参加者にとって東西海岸とは違ったアメリカ像を見せることになる。

アメリカ側参加者の到着後、ホストとなるオクラホマ大学関係者及びオクラホマの市民活動リーダーMolly Shi Boren氏、オクラホマ大学のアジア研究者であったSydnie Brown氏らを招いたレセプションを行った。

レセプション後、参加者はグループに分かれて翌日に迫ったタレントショーの練習を行った。

8月9日

午前中の分科会セッションの後に行われたのが、Contemporary Native American and Indigenous Issues Forumである。このフォーラムでは、オクラホマに住む数多くのネイティブアメリカン部族の構成や文化、歴史などを実際に部族の方をお呼びして学んだ後、ネイティブアメリカンの独自の教育システムや医療システム、またビジネスなどについて将来の展望を伺った。他民族の移民国家アメリカにおいてマイノリティとマジョリティの共存のあり方を



学んだ事は、現在世界中で起こり続ける民族問題を考える糸口になるものであろう。

4時間に及ぶフォーラムの後は、参加者が時間のない中準備を続けたタレントショーの本番である。タレントショーは近年の日米学生会議で継続して行われている企画であり、参加者がそれぞれの特技をステージで披露するものである。今年のショーでは、手品を披露するもの、組体操を披露するもの、歌を歌うものや踊りを踊る者などもおり、中盤を迎えた会議において、参加者はお互いの新しい一面を発見した。



8月10日

この日はウィチタ自然保護区と付設博物館の見学に始まり、ネイティブアメリカン各部族の歴代の長の胸像などの見学(ディズニーアニメで有名なボカホンタスの胸像もあった)を行った。夜にはネイティブアメリカンをテーマとする祭典に参加し、お祭りの雰囲気を楽しみながらネイティブアメリカンの歌や踊りを見学した。また、祭典主催者が日米学生会議参加者も一緒に踊ることを呼びかけるという嬉しいハプニングもあり、大地のエネルギーを呼び込むという Pow Wow の踊りに日米の学生が参加した。



8月11日

オクラホマにおける有名な事件に、連邦ビル爆破事件がある。この日の午前には、アメリカ国内にも多種多様な価値観が存在する事実をまざまざと見せ付けたこの事件の現場に足を運んだ。併設されている爆破事件資料館の天井には、広島でも見るような千羽鶴も飾られており、いかに価値観が多様といえども多くの命が一瞬に失われることの悲しみが世界共通である事を知った。続いて正午にかけて Memorial Institute for the Prevention of Terrorism においてブリーフィングを受け、現今のテロ形態の変化と対応策を学んだ。また、オクラホマ州議会を見学、また西部開拓時代のカウボーイ資料館も見学した。



夜にはオクラホマシティのダウンタウンで自由時間となり、買い物に奔走する者、また21歳以上の参加者は久しぶりにお酒を飲むなど思い思いの時間を過ごした。



8月12日

この日は午前午後の分科会セッションの後、ホームステイを行った。ホームステイは日米学生会議において継続的に行われている企画であるが、第58回会議ではアメリカ市民と宗教の関わりを体験するために、First Baptist Church of Moore、St. Thomas More Catholic Church、St. John Missionary Baptist Church、New Life Bible Churchの四つの教会にお願いし、教区のホストファミリーを紹介して頂く形を取った。会議中唯一、参加者がはなればなれになる夜に不安と期待の入り混じった表情でそれぞれのホストファミリーとオクラホマ大学大学寮を去っていった。



8月13日

この日は前日宿泊させて頂いたホストファミリーと一緒に集会を体験する日である。日本における、静かに祈るキリスト教のイメージと異なり、体を揺らしながら熱唱するタイプの集会をホストファミリーと体験することは、新しい形の宗教を参加者に見せることとなった。



夕刻に参加者全員が大学寮に戻った後、分科会セッションと全体リフレクションを行い、翌日に迫ったサンフランシスコへの移動のために早めに就寝する日となった。

オクラホマサイト 参加者日記

この日 JASCers はホストファミリーと共に First Baptist Church of Moore, St. Thomas More Catholic Church & Student Center, St. John Missionary Baptist Church, New Life Bible Church の四つの教会に分かれ、午前中のサービスに参加した。私は Buddy と共に New Life Bible Church を訪れ、ここでの体験は私の教会のイメージを大きく変えるものとなった。

“For people who thought they'd never like church (教会を好きになれないと思っていた人のために)” というモットーを掲げる New Life では、朝の 11 時頃からサービスが始まる。服装は自由であり、多くの人は半ズボンに T シャツ、靴はサンダルを履いている人が多い。講堂に入ると前のステージでは教会のロックバンドがポップな音楽を演奏し、皆立ってリズムに手を合わせながら、体を揺らせて歌っていた。一時間のサービスのほとんどは、こうして皆で歌を歌うのだが、途中で 10 分程のドラマが組み込まれている。これは子供から大人のボランティアの方々毎週一緒に演じており、毎週の聖書の verse をより身近に感じられるように、私達の生活の中の例をおもしろおかしく、時には感動的に描かれているのである。サービスの後は、皆で持ち寄った食べ物を分け合い、一緒にお昼を食べた。初めて

出会う人もお互いを笑顔で迎え、「こんにちは。お元気ですか。」と声をかけていたのがとても印象的だった。また、サービスの始めに「今日は日米学生会議からのお友達も Welcome!!」と大きな拍手で迎えて下さったことも印象に残っている。

New Life では自由さ、そして聖書をいかに自分の生活に結び付けて考えられるか、更にはコミュニティーの大切さが強調されていたように思う。めまぐるしく変化し、忙しさに追われる現代、このような自分に合った関わり方を選び、自分の生活と結びつけやすい形式のサービスを行う、新しいタイプの教会が益々主流になってくるのだろうと感じた。

(第58回日米学生会議参加者 廣瀬裕子 8月13日の日記より抜粋)

サンフランシスコサイト

(2006年8月14日～8月21日 カリフォルニア州サンフランシスコ)

第58回会議最後のサイトとなったサンフランシスコは、近隣にスタンフォード大学、シリコンバレーを擁する西海岸の中心都市の一つである。ニューヨークシティで実施できなかった企業訪問がようやく実現し、最先端IT企業である Adobe 社や日系企業の Zennrin USA など、多くのリーディングカンパニーの現場を体験した。最後の3日間では、それまでの会議活動の成果を発表する Final Forum を行い、新実行委員の選挙の後、日本人街にて Closing Ceremony を行った。

8月14日

始まる前は長いと思われた一ヶ月の会議も、いよいよ最後のサイトとなった。灼熱のオクラホマとはうって変わって、アラスカから流れ込む海流のため厚手の上着無しには過ごせないサンフランシスコであるが、その気候の幅の広さもまた国家の地理的な大きさを教えるものである。

到着した参加者は、サンフランシスコ日本総領事館において、山口主席領事主催の歓迎レセプションに参加し、会議の成功への激励を受けた。



8月15日

この日は終日、分科会毎に、近郊にある Adobe、NASA、International Forum on Globalization などの企業、機関、NGO を見学した。

夕方からは、サンフランシスコ市街地中央にある Union Square において、会議期間中を通して練習してきた JLP 企画、よさこいダンスを日米双方の参加者で披露した。



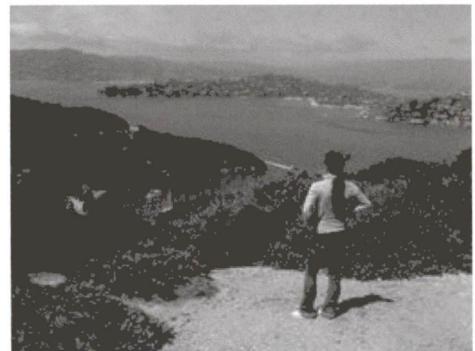
8月16日

この日は、かつてアジアからの移民の受け入れ処理を行う施設のあった Angel Island を観光した。Angel Island は現在では、半日で登れる手ごろな山と、太平洋を遠望する景観とで風光明媚な観光地として知られており、近くにはショーン・コネリー主演の映画、「ザ・ロック」で有名になったアルカトラズ島がある。参加者は西海岸の爽やかな空気と景観にリフレッシュし、二日後に迫った一ヶ月の成果発表会に気持ちを切り替えることになった。



8月17日

この日は終日、明日に迫った Final Forum の準備のため、港湾地区の Ferry Building において分科会に分かれた準備を行った。



8月18日

この日はいよいよ、各分科会の一ヶ月に渡る議論の成果や各サイトでの概要を発表する Final Forum である。San Francisco Public Library に集まった参加者は、第二次大戦時の日系移民収容所の生き残りである Masaye Nakamura による現今の日米交流に対するスピーチの後に、それぞれの成果を発表した。



無事に大役を果たした参加者は、夕刻から海岸でバーベキューやサッカーなどでリラックスした時間を過ごした。

8月19日

第58回会議自体の企画は前日の Final Forum で終了したが、参加者には重大な仕事が残っている。来年 2007 年に日本にて開催される第 59 回日米学生会議の実行委員を決める選挙である。早朝から LGBT センターに集合した参加者は、前日夜までにノミネートされた候補者の、会議への感謝や将来の会議への情熱の詰まったスピーチを元に新実行委員を決定する投票を行った。



開票・結果発表の後の自由時間では、サンフランシスコ市街を思い思いに散策する者がいる傍ら、新実行委員会メンバーは早くも来年の会議についての激しい議論を始めた。

8月20日

この日も前日に引き続き、新実行委員は第59回会議の企画に、他の参加者は自由時間となった。

夕刻からは、サンフランシスコ日本人街にある Japanese Cultural and Community Center of Northern California において Closing Ceremony が行われ、参加者は互いに一ヶ月の思い出を語り合い、惜しめない感謝の言葉を交換した。また、1ヶ月かけて日米双方の参加者により作成された 58th JASC テーマソングと、第2回会議で作詞作曲されたものの一時歴史に埋もれていたオリジナルの JASC テーマソングを合唱した。ホステルに戻った後も、参加者は最後の夜を語り明かした。



8月21日

第58回日米学生会議も遂に終わりの日を迎えた。早朝日本側参加者の出発の時間にはアメリカ側参加者が総出で見送りをし、ホステル前で泣き崩れる者、再会を誓い合う者などもあった。しかしながら、別れは別れであっても”Good bye!”の言葉より”See you again!”の言葉が圧倒的な様子は、たとえ距離が離れようとも友情は変わらないという事をそれぞれの参加者に確信させた。



サンフランシスコサイト 参加者日記

8月20日(日)、JASC 終了の一日前である。早朝からサンフランシスコにあるタワーに昇り、日の出を見るという企画があったが、霧のため中止になってしまい大変残念であった。朝食を済ませ、近くの Glide Church へ出かけた。ステージ上にはバンドや大人数のコーラスが迫力の歌を繰り広げていた。井上委員長と話していたのは、アメリカはご存知の通り競争社会であるが、教会という地域コミュニティーを通して、恵まれない人への援助や、子育て支援、医療援助というものがある。日本にはそういったものはあまり無い状態である。教会のような地域の助け合いという基盤が無い中で小さな政府を目指して行って果たして大丈夫なのだろうか。

夕食までは基本的にフリータイムだったので街へ出かけたり、ショッピングに繰り出したりと、皆思い思いの時間を過ごしていた。自分はアメリカンフードに別れをつけるため、カフェでフィラデルフィアステーキ・サンドイッチを堪能したり、皆へのお礼の手紙を書

第3章 本会議・サイト活動

いたりとりラックスタイムを楽しんだ。

夕方 6 時より本会議のクロージングセレモニーが行われた。約一ヶ月過ごした仲間と別れるのは寂しいが、ここまで皆で頑張ってきて良かった、という充実感がいっぱいだった。59th JASC の実行委員から次回会議の概要が説明され、この JASC はもっともっと良くなるという期待感を抱かせるものだった。これで終わりではなく参加者皆にとって JASC は始まったばかりなのだ、ということを感じさせるセレモニーだった。

(第 58 回日米学生会議参加者 安田立 8 月 20 日の日記より抜粋)

第4章

分科会活動

外交と国家ブランディング.....	39
開発：貧困と発展.....	43
科学技術と社会.....	47
市民参加の発展と非国家主体.....	51
多国籍企業とビジネスモデル.....	55
多文化主義とマイノリティ.....	59
文化とアイデンティティ.....	63

分科会活動とは

日米学生会議では、日米の両実行委員長を除く全ての参加者が、現代社会のトピックに即して設置された分科会に所属する。分科会活動では、日米双方の参加者により、トピックに関連する事項の情報交換やディスカッションを行うなど、日米学生会議の中核となる活動の一つである。また、第58回日米学生会議では各分科会がその活動成果を”Tangible Result”をキーワードとしたファイナルプロダクトにまとめ、本会議最後に設けられるファイナルフォーラムで発表を行った。

第58回日米学生会議で設置された分科会は下記の7つである。

- ・ 外交と国家ブランディング
National Identity and International Perceptions
- ・ 開発：貧困と発展
International Development: Poverty and Progress
- ・ 科学技術と社会
Science and Society: The Implication of Innovation
- ・ 市民参加の発展と非国家主体
The Evolution of Civic Participation: Non-State Actors and Transnational Politics
- ・ 多国籍企業とビジネスモデル
Designing a Global Company: Responsibilities and Strategies
- ・ 多文化主義とマイノリティ
Global Mobility: Multicultural Issues and Community Building
- ・ 文化とアイデンティティ
Global Subculture: Creation of “Reality” in Imagined Communities

本章では、これらの分科会における活動の様子を紹介する。

外交と国家ブランディング

分科会メンバー

生板沙織*

Loc Van*

佐藤友紀

真田雄太

須藤淳

王雄揆

Tiemy Ahrold

Karenth Dworsky

Patrick Sheridan

Erika Sloan

(*印は実行委員を示す)



分科会設置の目的

市場や文化が交錯するグローバル化した世界では、「国家のブランド」づくりが国家の「アイデンティティ」を保持ないし主張するための必要不可欠な手段となっている。政府、多国籍企業、草の根団体、そして個人がこの注目深い領域にますます関与してきている。本分科会では、国家のアイデンティティはどのように形成されたのか、その歴史を分析し、国家が対外認知度を改善する方法について考察する。現在の日米両国または日米関係のイメージが与える影響を中心に、クール・ジャパン現象や日本文化のマーケティングが国家のイメージ戦略にどのような役割を果たしているのか、または開発途上国における米国産ラベルの普及にはどのような意味があるのか、などについて議論する。

事前活動

事前ミーティング

事前ミーティングは2回設け、ペーパーの書き方や内容について討議を行い、後述するTAC勉強会などの準備についてお互い意見を交換し合う場であった。

防衛大学校見学

毎年恒例であるJASCの全体行事として防衛大学校見学を行った。そこで、太田文雄教授(安全保障・危機管理教育センター長)による講義を始め、参加者と防衛大学校

の学生が分科会ごとに様々なテーマについてグループ討議を行った。NIIP では『日米同盟と東アジア安全保障』について討議を行った。東アジアの安全保障に関して、米国は「アメリカは一翼を担える」と主張するが同地域において、米国は何ができるのか？また、日本はどのように対応するべきか？などの問いかけに思考を巡らした。

東京アメリカンセンター公開セッション

「アメリカは日本で広報文化外交をする必要があるのか？

—いかにして若者を引き付けることができるのか—

【日時】6月27日（火）18時～19時半

【場所】東京アメリカンセンター(TAC)

パネリスト： 米国大使館広報担当公使 William M. Morgan 氏
慶應義塾大学環境情報学部教授 渡辺靖氏
第58回日米学生会議参加者 佐藤友紀
モデレーター： 第58回日米学生会議実行委員 生板沙織

本分科会事前活動において最大のイベントであった TAC での勉強会は、パネルディスカッション形式で行われ、約 50 名を招待し開かれた。パネルディスカッション後は質疑応答の時間を設け有意義な時間であった。

小論文の作成

日本、米国または同盟国として与える印象について、扱う地域を東アジアと中東地域に焦点を当て、論文を作成した。日本側参加者の論文のテーマは以下の通りである。

- ・佐藤友紀 “The Implication of Japanese Policy in the Middle East”
- ・真田雄太 “The Role of Soft-Power in Japan’s Foreign Policy”
- ・須藤淳 “National Brand and Perceptions Through Policies”
- ・王雄揆 “Korea’s Image of Japan and USA: Exploring its Effects
on the Bilateral Relationship”
- ・生板沙織 “Japan’s Potentially Effective Source of Soft Power:
the Deployment of the Self-Defense Forces Overseas”

本会議中の活動

分科会ディスカッション（以下 RT）は本会議中計 10 回に渡り行われ、その他にもプレゼンテーションの準備時間や臨時ミーティングを設け、積極的に取り組んだ。

第1・2回の RT では、メンバー間の意見を共有するために、事前活動で書き上げた 論

文を各自発表、質問を行った。国家ブランディングに対するアプローチも「政策」「観光」「企業」など多岐に渡った。その後の RT では、分科会のファイナルプロダクトとして何ができるかを話し合い、試行錯誤を経た上で最終的に「トライラテラルフォーラムの促進」に決定し、役割の分担やスケジューリングを行った。(詳細は後述)

ファイナルプロダクトと平行して、積極的にディスカッションを行ったのが我々の分科会の特徴である。ファイナルプロダクトと直接的に関係はないが、対外認知や国家ブランディングに関する議論をできるだけ多く行った。これは日米学生会議という「最高の議論の場」を活かすためにも必要だというメンバー全員の意見で行われ毎回活発で新鮮な議論となった。「靖国問題」「自衛隊と憲法 9 条」「日米同盟」「イラク派遣」などをテーマとして取り上げ、メンバー間でも異なる意見を交換し理解を深めた。靖国神社とアーリントン墓地を比較するというアメデリならではのアプローチも見られ、刺激的であった。

また、本分科会トピックを考える上で鍵となる「対外認知」に大きな影響を与えるメディア関係者へのインタビューも試み、ワシントン D.C. サイトにおいて時事通信の記者の軽部謙介氏、インディアナ州のローカル紙の新聞記者の *Sylvia Smith* 氏、またバングラディッシュからの新聞記者の *Arshad Mahmud* 氏と会談を行った。メディアという視点から様々な事項について、RT メンバーから活発な質問がされた。

このような分科会活動を通して、互いの知識を交換するだけでなく、国家ブランディングに対する新しい考えを得ることができた。

ファイナルプロダクト

今までの議論を通して、JASC の様な個人レベルの対話の機会を与える交流は大変重要であることは明確であった。しかし、私たちの見解では、日米関係は多くの問題を抱えると同時に、これまでにない程、人的交流は盛んに行われており、対話の機会も多い。学生の留学や、地域間の交流も活発に行われている。

しかし、日米は、東アジア地域、特に中国・韓国との対話の場は多く設けられているだろうか、という疑問が議論中に挙げられた。

そこで、私たちは JASC を通して如何にして他者を理解し、偏見の溝を埋める事が出来るかを考えた。特に、今回の JASC を通して私たち自身が、お互いに対する偏見や、先入観を取り除き、また正しく理解することが出来たように、トライラテラルフォーラムを通して東アジアに対する正しい理解を促進することは、非常に意義のあることだと考えている。JASC において、そのような交流の機会を設けることは、今までの歴史ある JASC により革新的な一側面を付加し、JASC そのものの魅力を強化することになると言えよう。これらの主張を、より具体性のあるものにするため、未来の実行委員 (以下) EC がより充実した JASC を作る際に手引きとする、ノウハウが詰まっている EC マニュアルに 着目

した。私達は、今まで話し合ってきたトライラテラルフォーラムの重要性を主張し継続を促す、新たな章を設けることにした。

新たな章は、まず JASC 中のトライラテラルフォーラムの必要性を考察し、EC の担う役割の大きさを明確にした。次に昨年から行われているこのフォーラムが、どのようなプロセスを経て行われたのか、どのような内容であったのか、また反省点を述べた。そして、今回のトライラテラルフォーラムに参加した4名の中国デリゲートや、JASC 参加者へのアンケートを基に、印象に残った点や、改善点などを記している。ここでは、外交上よく見られるような硬い言葉の感想ではなく、素直に心から出たメッセージや、より多くの交流の機会を期待するといった積極的な意見が見られる。更に、私たちの分科会の主張が、より広く支持されることを示すために、国際交流に従事しておられる方々からのサポートメッセージを掲載した。JASC 期間中という限られた時間でメッセージを得ることが出来たのも、フィールドワークで伺った時事通信の方々の協力や、各大学機関の方々の迅速な対応のお陰である。そして、来年のトライラテラルフォーラムに向けて、教育機関のコンタクト先などを記している。企業からのサポートを得たり、先輩方からの支援を得たりすることの重要性も指摘しており、アメリカ、日本における企業へのアプローチ方法についても触れている。

また、私たちの分科会は JASC 本会議中、比較的順調にディスカッションを行い、掲げられていた Tangible Result の作成の他にも、興味関心がある事柄についてフリーディスカッションに時間を割くことが出来た。結果的にはこの時間が、メンバー間の先入観や偏見を取り除く機会となり、また様々な環境でこれまで過ごしてきた我々の価値観をシェアし、互いを理解する機会となった。この時間が私たちに、より多様性のあるメンバーと、議論をしてみたいという思いを抱かせてくれた。

分科会メンバーが独自の分析を行い、どの様な情報が将来の EC にとって有益となるかを考えた末に、完成したのが上記の内容を踏まえた7ページに及ぶ我々の Tangible Result である。

開発：貧困と発展

分科会メンバー

国松永喜*

Ken-Cheng Hsiang*

川口耕一郎

長崎智裕

廣瀬裕子

安田立

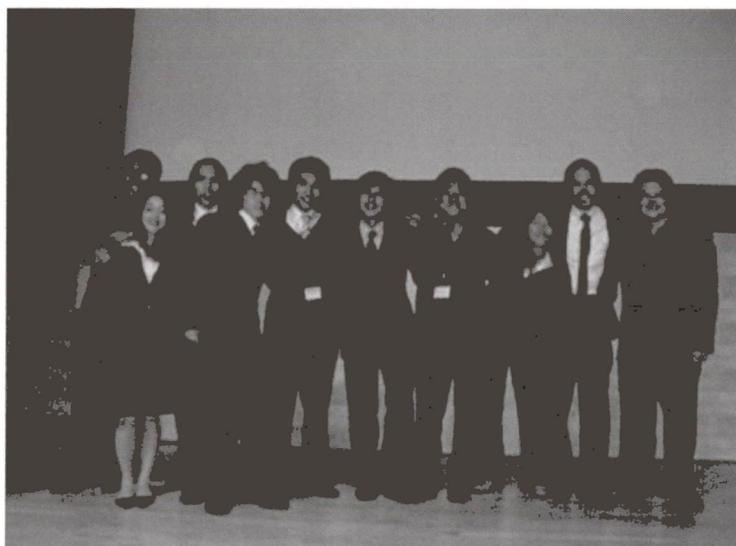
Risa Abe

Michael Collins

Kendall Jackson

Phillip Vu

(*印は実行委員を示す)



分科会設置の目的

貧困は飢餓と密接に関連し、世界では3秒に1人の割合で子供たちがその幼い命を失っている。成す術もない貧困状態は人の心を蝕み、時にテロリズムを誘発する。昨今、国際会議では貧困問題の解決が急がれているが、今なお多くの人々はその問題から目をそらし続けている。日米二大大国の中にさえ貧困は存在する。しかし、途上国における貧困はより深刻で広範囲に及び、発展の大きな障害となっている。このような貧困問題に対して、途上国はどのように対処していけばいいのだろうか。当分科会では、貧困の根絶と環境に配慮した持続可能な開発を達成するためには、どのような国際的枠組みが構築されうるかについて検証した。

事前活動

開発分科会は、5月の春合宿から本会議までの約3ヶ月間、厚生労働省やUNICEF、SHAREなどからレクチャーを受け、政府、国際機関、市民社会という異なる視点から貧困問題を探った。分科会の目標としてこれらのアクターの協力体制であるグローバル・フレームワークを提案し、それをWeb上に公開することを掲げると同時に、ケース・スタディーとしてHIV/AIDSを取り上げることを決定し、アメリカ側参加者に提案、そして合意した。参加者各自がミレニアム開発目標(MDGs)の一つに沿ったRTペーパーを執筆し、開発の様々な分野における各アクターの機能を探り、本会議に挑んだ。

ペーパートピックはそれぞれ、国松永喜…Water and Sanitation、川口耕一郎…Providing Primary Education in Developing Countries、長崎智裕…The Role of Civil

第4章 分科会活動

Society in Combating HIV/AIDS、 廣瀬裕子…Fair Trade -The Alternative Trade Network-、 安田立…Migration of Health Workers であった。

また、事前活動の一環として下記機関を訪問し、意見交換を行った。

【フィールドワーク先一覧】

C-fa フォーラム、外務省、エクマットラ、UNICEF、HAATAS (国際保健協力市民の会)、厚生労働省、アフリカ日本協議会、SHARE (国際保健協力市民の会)、在タンザニア日本大使館専門調査員

本会議活動

本会議では分科会ミーティングが十回行われた。最初のサイト、コーネル大学での三回は自己紹介、これからの方針決め、各自が作成したペーパーのプレゼンという形でスタートした。場所をワシントンに移してからの三回は HIV をモデルケースとして、貧困解決のための global framework についての discussion を進めた。また、ワシントン D.C. では議論を深めるためのフィールドトリップとして米州開発銀行 (Inter-American Development Bank) を訪れた。オクラホマからサンフランシスコでの最後の四回は「なぜ途上国への援助をする必要があるのか」、「なぜ援助をする際にアクター間の連携が必要なのか」といった根本からの discussion をし、global framework 作りをより一般的なレベルで話し合った。また、サンフランシスコではフィールドトリップとして International Forum on Globalization というシンクタンクを訪問した。最後の Forum では約一ヶ月間取り組んできた成果をぐっと凝縮して発信できたと思う。

ファイナルプロダクト

当分科会では、議論の成果を開発憲法として集約し、さらに Web を作成した。報告書では紙面に限りがあるので、憲法の要約版を掲載するが、前文、宣誓を含めた憲法の全文 (英語) は Web に掲載する。

Web の URL…<http://www.internationaldevelopment.bravehost.com/>

ブログの URL…<http://www.jasc58thdevelopment.blogspot.com/>

【開発憲法】

第1章 先進国

第1条 発展途上国への ODA を増加し、途上国の債務を軽減する。本用件は開発援助のグローバルフレームワーク構築に向けての前提となる。

第2条 専門知識の共有を通して、発展途上国における人的資源の向上にむけて積極的に関与する。先進国の人々はグローバルコミュニティーの一員としての自覚を持ち、途上国

第4章 分科会活動

を訪問する、または現状を考察することが望ましい。

第3条 発展途上国の発展に寄与するために知的財産権の規制を緩和する。特に伝染病の治療薬の普及に向けて、先進国による厳格な規定は修正する。

第2章 発展途上国

第1条 国民の利益を第一に考え、深刻な国内における課題に積極的に取り組む。

開発援助のグローバルフレームワークにおいて、主導的な立場を取る。

第2条 国際社会に閉鎖的な姿勢を改め、政治の透明性を確保する。

第3条 政策の責任の所在を明確にし、アカウンタビリティを向上させる。

第3章 国際機関

第1条 国際条約を通して、先進国と発展途上国の政府間の関係を促進させる。

第2条 各国の多様な利益を反映させる。

第3条 各アクターの間を促進し、開発援助の状況の監視を行なう。

第4章 市民社会

第1条 開発援助のグローバルフレームワークにおいて、実際の計画の履行を草の根レベルで主に担う。

第2条 NGOの活動に見られるような、国境を超えた活動を行なう。

第3条 草の根レベルの活動を通して、途上国の現地住民の声を反映させる。

第5章 企業

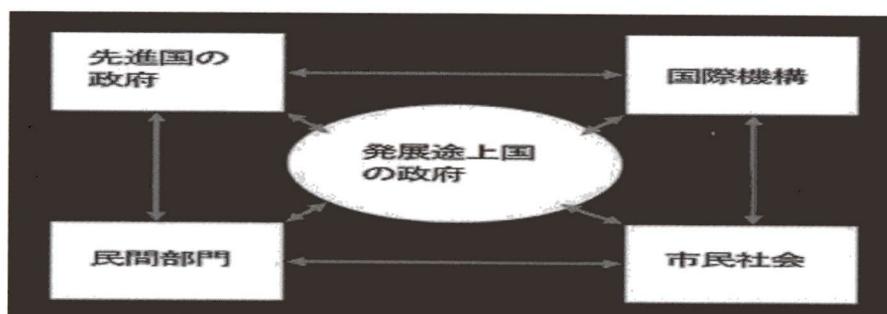
第1条 利益創出を絶対的な動機とするのではなく、自らの社会的な責任を認識する。

第2条 途上国の長期的な経済発展につながるような、投資を行なう。

第3条 途上国における労働条件の改善、環境に対して配慮する。

【Web】

開発における各アクター間の連携



開発における各機関の連携の概要

全機関共通の責任

- ① 開発において途上国が主導的な役割を担う

第4章 分科会活動

- ②社会全体に長期的な影響力を与える事業の遂行
- ③各機関と事業の責任と透明性を向上させるための評価制度の構築
- ④固有の文化の維持と人権、環境保護

各機関の責任

先進国

- ①途上国への援助(ODA)の増大
- ②途上国との専門的知識の共有

発展途上国

- ①現状に応じた政策の優先順位の決定
- ②国家の発展への決意

国際機関

- ①個別の機関間の連携の促進
- ②多様な利益の政策への反映

市民社会

- ①開発分野の連携と個別の事業の遂行と有効性の監視
- ②途上国における地元住民の利益の反映

分科会活動の報告を終えるにあたり

-JASCを通して学んだこと、そしてこれからの人生において実現したいこと-

貧困とは一体何を指すのだろうか？ 議論が抽象論に陥るのが目に見えていたので、あえてその議題を取り上げないようにしながらディスカッションを進めた。それは、私が当分科会のコーディネーターという立場にあったということ、そして第58回日米学生会議の達成目標が **Tangible Result** を残すことであったということ、途中で議論が雲散霧消してしまうことはどうしても避けなかった。しかし、だからと言って私が長い間抱き続けてきたその疑問が消えるわけはなかった。途上国への旅を通して、日本の中の貧しい地域へのフィールドトリップを通して、映画や書籍、NGO 活動を通して、貧困とは何なのかの答えを探していた。しかし、どんなにあがいてもその答えは“見つからなかった”。いや、正確に言えば、“見えなかった”。それは、私自身が貧困状態にあったからだ。

しかし、今私はアジアのある街を旅していてその答えの一端を見つけた気がする。途上国では、子供たちが当然のように毎日働いている。同じ仕事をしていても、見ているだけで彼らの将来を案じてしまい、こちらまで悲しくなってしまうような子もいれば、貧しいことには変わり無いのに、笑顔がとても素敵で周囲に元気を与える子もいる。全ての人間に平等にチャンスが与えられればいいと思う。しかし、現時点のそれができていない状態では、貧困であるかどうかを判断するのは自分自身ではないだろうか？

先に私自身が貧困状態にあったと述べた。それは、日本という世界でも類稀な豊かな国に生まれ育ったという幸運に恵まれたにも関わらず、常に何かに飢え、何かを食欲に求めていたからだ。このことがわかった今は、自分の現在の境遇全てに感謝して毎日を精一杯生きたいと思う。貧困問題に関心がある無しに関わらず、また開発に携わるかどうかに関わらず、恵まれた人間がその生命を最大限に燃焼させることはひとつの義務ではないかと思う。この考えはノブリーズオブリージュとは異なる。私のこの意見には多分に反論もあるだろうが、私はこれからの人生をそのような使命感をもって懸命に生きていこうと思う。それが第57回日米学生会議参加者として選ばれ、第58回日米学生会議の実行委員として選ばれた自分が、これから社会に還元していくべき責任を果たすことだと考える。

(分科会コーディネータ 国松永喜)

科学技術と社会

分科会メンバー

井上雅章*

Stanton Lawyer*

池田早紀

小迫由衣

永田隆介

宮崎あゆみ

Casey Samulski

Elissa Furutani

Lucas Hannell

Paninya Masrangsang

(*印は実行委員を示す)



分科会設置の目的

本分科会では、春合宿でのミーティング及びアメリカ側参加者との調整の結果、技術の発展が人間の思想や社会システムに直接影響を与えかねないバイオテクノロジーに着目し、分科会で直接扱う分野を「生命倫理」分野とした。古来、人間の体は行為や権利の主体であり、その人格と不可分の関係にあった。しかしながら現在では、人工的な受精や臓器の移植、人類の設計図をタンパク質という物質にまで還元してしまった DNA 解析、出生前の受精卵を操作することで可能になると言われる再生医療など、人間の部品が、その人格と別離した形で権利の客体として扱われている。

「何が人間を人格たらしめるのか?」、「人間の構成物はどこまで「部品」として扱ってよいのか?」などの問いに対しては明確かつ統一された見解は未だ得られず、また宗教などの価値観の根幹に関わる分野であるために、近い将来統一見解が得られる見通しもない。この統一見解がないために、アメリカ合衆国では中絶を行ったクリニックが爆破テロの対象になるなどの事件も起きている。

本分科会では、臨床医療の場において、新しい技術が社会に混乱をもたらすことなく利用されるためのフレームワークを考えた。また、その過程で日米間の生命観の差に触れることも目的とした。

事前活動

赤林朗東京大学教授訪問

東京大学で開講されている生命・医療倫理人材養成ユニット (CBEL、参考 URL: <http://square.umin.ac.jp/CBEL/about.html>) において中心的な活動をされている赤林朗教授を訪問した。参加者は、生命倫理に属する諸問題の例示、脳死移植の実行の可否を決定する審議の様子

などについてブリーフィングを受けた後、開講されていた CBEL の講座を見学した。CBEL の講座では、医学系研究者をはじめ、病院関係者、弁護士、また一般の社会人が参加しており、生命倫理関連の諸問題におけるロールプレイなどを行っている。医者や患者、その家族と、医療に関わる全ての人間を入れたロールプレイからは、脳死移植など生命倫理に属するとされる問題が単一の解決策を持つものではなく、関係者全ての合意を取りながら順次進めていかねばならないという印象を得た。

西川伸一教授勉強会

西川伸一理化学研究所、発生・再生科学総合研究センター教授にお会いした。西川教授は ES 細胞などを用いた再生医療の日本における第一人者の一人である。ES 細胞を用いた再生医療は、所望の臓器などを再生する技術として期待され研究が進んでいるが、母胎に戻せば人間に成長する可能性のある細胞を加工するためにその実用可否については見通しが立っていない。氏はいわば生粋の研究者という経歴の持ち主であるが、社会制度や経済システムについても勉強されている。一般に技術の研究者というのは研究活動のみに没頭し研究成果と社会の関わりを考える優先順位が低い傾向にあるが、西川教授からある技術の是非を考えるにはそれと社会のかかわりを議論しなければならないという点の指摘を得られたことは、一線の研究者たるべきものの心構えを示された様に思われた。氏の、「ウチらはそりゃ自分の研究が社会に役立つと思ってるからやってるわけだけど、本当にその技術を使っていいかは社会の側が決めることじゃないの?」というお言葉が非常に印象的であった。

櫛島次郎氏勉強会

科学技術文明研究所の櫛島次郎先生を訪問した。氏は社会学系の経歴の持ち主であり、生命倫理関連の諸問題について法整備や行政などのあり方について精力的に研究されている。現在、ヒトクローンを始めとする研究についての国家的フレームワークは行政令で管理されているが、氏は、生命の扱いは国民全体での審議が必要な事項であり、いわば密室に近い場で決められた行政令で管理を進めている現状の不自然さを指摘された。

中野東禅曹洞宗総合研究センター講師勉強会

仏教は、あまり意識されこそしないが日本社会形成に潜在的に関わってきた。そういった日本仏教各派の中でも、曹洞宗は、先端技術の扱いについて仏教の立場からの考え方を提示し続けている存在である。本分科会では、曹洞宗総合研究センターで生命倫理分野の講師をされている中野東禅師と、仏教から見た生命の始まりと終わりの捉え方についての勉強会を行った。仏教の教義中では、発生途上の細胞をいつから「生命」として扱うかの厳密な定義は難しいとの事であったが、客観的事実と同時に感覚知をベースに作られている仏教の考え方では、新しい問題に対しては徹底的に科学的な根拠を持って考えねばならないという点が指摘された。

本会議活動

本会議での議論のうち、代表的なものを下に紹介する。

脳死移植ドナーカードについて

日米の医療システムにおいて最も差が大きいと考えられるのが、脳死の問題である。アメリカにおいては、脳死が人間の死であるという考え方が一般的であるために、例えばある児童が脳死状態になった際、保護者のサインでその児童の臓器を移植に供する事が出来る。また、親族が臓器提供を拒む場合でも、一般的には延命治療は停止される。これはアメリカにおいて支配的なキリスト教において、脳は精神、魂の台座であると考えられており、その脳が機能を停止すれば人格の中心である魂もこの世のものではなくなるという考えが支配的なためである。

日本では、脳死者本人が近年有名になったドナーカードを所持、自らの体の提供を是とし、かつ脳死後には家族の同意をもって初めて移植に踏み切ることが出来る。アメリカ側との対比を行うと、本人の同意が必要であるという点に大きな差がある。これは、日本は古来より仏教の影響を受けており、その仏教が人間の実感に価値判断の重きをおいていることに由来する。脳死者本人はともかく、他人にとってみれば延命装置付とはいえ拍動も呼吸もあり、顔色も脳死前と大差ない脳死患者は、必ずしも「死者」とは認識されないのである。死者でなければ自己決定権があり、ならば本人の同意書類無しには臓器移植は行われえない、というのがその根底の論理であろう。さらに、本人の同意があったとしても家族の判断によっては脳死は死と認識されず、延命処置が継続される場合もある。

このディスカッションにおいては、死生観はそれぞれの文化や宗教において異なっており、文化や宗教が人間の思考方法を大きく決定する以上、統一見解が難しいということが確認された。

命の始まりはどこからか？

日本人、アメリカ人（黒人、白人）、スウェーデン人、タイ人などさまざまなバックグラウンドを持つ本分科会で、「命の始まりはどこからか？」という問を「受精卵はどこから人か？」という問に置き換えて行った。結果、キリスト教圏では原則、生まれる事が運命づけられた時点で人との認識が根底にあるものの、実際に出生するまではその生殺与奪の権利は（極限状態において、という前提の下に）親に依存するとの考えがメインであった。また、仏教の影響の強いタイでは、受精した瞬間に既に人として扱うとの考えが強いとのことだった。日本側としてはあまり強い意見は出ず、よくも悪くも聖書に基づく合理性を基盤とした西洋社会と、感覚知をベースとした日本社会の差が出た形と言える。ただし、どの参加者もこの間に明確な答えを与えられた訳ではなく、しいて線引きを行うのなら、という前提付である。ここにおいても、命の扱いの統一見解が得がたい事が確認された。

ファイナルプロダクト

以上のようなディスカッションを経て、生命の始まりと終わりに関する統一見解の作成が現状難しいことが確認された。

この様な状況に対して、アメリカにおいては Five Wishes という、自分に対する医療の行い方（延命を行うか、移植を行うか、など）を健康な時に既に表明しておくチェックシートが普及しており、多くの州でその表明は合法として処理されている（参考 URL : <http://www.agingwithdignity.org/5wishes.html>）。本分科会では、死生観の多様性に対応するために、日本においても類似のチェックリストを作成、普及させる事を考えた。分科会成果として、参加者の共同作業で作成したチェックリストを添付する。必ずしも全てのケースに対応できるものではないが、死生観をそれぞれの人間が選ぶという考え方を日本に持ち込む点において有意義な結果ではないかと考える。

また、日本で初めてカルテをすべて電子化するなど、先端技術の取り込みに意欲のある亀田病院に対して、我々の作成したチェックリストの試用を依頼した。結果的に病院のリソース的に実行部隊設置が難しいという点で実現には至らなかったが、十分な検討をして下さった事実があり、我々のファイナルプロダクトに一定の価値があった事が示されたのではないかと考える。

下記、チェックリストの項目の一部を紹介する。

事前意志表明チェックリスト（一部）

・治療法の選択にかかわるような宗教を信じていますか？

はい いいえ

・癌などの生命にかかわる病気にかかった場合、医師から病名・病状の告知を直接受けたいですか？又は家族や特定の人に告知してほしいですか？

・心肺機能が停止した際、蘇生することに同意しますか？

・脳死と心臓死のどちらを死と考えますか？

・上の問いで脳死と答えた人は、脳死になった場合延命装置を取り外すことに同意しますか？

市民参加の発展と非国家主体

分科会メンバー

唐澤由佳*

Geoff Lorenz*

青山泰司

杉山亮太

黄アラム

安田雅治

Jason Knudson

Morgan Swartz

Mako Tagata

Alissa Marque

(*印は実行委員を示す)



分科会設置の目的

国際政治システムは新たな段階を迎え、従来のアクターだけではなく、NGO、NPO や多国籍企業、テロ組織などの非国家主体の重要性が上昇している。市民が多国籍企業や NGO、NPO の活動に間接的、直接的に関わるようになり、その活動は国家や国境を越えて影響力をもつ。一方、政府と非国家主体の間に軋轢が生じたり、協調関係が潤滑にいかなくなったりする事例も見られる。このような問題意識のもと、本分科会では主に冷戦期から現在までの非国家主体の発展を検証し、今後非国家主体が人権問題や環境問題、宗教やイデオロギーなど、ボーダレスな諸問題に果たす役割を検討する。NGO 訪問などを通して、具体的な事例の中から政府と非国家主体の関係を抽出、実証したい。

事前活動

本分科会では、春合宿において五月からの本会議までの約三ヶ月間、環境問題をテーマに非国家主体の役割を検証するという目標をたて、合計七回のフィールドワークを行い、米国側との問題意識共有を図るため RT ペーパー（小論文）を執筆した。

フィールドワーク先一覧

ピースボート事務局、ほっとけない世界のまずしさキャンペーン事務局、
Green Peace 事務局、アジア開発銀行、三井物産株式会社、JANIC、
アムネスティ・インターナショナル

小論文タイトル

“Expanding Roles of Non-state actors” (Yuka Karasawa)

“The UN and NGOs: Can they Promote Human Rights Together?” (Alam Hwang)

“The role and possibility of civil society on the global issues” (Masaharu Yasuda)

“The International Policy Making Process-Case In The Kyoto Protocol” (Yasushi Aoyama)

“The Evaluation of NGO” (Ryota Sugiyama).

本会議活動

本会議では、コーネル大学で日米の参加者で問題意識を共有するために各自 RT ペーパーについてプレゼンテーションを行い、今後の方針と議論のトピックを話し合った。その後、議論やロールプレイ、企業や NGO へのフィールドワークを通してテーマに関する理解を深め、1ヶ月の成果を非国家主体と企業、市民が連携を深めることを目的としたワークショップのガイドラインにまとめた。今後は、このガイドラインを大学のサークルや NGO などに提言する予定である。

下記、本会議中に行った主要な活動であるロールプレイの様子と、ファイナルプロダクトのワークショップのアウトラインを紹介する。

8月12日 ロールプレイ

1日を通して、ロールプレイワークショップを行った。私達の分科会は NGO と市民社会の可能性について研究していたのであるが、ディスカッションのみでは不十分と考え、ロールプレイをやる事を考えた。目的は NGO の可能性と限界を NGO 同士また、NGO と他のアクターとの連携を実際に体感して知ることであり、そのため参加者が組織になりきって演じたのだった。メンバーは、自分の組織の名前、設立趣旨、行動目的のみを知らされ、自分の目的を追求するために、他のメンバー演じる組織と連携を探ろうとした。ロールプレイの舞台は、南方アジアに浮かぶ一つの島からなる発展途上国。私達が演じたのは8つのアクターであった。それは、人権監視、労働問題、貧困撲滅、NGO ネットワーク構築の4つの NGO。海運と人材の2つの多国籍企業それからメディアと先進国政府であった。1日を通してさまざまな事がわかった。企業は本質的に利益を第一に考えるが、消費者、投資家へのイメージも多分にも気にする。メディアとともに企業を叩くのは簡単であるが、雇用を減らさずに、効率よく問題の解決に当たるには企業の協力は必須であること、情報の重要性、ネットワーキングの難しさ、メディア倫理などであった。これらの興味深い結果は、サンフランシスコのフォーラムで発表した Tangible Result につながるものとなった。

ファイナルプロダクト

市民社会の発展と非国家主体の分科会は、テーマを広く保った議論をすることを目標とした。そのため、イメージとしてはみな共有していたが、実際に発信する「物」を何にするのかの議論は終盤になってからであった。ロールプレイやフィールドワークを通してアクター間の相互連携がいま必要とされているという結論に達した我々は、コラボレーションを促進する FORUM を開催しようと決めた。しかし、根本的問題に直面することとなった。

一方では学生として「理想主義」的なほど大きなインパクトを与えられるような FORUM/ WORK SHOP を考えていて、もう一方では現実的な実現可能性を考慮にいれ、我々で実行するというコミットメン

第4章 分科会活動

トの付いた FORUM/ WORK SHOP を考えていた。両者ともが譲ることなく、熱い議論が交わされることとなった。しかし、実行に移すのが私たち本人でなくてもよいという判断と、大きなプランを掲げ妥協案になるかもしれない方がもともと可能性を制限してしまった案よりもよいという判断、さらに Tangible Result とは「手にとって持てる物」を作るというよりも社会に「発信する」ための手段であって、短期的でなくても長期的にプランが実現すればいいという判断から、前者の大規模な FORUM/ WORK SHOP の計画書 (guideline) を作成することになった。

この計画書には大きく分けて二つの目標があった。

- ①人権 NGO の活動および、団体それ自体を市民に認知してもらうこと
- ②国家主体間のネットワーク、コラボレーションを可能にすること

この異なる 2 つの目標を達成するために、二日間のフォーラム(2 Day Forum)を計画した。

①の実現のためには、各 NGO がブースを設けたり、プレゼンテーションをしたりするスペースを作ること、またその場に多くの一般市民が入ってこられるようにすることが必要だと考えた。よって、9時から17時まで NGO FAIR と題した催しを開催し、午後には NGO だけでなく国際企業や国連、政府など国際政治のアクターを呼んだパネルディスカッションが同時進行で行われる。この議論を公開し、観客は無料で自由に入ることができるようにする。

②の実現のためには、前線で活躍する人たち同士でのグループディスカッションおよびワークショップを行うことが必要だと考えた。具体的には、まず大学教授などがコラボレーションをすることのメリット、NGO の弱点、ネットワーク構築や問題解決における方法論についての基調講演が行われる。次に、前線で活動する NGO 職員同士での意見交換の場を設ける。ここでは現実に直面している問題を共有しあい、相互に協力できる材料を提供しあうことで、縦割りになっている活動に横のつながりを持たせることも目的としている。ここでいったん休憩を取り、レセプションのような形で話し合い、共感を持った団体などと実際に連絡先の交換が行われることを期待する。最後に、参加していただいたすべての団体、NGO から政府までいろいろなアクターで計画を出し合ってコラボレーションプロジェクトを立ち上げる。ここでは、団体の自由裁量に任せる。なぜなら私たちはコラボレーションがしやすいように場所を提供することが目的であるからして、自主的に共同プロジェクトが発足することこそが最も望むことだからである。

以下、アウトラインのまとめを紹介する。

The Outline for the 2 Day NGO Fair and the Panel Discussions

Goals:

1. To raise awareness of the private sector especially the human rights NGO to the public.
→to become a bridge between the actors and the public.
2. Facilitate the networking of the NGOs with the other non-state actors so that they can collaborate easier.
→to become a bridge between the various non-state actors and state-actors.

Target: NGOs, Multi-National Companies, and state actors (not general public).

Schedule:

Day1 (Aiming for goal one)

9:00-17:00 The NGO Fair: one booth each to promote their activities to the public

*At the stage there will be a fixed time for each representative to make a short speech on their organization, and how they are seeking for assistance.

The panel discussions are optional for the public, and they can choose which ones to go to

1:00-2:00 What is an NGO? How can ordinary people participate?

2:30-3:30 Humanitarian aid/relief

4:00-5:00 Women's rights

*First panel—big famous NGO (maybe Common Ground, AI, HRW) with a good history

*Second panel—local NGOs or international NGOs working in humanitarian aid/relief

*Third panel—international organization (UN), professor introducing Japanese audience or prominent businesswoman. NGO can also join.

Day 2 (Aiming for goal two)

The NGO Fair (a lot of booths represented by non-state actors are open to public from 10:30-17:00)

10:00-10:15 Welcome guest speaker

→talks about the merits of collaboration and some of the problems in a general sense

10:15 – 10:30 Branch off of guest speaker and Brainstorm how to improve barriers

12:00-1:00 Lunch

1:00 – 17:00 Panel Discussion (optional)

* After each panel discussions, the panelist are provided with a small workshop in a different room discussing "how they can contribute and work together"

*The themes are undecided here because the panelists should come up with their own. This is a place for them to talk and share their difficulties leading to collaboration.

*basic structure: reps from 3 NGOs, one preferably student, one MNC, one from government sector (includes UN)—talk about what they need, etc.

終わりに

本会議の報告は分科会のブログにおいても行っておりますのでご参照ください。

(ブログ URL: <http://ecpjasc58.blog62.fc2.com/>)

末筆ですが、フィールドワーク、勉強会にご協力頂きました各団体、企業の皆様に感謝申し上げます。

多国籍企業とビジネスモデル

分科会メンバー

山田裕一朗*

Ben Seligman*

笠井寛子

尾田亜沙美

平岡萌子

源飛輝

Brian Miller

Hiroyuki Miyake

Andrew Ruffin

(*印は実行委員を示す)



分科会設置の目的

社会が企業に求めるものは時代とともに変わりつつある。利潤最大化、マーケットシェアの拡大、事業継続は企業にとっての至上命題であり、今後もそうあり続けるだろう。しかしながら、売上高が一国のGDPを超えるような企業が存在し、その影響力が深刻な環境破壊や南北格差の拡大に寄与しかねない現代において、企業は経済性だけでなく、社会性や人間性も考慮すべきではないだろうか。

当分科会では、米国企業訪問を通して、多国籍企業の戦略や役割について学ぶ。また、近年注目される企業の社会的責任（CSR）という理念を念頭に置きつつ、企業が求められる社会貢献と利潤追求を融合したビジネスのあり方を考え、提案していくことを目指す。

事前活動

私たち『多国籍企業とビジネスモデル』分科会メンバーは事前活動中、直接企業を訪問しお話を伺い、特にCSR（社会貢献）活動について学び知ることができた。

また、勉強会を通して、CSR活動には大別して3つのケースがあることを学んだ。1つ目は「本業がそのまま社会貢献となっている」ケースで、例えば資源会社による天然ガスの提供やクリーンエネルギーの開発は、企業の本業であり、同時に環境に対する取り組みともなっている。2つ目は「本業を活かした社会貢献活動」で、海運会社がNPOと協力し、自社の輸送船を利用して援助物資を海外に無償輸送しているという例がある。3つ目は「本業とは直接関係ないけれども、信頼醸成や企業評価向上のため、社会貢献活動を展開する」というケースである。例えば、環境保全を謳った企業が野鳥の会を支援している例などがある。消費者や投資家の目が肥えてきた昨今、企業がサステナブルであるためには社会への貢献

第4章 分科会活動

が不可欠だといっても過言ではない。私たちには、特に上記のケース1・2のように、大幅な追加コストがかからないCSR活動がサステイナブルであり、このようなCSR活動を行う企業がサステイナブルでありえるのではないかと考えた。

下記、事前活動で行った企業訪問時のメモを紹介する。

企業訪問メモ

日本郵船

・説明のない親切は警戒される

「国際的に、援助＝お金だけ出す、という日本は海外から理解されがたく、メッセージ性が欠如しているばかりに不思議に思われることもしばしばある。日本の陰徳の美の文化は万国共通ではないので、善意のお金がそう受け取られないこともある。」

※企業が国際的にCSR活動を行う際には、日本文化を相対化し見つめなおし、自分たちの基準を国際的な文化に合わせることも時に必要なんだなあ。

日本検査キューエイ株式会社

・今後の企業のあるべき姿とは、本物であること・透明であること！

「企業が透明であるためには、

- ①平常時でも外部とのコミュニケーション・情報開示を怠らないこと
- ②不祥事発生時などの非常時には説明責任を怠らないこと、

という二点が必要である。企業は不祥事が起こらないよう、事前に原因を十分阻止する必要があるが、万が一問題が生じた場合には、不祥事を隠蔽するのではなく、原因の説明と今後の対応の内容や手順を明確にすることが大切である。」

※人間のすることなら不祥事が起こる可能性はゼロとは言えない。

大切なのは不祥事発生時の対応と、そのときのためのプロセスを事前に用意しておくこと。

本会議活動

(参加者源飛輝、尾田亜沙美の文章をそのまま掲載しています。)

およよ！いつもは可愛いあの Ben の目つきが、RT ではとても鋭いのだ。ON と OFF がはっきりしている、アメリカのできる学生の象徴的な行動だった。そしてボクの目は…おっと閉じそうになってしまった。いかんいかん！昨夜は遅くまでビジネスプランを考えていて寝不足になってしまったものの、結局納得のいくものができなかった。そんな自分がもどかしくなる。

思い起こせば、コーネル大学での初めてのミーティング。日本側はこれからのビジネスで一大テーマとなりつつある CSR を軸に用意してきた。しかし、アメリカの学生は大した興味を示さない。CSR についてのスタンスや定義も日本のそれとは違うようだ・・・。「なんだこれは！ビジネス雑誌に書いてあった日米の違いというのはこのことなのか！」予想外の、いや、予想はしていたのかもしれないが、大きなカルチャーショックだった。更に皆でディスカッションをして一つの Tangible Result

第4章 分科会活動

を形作る、という事が簡単にできないくらいメンバーの個性は多様だった。声の大きい奴が勝つ、最初はそんな雰囲気も否めないまま、そこで一体何を話し合うのか、どのようなものを結果として残すのか、正直、そういう事から丁寧に議論を始めなければならなかった。いや、しかしこの状態、この感覚、多分これが「グローバルビジネス」なんだ！

見切り発車に次ぐ見切り発車は続いた。焦っていたし、一時は諦めかけたかもしれない。議論のスタイルの違い、バックグラウンドや予備知識、考え方の違い、旅の疲れ。だが、それでも同時に共通する多くのものを共有できた。勿論、笑い声もよく響いた。一人一人の信頼関係のようなものもますます濃くなっていった。それらの蓄積からであろうか、そしてなにより全員が楽天的に振舞う能力があったからだろうか、時間が経ち、ゆっくりではあるが気付けば議論が形になっていった。

時には結果を残さなければいけないという重圧や焦りを感じ、時には英語の壁があまりにも高く自信をなくした。しかし場面ごとにメンバーの誰かがリーダーシップを発揮し、お互いがお互いをフォローし合ってチームワークを発揮し…そうしてだんだん話がまとまってきた。気がつけば皆で協力して何かを作りあげていることに居心地のいい幸せを感じ、そして時には手助けをしてくれるメンバーのやさしさに夜ベッドの中で涙が止まらなかった。20日間という短い期間の中、皆それぞれその時に出来る精一杯の事をしてきた。Global Businessについて考えた事はもちろん、それ以外にもたくさん、あちこち私たちに与えてくれたRTだった。Global Issues, Kyoto Protocol, Marketing・・・本当に盛りだくさん、あちこち迷走した会議だった。もちろん楽ではなかった。「協調」と「妥協」は違うことも認識した。それでも、毎日いろいろな事を吸収しながらみんなで濃い経験を積めた。何よりみんなタフだ、本当にお疲れ様。皆で一つのを創り上げた感動、嬉しいことも大変なことも皆で共有した時間、これは何にも代えがたい、決して色褪せない、輝く真夏の素敵な思い出になった。

Ernst & Young や accenture、CPA のリチャード木綿氏、そんなところをこのメンバーで回ったのを思い出す。文字通りビジネスマンの格好良さに憧れた。やる気が出た。励ましがあった。さて、これから21世紀のビジネスはどうなっていくのだろう。あの夜に語り合った未来像がそのまま実現するのだろうか。あの夜に語り合った夢や理想が叶えられるだろうか。そしてビジネスが達成してくれる世の中とはどうなっていくのだろうか。このRTは決して終わらない。

久しぶりにRTの集合写真を見た。よくもまあこんなにタイプが違う人間が集まったものだ。自然と笑みがこぼれてくる。超面白い！また第2ラウンド、やろうね。

ファイナルプロダクト

「本会議を自分達の自己満足で終わらせたくない。」それは、分科会メンバーの共通した思いであった。

学生会議というだけあって、分科会は主に会議、つまりディスカッションやフィールドワークが中心に進んでいく。日米両国から、異なった文化背景を持つ学生達が集まってディスカッションをするというのは、それだけで非常に面白いものである。だがそれゆえに、何かについて議論をするというだけで、充実感を得てしまいやすいというのもまた事実である。しかし、日米学生会議の存在意義を考えたとき、せつかく多くの人々の支えのお陰で成り立っているこの会議を、参加者の満足、充実だけで終わらせてしまうのでは勿体無い。議論を通して何かを学び吸収し、そこから何かを創造し、さ

第4章 分科会活動

らにそれを会議外へも発信していくことが私たちの責任であるはずだ。

そういった思いを胸に、「多国籍企業とビジネスモデル」分科会の私たちは、Tangible Result として一つのビジネスモデルを作成した。日米両国で起こっている社会問題として、高齢化社会と働く女性の子育てという二つの問題に注目し、それをビジネスという手法を用いて解決する道を探ったのだ。そして、本会議中に出来上がった一つのビジネスモデルを、日本とアメリカそれぞれに持ち帰り、コンテストに応募するなどして、出来る限り多く社会に提示する機会を持つということになった。

日本側では帰国後、「eco japan cup 2006 ～ソーシャルビジネス賞～」と「SOHO CITY みたかビジネスコンテスト」に応募した。日米両国に共通した社会問題を選んだとは言っても、各国の社会状況はあらゆる面で違うため、コンテスト応募に際して、より日本社会に適合するような形に変える必要があった。その作業過程では、本会議中には見えなかった問題点なども多く見つかり、会議終了後にも関わらず非常に興味深く充実した議論が行われた。

本会議終了時に提示した Tangible Result は一つのスタート地点と考え、今後も他のコンテストに応募したりプロフェッショナルの意見を聞いたりして、何らかの形で社会に提示していく道を探りたい。

(分科会参加者 平岡萌子)

(分科会の活動内容は、第58回日米学生会議ブログ <http://jasc58.blog33.fc2.com> でも紹介しています。)

総括

2006年5月5日春合宿。ぼくたちのはじまり。それまで8ヶ月間、実行委員としてひたすら準備に勤しんできたぼくには、その日から、架空の世界で思い描いてきた分科会という存在に、参加者が集い、血液が流れ始めたことに強い喜びを感じたことを今でも鮮明に覚えている。敢えて、ぼくが総括としてまとめなくても、この半年間みなと一緒に感じたこと、目指したことは、分科会メンバーのみんなが、事前活動、本会議、Tangible Results 編で書き綴ってくれた。英語力も高くない。ずば抜けた知識があるわけでもない、そんな分科会のコーディネーターだったが、みんなと一緒に助け合って分科会を作っていた、その事実にはぼくは、心から喜びを感じる。みんなありがとう。

最後に、事前勉強会というかたちで、私たち日米学生会議メンバーに貴重な機会を与えてくださった企業、大学、OB/OGの方々にこの場を借りて御礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

(分科会コーディネーター 山田裕一郎)

訪問先企業一覧

三洋電機株式会社
日本郵船株式会社
東京ガス株式会社
帝国石油株式会社

宝酒造株式会社
石油資源開発株式会社
日本検査キューエイ株式会社
富士通株式会社

多文化主義とマイノリティ

分科会メンバー

島村明子*

Rachel Olanoff*

小笠原瞳

高井竜輔

松田浩道

三窪英里

Sonya Kuki

Frank Heydari

Justin Long

Jennifer Hayden

(*印は実行委員を示す)



分科会設置の目的

近年、グローバル化の進展につれ国を越えた人々の移動(Global Mobility)がますます盛んになっている。旅行やビジネスなど一時的な滞在者だけでなく、移民や難民の流入が増え、異なる民族やエスニシティを持つ人々といかに共生していくかが今日の世界的課題となった。日本でも、少子化による労働力不足を補填するため移民を受け入れようとする動きが広まる一方、古くから「閉鎖的」と評されるように外国人やマイノリティへの差別は根強く、行政の対応も遅れていた。「多文化共生」という文言が国の政策に登場したのはやっと昨年の 2005 年のことであり、外国人を同じ生活者として尊重し、共に社会を築く取り組みは最近始まったばかりなのである。他方アメリカは、「人種のサラダボウル」の言葉が表すように歴史的に移民の国で様々なルーツを持つ人々が共存している。しかしその実態は、ネイティブアメリカンの抑圧の歴史を持ち、未だに黒人やマイノリティへの差別も残っている。近年の急速なヒスパニックの増加もアメリカのこれまでの社会構造に大きなインパクトを与えている。

状況の違う二つの国の比較やマイノリティ・難民の問題等の考察を通して、様々な角度から「多文化共生社会の実現は可能なのか」を考察した。

事前活動

渡邊彰悟弁護士氏訪問

7月1日、私たちは在日ビルマ人難民申請弁護団・事務局長である弁護士の渡邊彰悟氏を訪ね、お話を伺った。渡邊弁護士は難民の定義から現在日本の入管行政が抱える種々の問題点まで資料とユーモアを交えて丁寧に説明され、入管による入国管理の基準の不透明さと、難民受容に対する日

第4章 分科会活動

本の国としての意識の低さを最大の問題点として挙げられた。二十年以上にわたってビルマ人難民の支援をしてこられた氏の言葉は迫力と説得力に満ちており、本会議に向けた問題意識とモチベーションが培われた。

山脇啓造明治大学教授訪問

5月7日、総務省多文化共生の推進に関する研究会座長（2005年度）などを務める明治大学の山脇啓造教授にお話を伺った。「多文化共生」という概念が日本に登場するまで、各地での取り組み、今後の課題などについて、実務・理念の両面において幅広くお話くださった。先生は過去の日米学生会議参加者でいらっしやり、JASCでの経験を活かし多文化共生に取り組む先生のご活躍を拝見できた意味でもとても有意義なインタビューであった。

在日大韓国民団中央本部座談会

5月7日、在日韓国人最大のコミュニティである「在日大韓国民団中央本部」から、私達と同じ世代の学生会の代表3名を招いて座談会を行った。在日韓国人というマイノリティとして日本で生きることの不都合などを学生会の方に自身の経験を交えて話していただいたり、「多文化共生」するにはどうすればよいかについて同じ学生の視点から建設的なディスカッションをしたりと、和やかな雰囲気での交流することが出来、とても良い経験となった。

法務省入国管理局訪問

6月16日、法務省入国管理局を訪問し、東京入国管理局総務課広報係の東郷康弘係長、ならびに難民認定室の中村淳補佐官からお話を伺った。両氏は日本の難民認定は件数でこ他のG7諸国に比べて少ないものの率ではこれを上回るか同程度の水準にある点、ならびに新しく導入された参与員制度が認定基準の透明性向上に資する点などを説明して下さった。先に伺った弁護士の先生とは相反する立場の方から意見を伺えたことは、「多文化共生」について多角的な視野を得る貴重な機会となった。

上記の訪問先の他にも新宿多文化共生プラザや難民支援協会など実際に「多文化共生」の現場で働かれているNPOやNGO、個人、政府関係者と様々な関係者の方々から貴重な説明や意見を得ることが出来た。私たちのために貴重な時間を割いて下さった関係各所、関係者の皆様に心より御礼申し上げたい。

本会議活動

本会議中の活動としては、主に各自のプレゼンテーション、フィールドトリップ、サーベイの作成と調査と分析の三つのものがあつた。

第4章 分科会活動

プレゼンテーション

Global Mobility 分科会では、各参加者が事前に行ったレポートについて一人ずつ発表し議論を行った。マイノリティの問題を、各自の関心のあるテーマに焦点を当てて活発な議論が行われた。その中で、移民国家といわれるアメリカとマイノリティが少ないといわれる日本との違いを知った上で「多文化教育」、「難民認定」、「在日問題」、「移民問題」などについて意見交換をすることができた。ヒスパニックや日系2世の問題、差別はなぜ起こるかということについても幅広く議論することができた。

フィールドトリップ

フィールドトリップでは、CIS という移民問題を扱うシンクタンクをたずねて移民政策についてお話を聞いた。ビルマ問題対策について専門的に仕事をなさっている方を分科会に招いてレクチャーをしていただいたのも非常に有意義であった。Asian Law Caucus ではアジア系移民に関する人権問題の話を聞き、マイノリティに関する問題を扱う NGO 団体が一つのビルに集まっている施設も訪問した。フィリピン人のアフターマティブアクションについての団体、Reproductive Justice について研究している団体など、様々なアプローチからマイノリティ問題に取り組む人々から多くの刺激を得ることができた。

サーベイの作成

個人のプレゼンテーションと並行して、アンケートの目的、方法を話し合い、各自の考えた案をまとめてアンケートを作成、収集した。

ファイナルプロダクト

サーベイアンケートの目的

「移民の国」と呼ばれるアメリカで最近ヒスパニック系の移民に対して国家を二分するような議論が白熱している。このことはメディアや政治、そしてデモの存在などで伺える。だがその一方で、メディアを通じて我々が認識しているアメリカの世論は、どれぐらい現実と適合しているのだろうかという疑問もある。日本の移民問題に対する世論とどう異なるのであろうか。そして、人々の認識がどれだけ政策に影響を与えるのだろうか。これらの疑問を探求するために、アメリカで開催された本会議中に調査を行うことにした。また、アメリカで5つの都市を訪問するチャンスを生かして世論の地域差の有無を検証しようとした。具体的には、人種、収入ないし経済力、支持政党などが移民政策や不法入国規制に対する立場に影響を与えているという仮説を立て、アンケートを分科会で作り上げた。

また、もう1つの副次的な目的として、分科会として街頭調査を行うという明確な目標を立て、それに向かって分科会として協働することで、出身も国籍も異なる分科会メンバーの相互理解を促進するというものもあった。

サーベイの調査方法

本会議中にワシントン DC、オクラホマ、サンフランシスコにおいてホテルや大学内、公共施設周辺

第4章 分科会活動

や道端などを中心に無作為に街頭調査を行った。人種、経済力（国家・個人）、政治的選好、移民との接触度合、居住地域、性別など移民政策に対する態度に影響すると思われる要素を基に作成した約20項目からなる質問をした。結果計92人からサンプルを採取することができた。

サーベイの結果とその解釈

線形回帰分析を用いて標準偏差をだした。その中で相関関係が上がった統計として意味をなす変数のみを取りだし、それ以外の変数は決定的でなく意味をなさないものと考えて除外した。

1. まず経済的観念に着目した分析結果によると、概して自己または国の経済的将来性をあまり見込んでいない人は移民の寛容政策に批判的である。しかし、一方で移民が経済効果に利をもたらすと考える人は、移民のための多言語サービスを支持する傾向がある。具体的には、対象が市民権を持つ、持たないにかかわらず、法的書類や議事録などといった公の文書の多言語翻訳や通訳といったサービスが必要だと考える人が多い。
2. 次に年齢、思想の順に着目した結果を述べる。年齢については、高くなるにつれて移民に対して不寛容で、市民権を持たない人が市民と限りなく近くまたは同等に、公的多言語サービスにアクセスする権利を受け入れようとしなくなるということが明らかになった。
3. 政治的イデオロギーないし支持政党は、ある部分では非常に重要な意味を成してくる。はじめに、民主党により強い帰属意識を持つ人は公的教育、福祉、失業者補助などといった移民に対する公的利益の充実についてより肯定的である。
4. 国境管理や警備の強化を求める人はより高い頻度で強制退去の免除を認める際により長期的な課程を必要とする政策を支持するか、いかなる場合においても免責を否定する政策を支持している。
5. 人種に関しては、相関関係をみることはできなかった。また性別と移民との接触度についてもそれら単独では明確な傾向を読み取ることは不可能であったが、それら2つの変数を組み合わせることで、有意水準を示すことができた。それは、女性の中で移民との接触度が高い人は不法移民に関してより公的利益や福祉、また言語面でのサポートの必要性を支持していることだ。
6. これらのデータは、西海岸、東海岸、南部といった地域間においても比較されたが、明確な違いを見出すことはできなかった。

今後の社会還元の方法

さらに広く多様な例をとり、調査の日本語訳、日本人被験者への改正を行った結果日米間の比較により新たな移民に対する人々の思い、多文化共生社会への可能性を思索し、Global Mobilityの進む世界においての問題点や改善点を見つめなおす。自由に発表できる場を設けより多くの人に認知してもらうことが社会還元への一歩だと思う。

文化とアイデンティティ

分科会メンバー

波多野綾子*

Yoko Kamitani*

大原学

菅家万里江

高橋裕美

由井啓太郎

Erica Carson

Eun Kyung Choi

Kelly Hill

Daniel Orlowitz

(*印は実行委員を示す)



分科会設置の目的

かつて、「日本文化」や「アメリカ文化」など、国家の枠組みで捉えられてきた「文化」。しかし今、日本の若者はヒップホップに酔い、アメリカ人も manga に夢中になる。国境を越えて広がる「サブカルチャー」は伝統文化を破壊すると同時に、過激な表現により時に偏見を生み出す害悪なのか。それとも、日本やアメリカといった国民文化を超えた、新たなアイデンティティを生み出す鍵なのだろうか。本分科会では、日米間そして世界の異文化コミュニケーションの重要なファクターとなった「サブカルチャー」に着目し、グローバリゼーションの渦中における文化の伝統と近代化、メディアリテラシー、ナショナリズムやソフト・パワー論の理解に新たな光を当てる。

事前活動

本会議に備えて、議論の基盤となる知識の共有化をはかるため、またプレゼンテーションの練習をするため、2週間に一回程度の「文化とアイデンティティ」に関するトピックを扱った文献の講読会を行った。各回担当者が発表し、それに関して質疑討論を行うという形で行った。

ぷちナショナリズム症候群 (香山リカ著、中央公論社、2002年)

W杯サッカー、内親王ご誕生、日本語ブーム等、ポップで軽やかに“愛国心”を謳歌する若者。その意味を考へることもせず、屈託もなく「日本万歳」と言ってしまう現代の若者中心に広がっている状態を「ぷちナショナリズム」と名付け、精神分析的な観点から分析したのが本書である。米国テロ事件、欧州極右の擡頭等、世界情勢が混迷する中、この「愛国ごっこ」であるぷちナショナリズムがラディカルなナショナリズムに転じていく可能性に対して、様々な具体例を取り入れなが

第4章 分科会活動

ら強い警告を発している。筆者は YOSAKOI ソーラン祭りのような「和」の要素を少しだけ取り入れた上で自由度を高くした祭りや、異なる階層間の結託といった処方箋を示しているが、それでも十分なものとはいえない。こうしたぷちナショナリズムを何も考えずに受け入れ、流されてしまうことが、非常に危険なことになりうるということを理解した。

嗤う日本の「ナショナリズム」(北川暁大著、日本放送出版協会、2005)

セカチューや、冬ソナには目もくれなかった2ちゃんねる層が支持した純愛物語「電車男」。これには、「ベタな感動とアイロニカルな感性の共存」がみられる。また窪塚洋介に見られる「世界思想と実存主義の共生」。これらの互いに相容れない思想が共存しているという2つのアンチノミーが現在の日本で流行している原因を、日本の歴史を振り返りながら探求していった作品。これにより、アイロニーの行き過ぎや、何でもネタになるコミュニケーションの共同体、他者との連帯への欲望から、「ベタな感動とアイロニカルな感性の共存」が、「自分が直接世界に働きかけたい」という感情や、反省への欲求から、ナショナリズムが選択され、「世界思想と実存主義の共生」という現象が起るようになったことを理解した。

想像の共同体 (ベネディクト・アンダーソン、NTT出版、1997年)

国民とは、「想像されたもの」であり、「限られたもの」「主権的なもの」「共同体」である。そして、ナショナリティ、ナショナリズムは、文化的人造物であり、政治的イデオロギーではない。クレオール歴史や、宗教的共同体がどのように変化していったかを考察することで、この作品はナショナリズムの文化的根源を探っている。この作品を通して、今の日本文化を見直そうとする動きはなぜ起きているのか、といったことを討議し、理解を深めた。

国家の品格 (藤原正彦著、新潮社、2005年)

世界における日本の独自性、その美しさを主張し、「日本を見直そう」という動きに大きく貢献した作品が「国家の品格」である。この本では、欧米の近代的合理精神が限界に達し、それが現代のひずみにつながっていると述べ、世界で唯一の「情緒と形の文明」である日本は、論理よりも情緒、民主主義よりも武士道精神を重んじ、「国家の品格」を取り戻すことが大切であると述べている。そして、欧米支配下の世界における「孤高の国」として、世界に範を垂れることこそが、日本の果たしうる、人類への世界史的貢献である、と結論付けている。この作品に対する、肯定的・否定的意見の双方を検証することによって、現代日本人の中の愛国的感情とアイデンティティについて討論した。

オリエンタリズム (E.サイード著、平凡社、1993年)

オリエンタル(東洋、東洋的、東洋性)は、西洋によって作られたイメージであり、文学、歴史学、人類学等、広範な文化活動の中に見られる。それはしばしば優越感や傲慢さ、偏見とも結びついているばかりではなく、サイードによれば西洋の帝国主義の基盤ともなるとされる。「相互理解」

を妨げ歪める人間の偏見がいかんにして形作られ、社会に、世界に肥大していくのかを事例をあげながら考え、その現代的なインプリケーション、例えばアメリカにおいての日本の表象はオリエンタリストックといえないか、現代日本では「他者の視点（オリエンタリズム）の内面化」が行われていないかといった点などを議論した。

本会議活動

本会議では、参加者が事前に用意したレポートを基に、下記のようなテーマについて議論した。

- ・様々な文化体系の中でのサブカルチャー、その力
- ・ポップカルチャーのインパクト
- ・文明としてのサブカルチャーの可能性
- ・韓国における日本文化規制の開放
- ・若者のサブカルチャーの商業化
- ・オタク
- ・日本のコンテンツビジネス
- ・学生の国際文化交流の現在の検討

また、ワシントン D.C.において、まだ著名でないローカルアーティストを支援する DCCAH (District of Columbia Commission on the Arts and Humanities)という団体を訪問し、また Eth-Noh-Tec というアジアの都市伝説を演劇の形で発信する団体を訪問し、文化のメインストリームとサブカルチャーの相互関係について意見交換を行った。

ファイナルプロダクト

サブカルチャーというものが、漫画やアニメに象徴されるように、非言語的で視聴覚的な要素を最大の魅力として、国境を越えた広がりをもつこと。そして、それは高度なリテラシーを要求するハイカルチャー（活字文化）に対抗する形で誕生したこと。そして、その文化を享受する人々はオタクという名称を与えられ、その爆発的な増加にも関わらず、どこか社会と無縁なところで閉鎖的な共同体をつくっていること。当初私たち日本側の学生は、そのようなイメージでサブカルチャーというものを考え、その魅力や将来の重要性は十分に承知しながらも、サブカルチャーが生み出す不気味な文化空間というものに警戒の意識をもっていました。しかし、本会議の活動において、アメリカ側の学生たちと充実した議論を交わし、訪問先のサイトで出会った様々な「文化実践者」の話聞くことで、サブカルチャーの本質について私たちの視野は大きく広がり、さらに見通しのよいものとなったのです。

アメリカでは、社会で主流となっているメインストリームの文化に対置するマイナーな文化を広くサブカルチャーとして定義しています。社会に抑圧されたり差別されたりする人々や、現状の社会が提示する文化的なモデル（それは、休日に聴くべき音楽だとかレストランでの振る舞い方にまで及ぶ、日常生活様式を規定する規範）に納得、あるいは満足できない人々が、主体的な選択にもとづい

第4章 分科会活動

て能動的に作り出す文化、それがサブカルチャーだということです。したがって、アメリカのサブカルチャーは、主張であれ批判であれ、社会に向けてなんらかのメッセージを含むものであり、日本のオタク集団のように狭い領域で自足する共同体は存在しないのです。

文化の輪をどんどん閉ざしていき、一部の精通した者だけが享受できる奥義のようなものを建立することが文化の成熟ではないのです（華道や茶道といった日本の伝統文化にもこの傾向はある）。文化は、人から人へと広がっていくこと、すなわち伝達していくことにその本質があります。そして、人々が様々な文化的モデルの選択肢の中から、自分の価値観にあったものを選びとり、組み合わせていくこと。組み合わせのヴァリエーションが一人一人の個性を形成するのです。

サブカルチャーのもつすぐれた伝達性、社会を活性化するエネルギー。私たちは、日米学生会議という経験を通して、日本にいたるだけでは決して知り得なかったその有効性を理解することができました。そして、次のように考えるようになったのです。「日本とアメリカの学生が、国境を越えて知識や喜怒哀楽といった感情を伝達し合い、共有し合い、世界平和に向けてメッセージを発信しつづける日米学生会議こそがサブカルチャーである」と。そして、この思いを誰もが自由にアクセスできるインターネットの世界に開くこと。私たちの分科会は、日米の学生が共同でホームページを開設することにしました。

ホームページの内容は以下の通りです。まず、上述したような分科会の活動やその成果を掲載しました。日本とアメリカにおける「サブカルチャー」の定義の違いなどは、実際にそれを議論のなかで体験した私たちだからこそ、伝えることのできるトピックではないかと思います。その他にも、日米学生会議全体の様々な活動の記録を映像とともに盛り込み、私たちが一ヶ月間アメリカでどのような経験をし、どのように成長したのか、非常に分かりやすく見ることができます。こうしたサイトを通して、より多くの人々が日米学生会議のことを知り、その伝統と未来の可能性に興味や関心を抱いてもらうことが私たちの願いです。また、「マイ・サブカルチャー」と題して、アクセスした人が自由に意見交換をできるスペースがあります。様々なバックグラウンドをもつ人々が、自分の文化的活動の報告や文化に対する考えを交換し合うことで、サブカルチャーの可能性がどんどん広がっていくことを期待しています。

最後になりますが、私たち「文化とアイデンティティ」の分科会では、これからも具体的には、ホームページの維持・発展や学校等を訪問して講演をするという活動を通して、自分たちが喜びや苦しみとともに味わった経験を伝えていくことにしたいと考えています。なぜならば、人々の知的好奇心や生活意識を刺激して、そこから新たな行動を引き起こすことこそ、文化の最良の特質であり、日米学生会議を通してそのような経験をした私たちには、今度は逆に人々に向けてメッセージを発信していく使命があると考えからです。

(分科会参加者 由井啓太郎)

第5章

JLP (ジャパデリリードプロジェクト)

JLP とは.....	68
焼き鳥プロジェクト.....	68
お好み焼きプロジェクト.....	70
よさこいプロジェクト.....	71

JLP とは

近年、健康志向の高まりを背景に海外において日本食が注目され、また日本の伝統芸能やマンガやアニメなどを始めとしたポップカルチャーの人気の高まるなど、日本のソフトパワーが認知されつつある。日本の文化に直接ふれる機会の比較的少ないアメリカ開催回である第58回日米学生会議では、ソフトパワーの面からの日米交流に注目し、日本文化の紹介と、参加者同士の交流を深めることを目的としてジャパデリ・リード・プロジェクト(JLP, Japadele Lead Project)活動を行った。

JLP 活動では、日本側参加者がイニシアチブを取りつつ、アメリカ側参加者と共同で日本の料理や踊りなどを体験した。第58回会議最初のサイトであるコーネル大学では、広い空の下、芝生の上で焼きそばと焼き鳥を調理した。ワシントン D.C.では、オタフクソース株式会社様のご賛助で提供されたお好み焼きセットとアメリカで手に入る食材を用いてお好み焼きを作り、滞在していたホステルの宿泊客にも振舞った。(オタフクソース株式会社様には、本会議前の事前活動においてもお好み焼きの作り方のレクチャーを頂きました。重ねて御礼申し上げます。) 本会議最後のサイトであるサンフランシスコでは、本会議開始直後より少しずつ練習を重ねていたよさこい、ソーランを街の中心であるユニオンスクエアで披露し、街行く人々の喝采と賞賛を受けた。

今回、日本側代表者が率いる文化交流プログラムを設けたことは、言語という壁を乗り越え、アメリカにおいて日本文化を発信する有意義な機会となった。常に真剣でまた過密とも言える本会議のスケジュールの中に、気楽な気持ちで文化交流を行う機会が設けられたことは、参加者の交流をさらに促進したとも言える。

以下、各サイトで行われた JLP 企画の中心人物からの感想を掲載する。

コーネル大学 焼き鳥プロジェクト

(第58回日米学生会議参加者 由井啓太郎)

男たちは、本会議が始まってから最高潮の緊張を感じていた。コーネル大学の学生寮の庭先には、即席のバーベキューセットが設けられ、テーブルの上にはひとつひとつ丁寧に串を通された焼き鳥の材料がずらりと並ぶ。ここまでは、女性陣が頑張ってくれた。さて、ここからが俺たちの勝負だ。アメリカの学生たちに日本の食文化を理解し、味わってもらおう。これが最大の使命だ。いやいや、男たちの腹蔵にはもうひとつ壮大な野心が秘められていた。ここで、アウトドア派の男らしさ、寡黙にみんなの喜びを下から支える高倉健のような男らしさをアピールしたい。「わー、～君て素敵ね」「ワオ、ユアア、クール」もちろん女性からの黄色い歓声がなによりも期待された。

競うように焼き鳥の串を奪い合い、自分の定位置を確保して、男たちは仕事を始めた。熱したバーベキューセットの周りには、それよりも暑苦しいほどに所狭しと男

たちが集い、思い思いに「焼き」を試みる。

いつ串をひっくり返すか、タレはどれくらいつけるか、そこに個性が出ると信じて...と、そこに何やら怪しい集団に興味を感じたアメリカの男子学生たちが近づいて来た。「オオ、イツ、インテレスティング」結局、さらに暑苦しい集団が完成された。気になる女性たちは、焼き場からはるか遠いテーブルで楽しそうに焼き鳥を食べながら、談笑している。周りには、日本とアメリカの男、男、男。

しかし、不思議なもので男たちは、いつしか「焼き」そのもの楽しさを感じ始めていた。くるっ、くるっと串を回転させる自分の手のグリップに酔いしれ、「はい、タレちょうだい」「了解!」「カモン、イズ、ディス、オーケー?」「イエス、グッド!」そんな掛け声に国境を越えたチームワークを感じていたのだ。

医学部の日本人学生が持参した注射器が、タレを串にかける最高のアイテムとして大活躍した。慣れないアメリカ人学生を手ほどきするなかに、心と心の交流があった。

気がつくや、焼く人、食べる人、男の子、女の子、日本人、アメリカ人の区別なく、みんなが楽しそうに焼き鳥パーティーを満喫していた。ただ、「焼き場」の男たちの笑顔だけは炭で黒く汚れていた。そして、最後に日米双方の男たちは、「ヤキトリ」という大歓声を上げ、串でつながった友情を確かめ合った。その日以来、会議全体にひとつの絆が生まれたことは間違いない。下準備を頑張ってくれた人たち、「焼き」にひたすら打ち込んだ人たち、そして何よりもおいしそうに楽しそうに食べてくれた人たちがいたからこそこの絆だ。当初の目的は果たせなかったものの(?)、男たちはタレよりも濃い友情を手に入れた。



ワシントンD.C. お好み焼きプロジェクト

(第58回日米学生会議参加者 佐藤友紀)

ジャパデリリード企画の1つとなったクッキング。今や世界的に愛されており、ヘルシーでおいしい日本食を、JASC 中に一緒に作ろうと、クッキングチームは春合宿より行動を開始した。楽しく作れて、おいしい、そして日本をもっと知ってもらえるきっかけになれるメニューは…。おにぎり、トン汁、てんぷら、カレーなどなど、2晩72人分の夕食になるという、責任の重さを感じながら、限られた調理器具と限られた材料で作れるメニュー、そしてなにより、アメデリの好みに合うかどうかを熟考し、結果考えたメニューは、お好み焼き、焼きそば、焼き鳥の3品。このうちワシントンD.C.サイトでは、お好み焼きを調理することに決定した。アメリカに経つ以前に、お好み焼きソースといえは、おたふくの、おたふく株式会社様の全面的な協力を得て、なんと約十名のJASCerは、お好み焼き研修を受講させて頂いた。戦後まだ食料が不足していた当時のお好み焼き誕生のことを学びつつ、いかにおいしくお好み焼きを作るかというポイントを伝授して頂いた。また、お土産セットというお好み焼きパックも大量に寄付していただき、このパックを2つずつ詰めてジャパデリ全員はアメリカへ旅立ったのである。まず、コーネル大学で焼き鳥を、そしてワシントンD.C.のホステルでお好み焼きを作った。

D.C.でのお好み焼きは、ホステルのキッチンスペースでの調理ということもあり、一枚ずつフライパンで行うことは、全く効率的でないことを考え、一度に大量に作り出す為、オープンでの調理となった。お好み焼き研修を開催して下さったおたふくの皆様には非常に申し訳ないと思いつつも、備え付けのオープンをフル活用し、ラザニア用の巨大プレートに油を敷き詰め、生地を流し込み、シーフード、豚肉などを敷き詰め、焼いた後ひっくり返すという工程を繰り返し、72人分の胃袋を満足させることが出来た。アメデリの口に合うかどうかと心配していたのは全くの見当はずれで、みんなとても気に入ってくれたようだった。4回おかわりに来てくれたあるアメデリに対しては、嬉しい気持ちと胃袋を心配する気持ちと両方抱いたが、アメデリ、ジャパデリ共に、準備、調理、片付け共に大変協力的に動いてくれたので非常にスムーズに行われ、クッキングチームもとても楽しむことが出来たのではないだろうか。

最終的に、バックステージで買出しや野菜切りなどの非常に地味な作業をしてくれた人々の助けのおかげで、このクッキングは成功することが出来た。コーネルでもD.C.でも、目的以上の結果、つまりアメデリジャパデリのたくさんの「おいし〜!」を聞くことが出来、非常に楽しく、おいしく、また強いチームワークを培った企画であったと感じている。

サンフランシスコ よさこいプロジェクト

(第58回日米学生会議参加者 大原学)

これまで留学先やサークルなど色々な場所で踊ってきた自分が今回任されたよさこいプロジェクトだったが、これまでと今回が決定的に違ったのは、メンバーがみな「踊りをやりたい」というモチベーションが高いわけじゃなかったことだった。言ってみれば踊りなんかしたことない、むしろみんなの前でそういうことやるの好きじゃないって人もたくさんいた。だからこそ、やる気がでた。場所もサンフランシスコの中心街ということで、一般の人も巻き込んでできたらこれもまたおもしろいじゃないか、と。

本番までに何度か有志を募って練習した。時間なんてほとんどないからいつも練習は朝の7時から1時間とか夜11時から1時間とか、予定の隙間を塗って踊りの練習する感じだった。一人じゃとても教えきれない人数だったんだけど、ある程度教えたら自主的に他の人に教えてくれる人や、興味を盛ってくれる人が増えた。本当ありがたい。どんなに疲れてても、「楽しい」って言ってくれる人がいれば、人間なんとかなるものだ。

本番は8月15日の夕方。

近くの電気屋でデッキを買う。音をチェック。

ユニオンスクエアにつくと、すでに自主的に練習してる人たちの姿。ああ感動。

まだ一度も練習したことがなかった人もいたので、30分くらい練習。

一般の人は、「何してんだあいつら？」みたいな感じで興味深々。ああいう感じはたまらないねー。

実はそこで踊ることの許可などを取っていなかったらしく、警察とか来る前に早く終わらせてと言われたので、予定より早く始めようということになった。

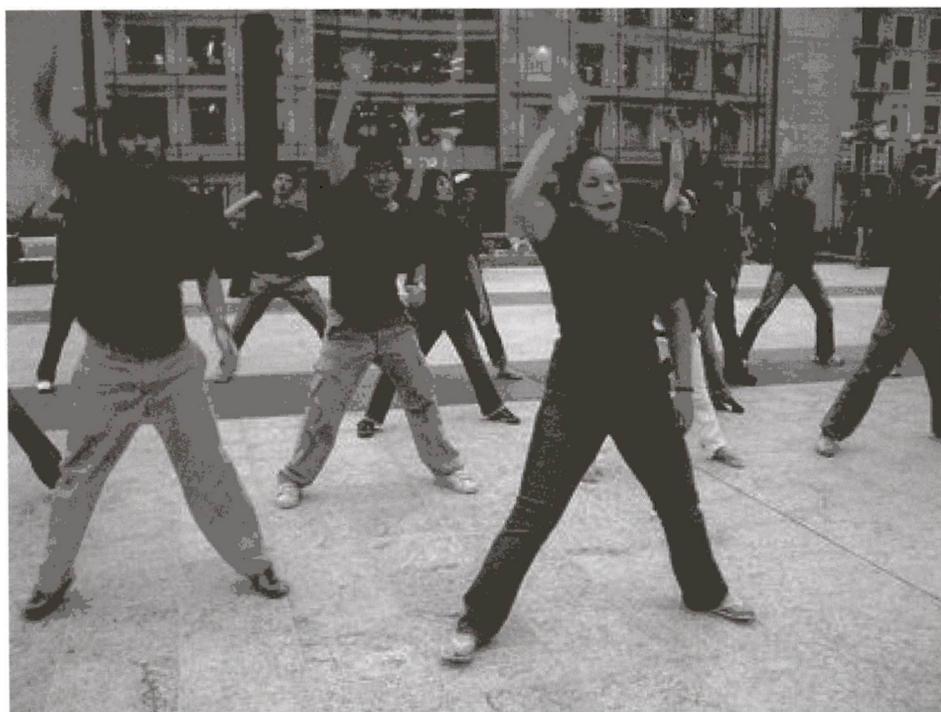
みんなで踊った南中ソーラン、こいや井はめちゃくちゃ楽しかった。たぶん、誰よりもオレが楽しんでたと思える自信がある(笑)。

それが終わったあと何日か経ったある日、日本に帰る直前のこと。

ユニスというアメリカ側参加者が帰り際興奮して涙ながらに言ってくれたこと。

「私はシャイだから、みんなの前で踊るなんて絶対いやだったし、これからも一生そんなことはないと思ってた。でもやってみたらすごく楽しかった。あのときから、私もJASCもすごく変わった。ありがとう。」

一生忘れない一言が、また増えた。学生会議に出て、よさこいやって、本当によかった。



第6章

JASC テーマソング

JASC ソングとは.....74

58th JASC SONG 作成の試み.....74

JASC ソングとは

1934年に生まれ、戦争期間などを挟んで断続しながらも今日まで継続されてきた日米学生会議には、その長い歴史に埋もれてしまった貴重な遺産が数多く存在する。そのような遺産の一つに、1935年に作詞・作曲された会議のテーマソング、JASC ソングがあった。この会議オリジナルのテーマソングは、2004年、日米学生会議の70周年を祝う記念誌の編集中に偶然発見され、山本東生 OB 会幹事長の指揮の下、第28回会議参加者の竹内幸美氏らの多大なる尽力により作曲当時の形に復元されている。2005年に開催された第57回会議において参加者全員の合唱により正式に会議に復活した美しいメロディは、2006年の第58回会議でも歌われ、また将来も歌い継がれるであろう。

第58回会議ではさらに、参加者の自発的な交流の結果新たに生まれた58th Conference Song も歌われた。以下、これら2つの歌の楽譜と、58th Conference Song 作曲のリーダーシップを取った参加者、松田浩道の稿を紹介したい。

58th JASC SONG 作成の試みー作成の経緯と理念

共に一ヶ月を過ごした仲間と別れてしまう前に、このすばらしい58th JASC を自分たちなりに何らかの形に残すようなことはできないだろうか。そのような思いから、オクラホマにて新しいJASC SONG を作る企画がスタートした。58th JASC SONG 作成責任者に立候補した私は、オクラホマでのルームメイトであった Casey に相談し、彼のアイデアをもとにしながらまずオリジナルバージョンが出来上がった。せっかくの機会であるから、なるべく大勢のデリゲートに関わる形で完成させたいと考えた私は、会議期間中、なるべく多くのデリゲートに曲を歌って聞かせ、意見を聞いてもらった。たくさんのアイデアをなるべく取り入れ生かしながら何度も書き直しを行い、多くの変更がなされたあと、最終日のレセプション直前に完成したのがこの58th JASC SONG である。大急ぎで十数名の有志を集め、レセプションの場で歌い初披露をすることができた。

この58th JASC SONG を作る上で念頭に置いたことが2点ある。まず第一に重要視したのは、第58回日米学生会議のテーマの一部である「伝統への回帰と私たちの挑戦」という理念である。新しい曲を作る際には伝統のある従来のJASC SONG の精神を尊重し、私たちなりに継承しなくてはならない。私は従来の曲の精神を「文化を超えた友情」ととらえ、軽やかなメロディーの中にもしっかりとそのメッセージが伝わるよう、全体の雰囲気と歌詞に気を配った。

第二に、もう1つの重要な我々のテーマは“global framework ”というキーワードであった。第58回の会議中、あらゆるところで我々が強調したのは、現在の日米関係を考えるにはもはや二国だけではなく世界的な視点が必要だ、という点である。ならば、58th JASC SONG を日本語と英語だけで作るのは不十分であろう。その思いから、歌詞はなるべく多くの言語で作ろうと試みた。とりわけ、第58回会議の Trilateral Forum で注目した中国、そして今回会議参加者に3名の留学生を得た韓国は第58日米学生会議にも縁が深いため、中国語、韓国語の歌詞の作成をすすめて、現在までに日米中韓4カ国語の歌詞が完成している。

日本側参加者、アメリカ側参加者が共に一つの音楽に取り組むというのはすばらしい交流のあり方である。完成した歌をともに歌うのもすばらしいし、共に一つの作品を作る過程は強い友情を育む格好の機会となる。この新しい58th JASC SONG は第58回デリゲートが「文化を超えた友情」を育む形で誕生したといえる。多くの仲間とともに曲をつくることができ、光栄である。

(第58回日米学生会議参加者 松田浩道)

Japan-America Student Conference
Conference Song

lyrics : Margueritte Hollingworth
music: Charles M. H. Hall

Shake hands, firm hands, far a - cross the
ワーカ キ ハーラ カーラ テ ヲ ト ラ

sea _____ I'll say kon - nichi - wa to you
ン - ウ ミ コ エ カ タ ク

You say he - llo _____ to me Bow, low,
ヒ - ト ホ - シ ノ シール シーノ

so low Show us how it's done, Let
モート タ カ ラ カ ニ ト

stars and stripes fly side by side, with the
モ ニ ヨ バ ワ - ン セ カ

Flag of the Ris - ing sun.
イ ノ - ア サ ケ

58th JASC Conference Song

Composed by members of 58th JASC

Edited by Hiromichi Matsuda

English Words: Sheehan Scarborough

Soprano

I have o - pend up my heart to let you in I have
tra-veled to your home and called you "friend" If there's one thing I have learned it's that de-
vo-tion must be learnd I ___ want to see you again You have o-pened up my soul in ho-nes
ty You have joined me at my side in lo - ya - lty If there's
a - ny - thing you've done to make my life a grea - ter ___ one you ___ have gi - ven love to
me close ___ your eyes, take ___ my hands, le - t our na tions sing U - ni ___ ted
States, a - nd Ja - pan, l - et our voi - ces ___ ring close your eyes, take my hands, le - t our
na - tions sing U - ni - ted States a - nd Ja - pan l - et our voi - ces ring ___ JASC for
e - - - ver!

第7章

参加者の声

青山泰司

今こうして、JASC 中につけていた日記をパラパラと見返してみる。言葉の断面から感じられる感情の中で、凜とした存在感を放ち、目に留まるものがある。非日常に対する新鮮な驚きと言葉の壁を越えられないことへの悔しさ。ただそれを具に言語化することに抵抗を覚えるのは、ひどく主観的な満足や陶酔をいたく陳腐で凡庸なものに変質させることを少し恐れているからなのかもしれない。

何もかもが未知なるもの。日々ルーティンの中を生きていた僕には、この上なく目新しく、心を躍らせる。

「もうこんなチャンスはない」という想いとまだ知らぬものへの好奇心が僕を掻き立てる。「とりあえず、やってみよう！」

この1ヶ月意識や無意識に関わらず心の内にずっとあった想い。

一方で、相手の想いを完全に理解できないことへの未練。ただこの想いもまた僕を大きく育ててくれる不可欠な栄養源だ。

環境が人を育てると良く人は言うけれど、これほど、刺激的で魅力的な環境の下におかれて生きたのはひさしぶりだ。

正直に言ってこれまでアメリカという国家が好きかといわれればそうではなかった。国際社会の世論に耳を閉ざし、裸足でどかどかと他国の主権の中に入り込むかの行為は、反国際協動的におもえた。ただ、論壇がいかに極言しようと、政治がいかに強談しようと、心の琴線に触れる僕らだけの交流は絶やしたくない。ずっと繋がっていたいと心からそう思えた。自分の上に背負っているものを少し取り払って、ひとりのひととして。

池田早紀

JASCに参加する前の私は....

①小さい頃からアメリカに憧れを抱いていた。スケールのかさ、研究への投資、医師の質の高さ、いろんなテクノロジー発祥の地。い

つか数年アメリカで働き、新しい技術を日本に持って帰りたいと思っている。でもアメリカにはほとんど行ったことがなく、アメリカがどのような国なのか知らなかった。

②医学部の仲間としか話す機会がほとんどなかった。違う価値観や違う夢をもった同年代の学生と話す機会がほとんどなかった。でも将来患者さんはいろんな background を持つ人なのでいろんな分野の学生と話す機会を切望していた。

③小4から中3まで英国に滞在していたのだが、英語力以外でその経験を活かすことが通常の生活ではほとんどなかった。自分の経験を他人に伝えたい、そして英国以外の文化に触れて違う人と視点からみてみたい、そう思っていた。

そのような私が、たまたま JASC のポスターを発見したとき、一目ぼれをする感覚で行きたいと思ったのは必然的なことなのだと思う。そして、刺激的な1ヶ月は、じわじわと私の人生に影響を及ぼしている。

元気 300%

JASC 中、私は仲間と一緒に思うぞんぶんはしゃいだ。まるで高校の頃のころのように。ふざけあい楽しむ機会 JASC にはたくさんあったのだ。日本のアニメのキャラクター大集合の Skit をしたり、Talent Show でアカペラをしたり、ドッジボールをしたり、Crazy Club という変人のあつまったグループを結成してふざけたり...。そう、Crazy Club の President であり、運営委員でもある Rachel とは意気投合してはしゃいだ。普通の通りで歩きながらバレリーナっぽいダンスを一緒にしたり、街中で Crazy Club(CC)のテーマソングを作って振り付けも披露したり、San Francisco の Angel Island 行きのフェリーではタイタニックごっこしたり、道で大声で歌ったらホームレスに声かけられたり...かなりの迷惑行為もした気もするが CC の活動は本当に楽しかった。笑いすぎて腹直筋が鍛えられた。

知識不足による劣等感、そして前進

春合宿や事前合宿、そして本会議中、私は自分の知識のなさを感じるが多かった。いかに自分の視野が狭かったのか思い知らされた。

帰国子女で理系の私は帰国直後、高校で文型科目に力を注ぐ余裕がなかった。英国でも通信教育で日本の社会を勉強し、現地校で社会の勉強もしていたが、政治・経済・世界情勢については年齢的に学習しなかった。私はこれらのことと、大学生活での忙しさを言い訳にして、専門外のことを学習することを怠っていた。しかし、知らなくてはいけない、学びたいという気持ちは常にあった。

JASC では、視野の広い仲間や大学で政治や経済、法を専門とする学生と交流することができ、数あるフォーラムや講演、museum や monument などを訪問して新しいことを学ぶことができた。自分の無知や他の学生の知識や考えの深さを知って、私は劣等感を感じるものがしばしばあった。また、自分の専門からかけ離れていても、知識があり、講演でもたくさん質問ができるアメダリに感心していた。

そんな私が自分のだめさに落ち込んでいたとき、まわりの仲間がアドバイスをしてくれて、前向きに考えられるようになった。これらの新しい経験が、新しいことを学ぶ foot in the door になれたらいいのだと考えられるようになったのだ。それ以降、心が軽くなった。

そして、自分には知識はないけれども、それ以外の部分で貢献することに努め、役割を果たせたと思う。Skit や Talent show はもちろんだが、Trilateral Forum で moderator をし、Conflict Resolution のフォーラムでは Small Discussion を受け持ち、夜の Special Topics では "What kind of Men and Women are popular in US and Japan" という企画を Tierney とした。楽しみながら頑張れた自分や、背中を押してくれたみんなに感謝したい。自信がついたと思う。

大切なパートナー

さてさて、私の buddy, Tierney について述べようと思う。Cornell University で迎えてくれて、大学の寮やホスト先も一緒に、一緒に企画をしたりもした。私は彼女を本当に尊敬する。強く（彼女は karate をする）、しなやかで、知性があり、教養があり、芯がしっかりしている。それなのに、ときには奇声をあげ、馬鹿騒ぎも一緒にしてくれる。本当にバランスのとれた子だ。大学では副専攻の日本語の他に Gender Physiology を勉強しているので、女性の労働環境についての話題には火がついた。"I'll improve the working environment of Japanese female doctors!" と私は彼女に約束した。Every moment spent with her が楽しかった（いつも彼女と一緒にいた、BF の Geoff にはときどきやきもちをやいていた笑）。彼女と深く議論したり、不安なことを相談したことを忘れない。彼女は私にとって大切なパートナーとなった。

SS ファミリー

私の分科会、Science and Society Roundtable は家族だ。EC の Stanton とまちゃがママとパパで7人の子供と一匹の猫で構成されている。JASC の3分の1と一緒に過ごした。摩擦が生じることもあるが、深い議論を通して、本当の家族のようになれたと思う。「生命倫理」の様々なトピックに関するお互いの考えをもっと交換できたらよかった。



これから

JASC が終わってしばらくは燃え尽き症候群や寂しさで、無気力だった。

本会議が終わって2ヶ月近くがたった今では、私は前と同じような単調な日々を過ごしている。夏の経験を活かすかどうかは私次第なのだと感じた。ときどき振り返って、そのとき感じたことを思い出し、日々の生活に活かしていきたい。

そして、これから世界視野で物事を考え、社会での自分の役割を果たせる人になりたい。

JASC でいろんな価値観に触れたこと、本音でぶつかったこと、密の濃い1ヶ月はじわじわと私の人生に影響を及ぼしている。かけがえない仲間ができて本当によかった。

井上雅章

現在私は、800名ほどの留学生を擁する国際寮に日本人学生アシスタントとして住んでいる。そこでは実は、日米学生会議の経験を他人に話す事は警戒を要する。何故かと言うと、全員が全員ではないものの、住人の一部は「アメリカは国際社会において横暴で勝手、国内でも有効な社会保険政策もなく社会は崩壊間近」というイメージを持っており、平たく言えばアメリカの評判が必ずしもよくないからである。アメリカと日本の相互理解を目指すプログラムの実行委員までした、などと言えば、自分がアメリカの意見の代弁者だという風に思われてコミュニケーションに支障を来す可能性もある。

だが、彼らとアメリカについて話すとき、自信を持って言えることがある。「アメリカ人は話せる連中だ」と。二度の日米学生会議を経験した私には言える。

井上裕太

「世界市民的見地における普遍史の理念」についての一考察

これは、僕と二人のアメリカ人との、あるひと夏についての物語だ。正直に言えば、僕と個性溢れる71人についての壮大なクロニクルを書きたいのだけれど、僕たちがいつか地球から飛び出すという決断をするまでスペースというものは常に限られている。いや、そんなときが来たってちっとも変わらないのかもしれない。でも、そういう制限が生み出す緊張はときに人を輝かせる。この物語にも、ピントを絞り込むことで幽かでも光を宿すことができればと思う。

まずは、“あるひと夏”のちょうど1年前から話をはじめなければならない。僕らの物語は、いきなり衝突からはじまる。1年後、どんな夏を過ごすか。そんな簡単なことなのに、考え方も、生きる社会もまったく異なる僕たちは、合意に至れる気配すらなかった。誰かと何かをともに形作るという作業は、いつだって困難だ。カントだって言っている。人間は社会を形作る生き物である。でも、それは信頼から生まれるものではなく、お互いに大嫌いでまるで信用なんて出来ないからだ。だから、危なっかしくて放っておく事なんて出来ないのだ、と。

僕らはぶつかり合い、とことんまで話し合った。怒って席を立ってしまう日本人もいたし、涙を浮かべながら自らの想いを吐露するアメリカ人もいた。そんな色とりどりの絵の具が無造作に盛られたパレットを使って、青写真を描く作業を引き受けたのが、僕とスタントンだった。やっと1人目の登場人物を紹介することが出来る。彼は、ヒップホップとセクシーな女の子をこよなく愛する、愛嬌のある大男だ。会議場を出てアトリエに入ったとき、彼は言った。

「お前は必ず手を挙げると思ったよ。だから俺もやることにした」

お前の思い通りにはさせない。そう顔に書いてあった。牽制し合い、じっくりと皆の想

いを咀嚼しながら、僕たちは絵を描いていった。そして、“あるひと夏”の設計図が出来上がった。アトリエを出るときに、スタントンがにやりとしてつぶやいた言葉。

「裕太。お前、出来る男だな」

それから一年間、それぞれの国へと帰った僕たちは設計図の実現を目指して文字通り走り回った。今から考えると、よくもまあ辿り着けたものだと思う。長く曲がりくねった道の果てに、“あるひと夏”がはじまる。太平洋を渡り、1年ぶりに再会したのがもう一人の主演、シーハンだ。ハーバードに通う、透き通った眼をした敬虔なクリスチャン。“あるひと夏”は、僕たちふたりのものと言っても過言ではない。こんなことを言うと山のような反論が押し寄せるかも知れないけど、僕がそう言うのは自由だ。表現の自由よ、永遠なれ。

“相棒”と僕は、1ヵ月間いつも一緒にいて、本当にいろいろな話をした。彼は寡黙な男だから、大抵は僕がしゃべってそれにシーハンが反応するというスタイルだった。日本の社会について僕が何を考えているのかを話せば、相棒はアメリカについて引き合いに出しながら自分の考えを述べる。時には僕は人生観を語り、それとキリスト教の教えを比較してシーハンが応える。そんな風にして、僕たちは1ヶ月間を過ごした。“あるひと夏”が終わりに近づいたとき、シーハンがゆっくりと噛み締めるように言ってくれた言葉を、僕は忘れない。

「僕は、小さな頃からキリスト教の教えを受けて育った。唯一の正しい道は、イエス・キリストだってね。でも、裕太と話してそれは違うってわかった。世界にはいろんな考え方があっていいし、正しい道はひとつじゃない。」

そろそろ、終わりにしなければならない。最後に、本当のことを言おう。すべてを文章

にするにはあの夏は眩しすぎる。誰だって太陽を見据えるには、目を細めなくちゃならないだろう？ここに書くことが出来たのはあの濃い夏の、ほんの一部分だけだけれど、その溢れんばかりのエネルギーや、眩いばかりの輝きをうまく切り取っていたらと願う。

そういえば、あのドイツ人はこうも言っている。仕方なく社会を形作る人間は、否が応にもいずれ世界中で同じ枠組みを共有することになる、ってね。そうなれば、この星に生きるすべての人びとは分かり合える。なぜか？僕らがそれを証明して見せたからさ。



大原学

日米学生会議を終えて

～もどかしさと、悔しさと～

手を挙げるのが遅かった。日米学生会議は終わってしまった。

全日程の最終日、みなに向かって発言できる最後の機会をオレは逃した。言いたいことはたくさんあったはずだし、言いたいことも決まっていた。なのに、英語でどういこうかを考えたりして手を挙げるのを渋っていたら、残り時間はあとわずかになっていた。勇気を出して手を挙げたが、ジェフから×のサインが出た。遅かった。

最後の RT プレゼンテーションのときは、自分のチームにある質問が来た。「その質問に

答えるために自分はここに来たんだ。」というような質問だったが、自分が口を開こうとした瞬間、自分の前にいるメンバーがそれに答えてしまった。オレは落胆した。結局、言葉でうまく表現できないまま、言いたいことも言えないまま終わってしまった。

思えば、こんなことの連続だった。発言しようと思うときになって、時間切れということが何回もあった。みなと共有したかったことをできなかったという悔しさが残る。何をためらうのか、自分でもよくわからないがためらうことが多かった。

この悔しさをオレは大事にしたい。毎日が挑戦という環境の中、他のみんなががんばっているのを尻目に、ここぞというときにうまく自分の意見を表明できなかった自分がいたことを絶対に忘れたくない。JASCは予想した以上に、ものすごく楽しかった。楽しかったからこそ、思い出は美化されるからこそ、あのときに抱いた悔しさを忘れてはいけないのだ。

人生で一回きりの JASC という経験。そこで出会った素晴らしい仲間、最高の思い出、そして「ためらった」というあの悔しさ、それら全てが宝物。「終わってからが JASC だ」という言葉の意味が、今なら理解できる。

See you guys, again.

小笠原瞳

72人で共同生活をした JASC の1ヶ月間、私が向き合い続けたのは、結局他にもない自分自身だった。旅も国際交流も大好き、楽しくないはずはない、と参加した JASC だったが、現実には高いレベルのレクチャーやディスカッションについていけない自分や集団行動が苦手な自分がいて、2週間目の DC サイトの頃にはストレスが極限に達していた。いくら「人とコミュニケーションするのが好き」とか「世界を平和にしたい」などといっている、余裕のあるときならみんなと仲良くできて当たり前だ。でもそうでないとき、余裕のないとき、自分がつらいときに人に対してどう振舞

えるか？思いやりを忘れずにいられるだろうか？分科会でやっている「移民」の問題と一緒に、対立というのはエゴとエゴがぶつかる本当に余裕のないところで起きるものだ。自分が日頃考える理想がどんなにきれいごとで表面的なものだったか、実際自分が精神的につらい状況になって初めて気付いたのである。JASCは「国際交流」なんていう浅い付き合いではないのだから。

落ち込んでいた間、それでも親切に話を聞いてくれた JASCer たちの存在が本当に心の支えになった。それ以外のときも、様々な場所を訪れる中で持つ違和感、問題意識...それらはいつも曖昧だったり感覚的だったりしていたのだが、毎回何か感じる度に、いろんな友人に話を聞いてもらい、意見を交換することができた。

会議も終わりに近づく頃、私の中では自分のことで精いっぱい人のために働いたり、会議に貢献したりできなかった、と後ろめたさが募っていた。でもそんな私を救ってくれたのも、また友人の言葉だった。「めんどくさいフォームに応募書類書いて、めんどくさい春合宿に来て、めんどくさい事前合宿も参加して今めんどくさい会議にきてるんだから、何も貢献してないことなんてない」と言ってくれた EC、自分もかつて別の会議に参加したが何もできず恥をかいたが今回の会議でその体験を元に同じ課題に取り組み成功を収めたと体験を話してくれた EC、「大事なものは、人がどう見るかじゃない、自分の弱さを自覚して自信を持つことだ」と教えてくれた友達...本当に救われて、涙が出るくらい感動した。

その頃にはあんなにストレスだった「集団」がいつの間にか心地よいものになっていることに気付いた。毎日がとても貴重で理想に溢れた場所にいたんだな、と JASC が終わった今さらにみんなとこの場にいられたことへの感謝の思いが強くなる。帰国してから JASC での楽しそうな写真を眺め、みんなからの JASC Mail を読んで、「確かに私は JASC に参加したんだなあ、確かに楽しかったんだなあ」と改めて感じてなんだか不思議な気持ちにな

ったのを思い出す。

JASC 中に何かを残すとか、やり遂げられたわけではないけど、あの1ヶ月で見たもの、考えたこと、出会った人、そして事前活動で勉強した様々なことはずっと私の中に残っていく。そしてこれからの新しい勉強や経験や出会いとある日有機的に結びつくこともあるだろう。だから今形にならないものも、ありのままにあたため続けよう。そして「社会を、世界をもっとよくしたい」という純粋な JASC の問題意識を忘れたくない。私は来年就職するので EC にもなれないけれど、JASC の社会発信という目的は、一生をかけてやっていくべき課題であり、自分なりに自分のスタイルで取り組めばいい。

今、私の先にも JASC という長い道は続いている。



尾田亜沙美

～JASC からの贈り物・JASC への贈り物～

デスクにはきらきらの笑顔が詰まったアルバム。春から共に過ごした分厚い JASC ノート。スタバの Washington タンブラー。New York T シャツ。Oklahoma ベア。San Francisco 時間のまま時を刻む腕時計。温かい JASC Mail。そしていつの間にかひと夏の夢に思いを馳せている。

不安と緊張をスーツケースに押し込み、京都を旅立つ。久しぶりに再会した 35 人の笑顔。私たちを待っていたのは快晴の夏空。ついにその幕を開けた本会議、まだ実感はわからない。初めての United Airlines、やがて緊張の離陸。高度 3 万 3 千フィートで食べられるとは思ってもみなかったカップラーメン。JFK 空港で迎えてくれた AEC。車窓から流れ去る景色、ここはもう America なんだ!!

真夜中の Cornell 大学、出迎えの Amedele を見て長旅の疲れも飛んでいった。…でも私の Buddy はどこ?? ベッドですやすや。今だから笑える Risa との出会い。始まった JASC 本会議。夢のような Cornell のキャンパス。水のしぶきが気持ちいい、キャンパスの滝。焼きとりパーティーにドッチボール、スキット。時間がここだけ切り取られたかのようにゆっくりと濃厚に流れていく。

徹夜で待った早朝のバスは American time で到着。New York の街角。劇場から出て来た有名人(?)に黄色い歓声があがる。暑さで全く食べられない。渡米前の熱がぶり返して、New York の夜はホステルでひとりぼっち。ベッドにそっと食べ物を置いていってくれた友達。すっかり元気になった翌朝。「ヒーロー」たちの眠る Ground Zero はあまりにも無機質だった。あの時目の前にあったがれきの山はどこにいったのだろう。そしてあの時誘われた涙は…。5 年を経た「あの場所」は何の感情も抱かせてはくれなかった。ただ事実として受け止めようと、呆然と立ち尽くすより他にす術がなかった。太陽をいっぱい反射してそびえ立つ国連本部と翻る万国旗、捻じ曲がった銃。世界平和への取り組みがここで営まれている。国連大使のレクチャー、国連の限界や課題、日本の立場に思考を巡らせる。New York の喧騒を離れ、バスはやがて America を具現化した街へ。

合衆国の首都、数々の歴史の舞台、Washington D.C.。首都の名にふさわしい様相を呈している。Smithsonian 博物館で学んだ America という国。軍事・宇宙は America の力強さを感じさせる。America の、そして世界の歴史を彩る大統領。暗殺の歴史もまた歴史。5 年前 Pentagon に掲げられていた星条旗、ぼろぼろになって博物館にその姿を現す。'FREEDOM IS

NOT FREE.’ 戦争の惨禍は静かに語り継がれる。石に彫られた名前は一人ひとり生身の人間だ。その一人の人間と、それを取り巻く人々の巨大な悲しみは、想像だにできない。かつての日本人はこの国の人々と戦ったのだ。それをたやすく理解することはできなくとも、歴史はそう語っている。戦争の悲しさ、愚かしさ、言葉にならない感情は、世代を経て、なおも受け継がれる。日米学生会議にとって、これらの戦争はその原点ともなっているのだ。Vietnam Veteran 記念碑、紙と鉛筆で名前を写し取る遺族の姿に悲しさを覚えた。私はこの場を訪れ、何を考え何を感じたのか、自分に問いたい。ホステルで気が遠くなるほど大量に作ったお好み焼き。お好み焼きは平和の味がする、本当にその通りだね。日本大使館でのレセプション、たくさんのOBにお会いし改めてJASCの伝統を感じた。ヒーローを生み出すWhite House、華麗な宮殿さながらだった。熱くビジネスを語ってくださったAlumni Nightのゲスト。Life Goalについて語り合ったAlumni。理想の恋人について語り合ったSpecial Topic。JASCの伝統を感じるFounders Day。幾許もの歴史を見守ってきたCapitolとそれを見つめるLincolnの一途な眼差し。Reflecting Poolに映える夕日とWashington Monument。Rooseveltの名言が過去から甦る。Potomac Riverを眺めるJefferson。独立宣言書は静かにそこに佇む。日没の主都は赤く染まり、瞬く間に夜の帳が空を覆う。紛争解決の可能性を探るフォーラム、悲惨な迫害を目の当たりにし、そしてアクションを起こす人々の熱意を感じた。金融機関の可能性について考えるきっかけを与えてくれたWorld Bank訪問。帰国してからやってみたい事が見えた。小さな行動の積み重ねの大切さを学んだNGO訪問。そしてWashington最後の夜は久しぶりの中華料理に舌鼓。

Chicagoを經由して早朝の飛行機は轟音をあげる。乾燥しきった赤茶色の大地、Oklahoma。灼熱の太陽と彼方に広がる地平線。石油掘削機が、のんびりと動いている。のどかな街、これもまたAmericaなのだ。野生のBuffaloにPrairie-dog。Native Americanのフォーラム。迫力の太鼓。Native American Expo、彼らの円陣で彼らのリズムで共に踊った。テロの跡地、一瞬で理由もなく

人生が終わった人々。悲惨な歴史は繰り返されるのか。よく分からなかったけれどジョークが飛び交う州議会訪問。カウボーイ博物館、ガイドはカウボーイだったのか…？夜中のOklahoma大学をランニング、広すぎて息が切れる。突然言い出したHulaダンスと「涙そうそう」、たくさん参加してくれて本当に嬉しかった。みんなのパワーが爆発したTalent Show。アカペラに感動。初めて踊ったよさこい。そして楽しかったhomestay。湖のほとりで真半分の虹と日没を眺めながらのディナー。とても暖かい雰囲気でもてくれたパパとママ、SOONERの心意気を教わった。今までの教会のイメージがすっかり変わった、1st Baptist Church訪問。そしてOklahomaの夜は澄んだ虫の音色に包まれる。

Rocky山脈の広大な自然を眼下に飛行機は霧の町San Franciscoへ迷い込む。寒くて凍えそう。日本領事館でのレセプション。緊張の企業訪問。飲めない大ジョッキの黒いビールを片手にジャズを聴きながらAIDSのSpecial Topic。赤いJASC Tシャツ、Union Squareでのよさこい、心に残った。Angel Islandから一望したSan Franciscoの坂道、息もつけない絶景。Alcatrazの「ザ・ロック」が眼前に浮かぶ。Fisherman’s Wharfでの豪華なディナー、凍えた体が温まる。一日中ホステルにこもってのフォーラム準備。翌日のフォーラムは厳かな雰囲気の中行われた。1ヶ月の私たちの結果、それがついに形となって現れた。会議は終わるんだ、そんな気持ちを抱きつつ。あれだけ気にしていた日焼けも体重も、San Franciscoに来てからすっかり忘れてしまった。毎日食べたマスカット。足繁く通ったベーカリーにクレープ屋さん、スタバにおしゃれなバー。浜辺に座り、霧に佇むGolden Gate Bridgeを眺めながらのBBQ。個性が光るEC Election、熱い気持ちが伝わってくる。2時間かけて往復したGolden Gate Bridge。日本庭園のあるGolden Gate Parkをさまよう。バスでSan Franciscoの街を颯爽と走りぬける。高層ビルから見渡したSan Franciscoの町並み。分からなくても気遣ってくれたRTのメンバー。Benちゃんの”Global Business!!”って声が今でも耳に響く。話についていけない焦り、準備してきたことを生かせない腹立たしさ、それでもみんなが助けてく

れた。Group Reflection、その場にいるだけで温かくて心地良かった。皆が皆のことを考えている、理解しようとしている。JASC Family。そして Closing Ceremony、Yokoさんの歌声、JASCソングが今でも耳に残っている。永遠にここにいたい。永遠にJASCerといたい。そんな願いも空しく、コンチェルトはやがて別れの章をつむぎだす。また会う日まで。

JASCが終わって何か大きな事を成し遂げたような、それでいてぼっかりと穴が開いたかのような寂しさが胸の中を交錯しています。長くなりましたが、最後にもう少し書いてJASCの感想にしようと思います。

私のJASCは一通のメールで始まりました。「私は障害があります。それでも参加する資格はありますか。」そのように聞かずにはいられなかったのです。社会は障がいをもつ私を認めてくれない、という気持ちがありました。今こうしてすばらしい58th JASCのメンバーである事を誇りに思います。JASCerは私を受け入れてくれた、それも想像以上に。

当初から私のJASCでの目標は「日本のことを知る、自分のことを知る」というものでした。約10年前、アメリカの火星探査機マーズパスファインダーは地球を飛び立ちました。火星を知ることは、地球を知ることもある、と。地球の生い立ちを学ぶために人類は火星へと向かったのです。そして私も、アメリカという外の世界へ行くことで内面を見つめようと思ったのです。その目標はある程度達成されたと思います。私は日本人としての私、アイデンティティを自覚した自分を理解するように努めました。自分はどういう人間で、どういうことができ、どういうことができないのか、それを常に考えていました。

JASCは私にとって試練でした。日本語でさえよく聞けないのに、英語で、しかも新しい環境での生活は慣れるのに時間がかかります。話したい、聞きたい、そういう気持ちだけが空回りしてしまったこともありました。それでもJASCerの中になると温かい空気を感じずにはいられません。隠したい、そういう本心とは反対に、私は皆にアピールしたつもりです。お互いを理解するためには私のことも言わなければいけないと思っ

たから。JASCerは私を本当に全ての面においてサポートしてくれました。そして私の話に耳を傾けてくれた。聞こえない私を励まし、ポジティブなアドバイスをくれ、そして涙を見せてくれた友達。こんな経験は全く初めてだったし、その時私はJASCに来て本当に良かったと心から思いました。これが私がJASCで得るだろう最も大きなことなのだと漠然と感じていました。大学に入ってから障がいを持った私は、ずっとずっと、大切な自分を認めてあげる事ができませんでした。聞こえていたら出来たかもしれないという悔やしさや、怖くて逃げている自分、聞こえないことで自信をなくし本来の私でいられない苦しさ、一人で耐える辛さ。でも、JASCで、それも全部含めて自分なんだ、と思えたのです。障害がなければ、もっと何でも出来たかもしれません。けれど障害がなければ、こんなに素敵な自分にはなっていなかったかもしれない、そう思ったのです。

私には聴覚障害がありますが、それは決して悲しいことではない、と今なら思えます。誰にでも克服すべき事があります。私にはそれが障害であっただけ。それが私の可能性を否定するものだとは思えないし、きっと私にはそれ以上にすばらしいところがあるのだから、それをもっと生かしていこうと思うようになったのです。障がいは与えられたものです。けれど、自己実現は決して与えられるものではない。それは私自身が追い求めるものなのです。JASCはそれを教えてくれた。日米の平和や世界の平和について考えたこと、追い求めた崇高な理念は私の糧になりました。しかしそれ以上に私は私自身のあるべき姿を見出し、それに対して自信を与えてもらったような気がするのです。私の勝手な解釈で良ければ、JASCはそのような場、自分自身を見出し成長させる場だと思っています。

そしてもう一つ、JASCの選考の時から考えていたことがあります。それは、私が一体どのような形でJASCに貢献できるのか、ということ。そしてついに私はその答えを見つけられませんでした。とてもネガティブな言い方かもしれませんが、実際私がJASCに貢献できなかったような気がするのです。私はいつも聞こえなくて困っている立場だから、いつも助けられている。今回もそうでし

た。これは今後の私の課題ですが、自分は何にどのような貢献ができる人間なのか考えていきたい。そして、私がこれから JASC に貢献できるとすれば、それはさらに成長することなのでしょう。JASC で得たもの、今までの人生で培ったもの、それらを土台にして、さらに新しい人生を歩いていくこと、これこそが JASC への貢献だと思います。私は JASC から多くを与えてもらった、今度はそれを JASC に与える番だと思います。

スピーチの苦手な私が、最後のセレモニーでどうしてもみんなに言いたかったこと、'All I have to say is thank you, thank you, thank you.....(endless)' これは心から皆に捧げた言葉です。この場を借りて、支えてくれた 58th JASCer 全員にお礼を言いたい。ありがとう。Thank you. 一番迷惑をかけた RT のメンバー、みんなのおかげで楽しめたよ。そして、私たちの会議を一年間かけて準備してくれた実行委員のみんな、その努力に感謝と敬意を。私たちの会議を支えてくださった多くの方々に、心からの感謝の気持ちを。行く先々で出会い、楽しい時間を共に過ごした全ての方に、出会えたことに感謝の気持ちを。運命の出会いを果たした 72 人の絆がこれからもますます固いものとなりますように。そして最後に、これからも日米学生会議の精神が脈々と受け継がれ、悠久の時を越えて日米の、そして世界の平和に貢献できるものとなりますように。Long Live JASC!! I Love You, JASC!! Thank you.



笠井寛子

次のひとにわたす

この夏、私が日米学生会議で得たもの。

- ・ 「私、ぴろの悪い部分もわかった上で、ぴろのことすごい信頼してる」「ぴろがいない 58th JASC は考えられないよ」「これからもずっと付きあっていきたいから」と言ってくれた友達
- ・ 企業の社会的貢献についての理解
- ・ 国際政治に関する知識と問題意識
- ・ 無意識に自分が誤ったアメリカのイメージをもっていたことへの気づき：アメリカってそんなに日本と変わらないし、どの国にもいろんな人がいる
- ・ 尊敬されるリーダーとは：人の話を最後まで目を見て聴ける・失敗したときの対応ができる・言い訳や文句を言わない・今自分にできることを考えられる・人を思い込みや偏見で判断しない・視野が広い・人間味が感じられる・時に何かを犠牲にできる・上手に仕事を割り振れる・上手に人にお願いができる
- ・ 自分の強みや弱み、価値観を知ったこと
- ・ 組織の中での自分の役割：きっと組織って、A が得意で B が苦手な人と、B が得意で A が苦手な人の集合体なのだと思う。だから私に欠点があっても、それを自覚している限り誰かが助けてくれる。チームワークってすばらしい。
- ・ 寝ないと集中力が下がること
- ・ けじめをつけることの大切さ
- ・ どんなにやりたいことが溢れていても、自分のキャパはオーバーさせない
- ・ 行動力：「この人に会って直接お話が聞いてみたい！」なら、電話しろ！
- ・ ディスカッションのすすめ方：”Are you trying to say that...?” “Then, what do you think?” “I personally believe that....”
- ・ 自分の気持ちを正直に言うことの大切さ：そのためには信頼関係が必要

私はこの夏、様々な方の親切に支えられ貴重な機会をいただき、これから取り組むべき多くの課題とパワーを得させていただきました。

私は今から「次の人に渡す」ことに取り組みたいと思います。自分が与えていただいた機会や学びを、次の人に渡す。そうやって私が例えば五人の人に渡して、その五人がまた新たな五人に渡して、どんどん波が広がっていけば、日米学生会議は世界を少しずつ変えていく存在になりうるかもしれません。いま、次の人に渡そう。

唐澤由佳

1年前の夏、1934年世界情勢の悪化を危惧し、相互理解の大切さを体現した学生達によって発足した日米学生会議のバトンを60年という年月を経てこの手に握り、1ヶ月やり遂げた充実感、今後の責任の重さ、来年仲間に再会できる喜びが私の中に渦巻いていたのを覚えている。

「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」

実行委員の活動を通して、いつの日からか暗唱できるようになったこの言葉は、第58回日米学生会議の「二国間を超えた未来～伝統への帰帰と私たちの挑戦～」というテーマの下、「わたしたち学生は社会にどう貢献できるのか」という壮大な問いかけとなり、私たちを（少なくとも私を）動かし続けた。

実行委員としての1年間は、戦後60年が経ち、日本社会も日米関係も周辺諸国との関係も変化する今、私たちは「学生」として、また「第58回日米学生会議」として、世界の平和のために何ができるのだろうか、そして何をしなければならないのかという問いに答えるために日々奮闘した1年であった。そうしてもがいて出した自分達なりの答えが、ソーシャルイノベーションズ、よさこい、焼き鳥・お好み焼プロジェクト、Trilateral Forum, Conflict Resolution Forum、ビジネスフォーラ

ム、分科会FW、Native American forumなどの個々のプログラムであり、ひいては第58回日米学生会議である。

日米のみならず、タイ、中国、韓国、オーストラリア、米国、ベトナム、台湾、フィリピン、イギリスなど様々なバックグラウンドを持つ学生が集い寝食をともにする第58回日米学生会議という比類なき空間、そこに存在する独特の空気・moments。過ぎ去って行く一瞬一瞬をつなぎとめたくて、日記を書こうと試みたが、前半のサイトのコーネルやワシントンDCでは、1年間の成果が試されているような緊張感と日々日米のデリゲートの間で育つ good chemistry を目にする充実感とともに、疲労が押し寄せて気絶するように眠りについた。そして、オクラホマやサンフランシスコでは、日記を書く時間を惜しむほど、一人であるよりは皆とともに会議で起こっている「奇跡」の目撃者になりたかった。ここで「奇跡」と呼ぶのは、恐らく何万分の一という確率で出会った参加者たちの間で生まれていく友情や数々のストーリーである。

会議が無事幕を閉じたいま、72名の叡智が集いこの人たちと一緒に何でもできるのではないかと、勇気と希望を与えてくれた一人ひとりの仲間を始め、日米学生会議の活動で出会えた全ての方に感謝したい。また、実行委員の活動期間中に、就職活動という人生の大きな決断のときを迎えたこともあり、多くのアルムナイの皆さんに出会い、それぞれの人生における日米学生会議について様々のお話を伺うことができたことは私の大きな財産である。

あのアツイ夏が終わり、日米学生会議で得たものは余りにも大きすぎて、365日 JASCIing の日々からどうもとに戻ればいいのかと途方に暮れたときがある。また、「JASCの終わりは、始まりである」ことを痛感し、半年後に一社会人となるわたしは、どうやって今の想いを持ち続け歩いていけばいいのか、ふと心細くなる時がある。

最後に、そんな折、私の心の中に浮かび、奮い立たせてくれる言葉を紹介したい。

"We ourselves feel that what we are doing is just a drop in the ocean. But the ocean would be less because of that missing drop." -- Mother Teresa

素晴らしい 16 名のチームメイトと目標に向かって走り続けた 1 年を終えたいま、「私」として再び歩み始めるが今の気持ちを忘れずに今後も「大河の一滴」のためにもがき続けてゆきたい。



川口耕一朗

「アメリカ人の愛国心にもう一度触れたい。」

それが私の日米学生会議への応募動機だった。アメリカの首都ワシントンD.C.で高校3年間を過ごした私は、自国に誇りを持ち、自国の価値観を「正義」と捉えるアメリカ人特有の意識を常に感じてきた。アメリカが関与した戦争の正当性を常に強調するような記述が目立った高校でのアメリカ史の授業、同時多発テロ後の愛国心の高揚、イラク戦争について同級生との議論、どれもがアメリカ人の世界観を理解する上で有意義だった。中でも広島原爆投下に関する教科書の記述には強烈な印象を植え付けられた。そこには原爆投下により、戦争終結が早まり、世界中の何千万の人々を救ったと書かれている一方で、原爆による被害者は“thousands”とされるにとどまっていた。確かに、英語には万という単位は存在せず、20 万人以上の被害者数

を“thousands”と記述することも可能である。しかし、これでは原爆による被害は正確に伝わらず、原爆投下は正当な目的の下で行われたとの印象を与えてしまうのではないかと危惧した

これ以外にも、ベトナム戦争を例外とし、独立戦争から湾岸戦争までアメリカが関与してきたすべての戦争において、アメリカの正当性が強調されていた。圧制的な勢力に対抗すべくアメリカが立ちあがってきたという記述は、「テロとの戦い」を掲げ、国際問題の解決手段として武力行使を正当化させる現在のブッシュ政権と通じるものがあると思う。

しかし、高校の時は十分な知識もなく、日本人としてこの問題をどう捉えるかという意識に欠けていたため、帰国後もずっと心に問題意識を抱えたまま、答えを求め続けていた。そこで、1 ヶ月アメリカに滞在し、彼らの世界観、特にアメリカ人の聖戦意識を支える愛国心にもう一度触れ、日本人としての立場からの意見交換を通じて、今後の日米関係、世界のあり方について考えてみようと思ひ、参加するに至った。

日米学生会議の特徴は、なによりも日米両国の学生が文化や背景の違いを認め合った上で、自らの価値観をぶつけ合って議論することができることである。それを通して、相互理解が可能となる。

第 58 回会議では、ニューヨークでグラウンド・ゼロ、ワシントンD.C.で第二次世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争のメモリアル、そしてオクラホマでは連邦庁舎爆破事件跡地を訪れる機会があり、そこでのアメリカ人学生との議論を通じて、改めて彼らの愛国心に触れることができた。特に、グラウンド・ゼロで感じたことを終夜、皆で話し合ったことが一番の思い出である。同時多発テロにより、ブッシュ政権が推し進めていた「テロとの戦い」が正当化され、その過程でグラウンド・ゼロが愛国心を鼓舞するために政府によって恣意的に利用されたかどうか議論のテーマだった。そこで感じたのは、彼らはたとえブッシュ政権の政策には批判的であっても、国とし

てのアメリカには強い愛着があり、それが「人種のサラダボウル」と呼ばれる多民族国家アメリカを統合する一つの大きな原動力になっていることであった。興味深かったのは、彼らの本音を知るために、意図的に批判の矛先を、政府から「アメリカ」「アメリカ人」に変えたとたんに、彼らの顔色が急変し、一瞬にして私が四面楚歌の状態である羽目になったことだった。アメリカ人の学生の反応は当然予想していたことだったが、その急変ぶりには正直驚かされた。

しかし、日米学生会議は単なる意見交換、相互理解の場ではない。1ヶ月の間寝食を共にし、時には恋愛について話したり、我を忘れてはめを外して遊んだり、また時には困難に直面し、それを共に乗り越えることで、お互い強い絆が生まれる。そして、彼らと自分の相対化により今まで気がつかなかった自らの隠れた一面を見出すことができ、達成感を得られると同時に自己の再発見、啓発の場であると言える。

最後に第58回日米学生会議参加者、特に日本・アメリカ側実行委員16人に感謝の意を表したい。この1ヶ月は私の人生の中で最高のものだった。そのような機会を提供してくれた、実行委員には本当に感謝している。5月の春合宿以来、日本側実行委員の会議に対する情熱とその真摯な姿勢から多くを学び、日本側・アメリカ側両実行委員長の強力なリーダーシップとカリスマ性には幾度も感銘を受けた。そういった思いを礎に、本会議の企画、運営の仕事に携わるべく、この度第59回実行委員長に就任することになった。過去58回の参加者が築いてきた伝統を継承し、更なる信頼関係を実行委員の間で作らねながら、第59回を史上最高の会議にしていきたいと考えている。

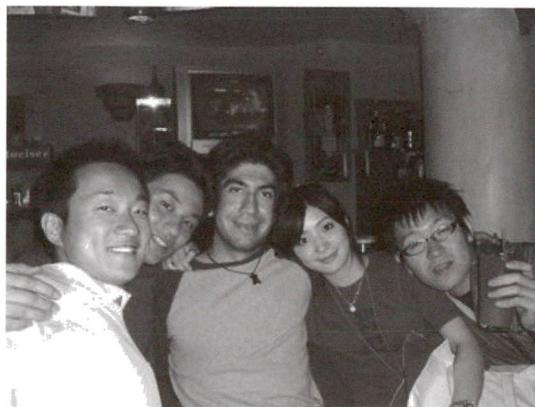
菅家万里江

夕暮れ、夏の気倦さの中に秋の涼しさを感じる時、私はいつも、ノスタルジックな切なさと共に58th JASCのことを思い出す。Alumni

である母親の影響を受けて参加した58th JASCは、母親の話と私の想像を遥かに超越した素晴らしい会議だった。一生忘れられない夏になったと、心から思う。

確かに、全てが「楽しかった」わけではない。言語の壁にぶつかり、自分の知識と経験のなさ、自分の小ささを痛感し、自己嫌悪と孤独に悩んだ日々もあった。全く違う価値観に出会って戸惑ったこともあった。アメリカの文化や社会に対し、違和感を覚えたこともあった。でも、自分の感じたことを、周りにいる参加者と共有することで、その感情は少しずつ消化されて、新たな感情を生み出した。まるで濾過のように、私の中に湧き上がった感情が、参加者達の多彩な価値観を経て、一滴、一滴、透明な雫となって私の中に滴り落ち、泉を作っていく感覚を覚えた。深い充足感と啓蒙される幸福感につつまれたあの感覚は、本当に忘れられない。JASCに参加していなかったら、こんなにも自分と社会と世界について考えることはなかっただろうし、考えられもしなかったと思う。改めて、JASCの全てに感謝したい。

JASCは私に大きな試練と喜びを与え、私に揺さぶりをかけ、突き動かし、海のような包容力で私を受け止めてくれた。こんなにも自分が変わったと思える夏は今までにない。



国松永喜

胸一杯の希望を抱えて始めた大学生活。
何か煮え切らない自分。
世間に溢れる矛盾。
何もできない、いや何もせずに言い訳ばかり
上手くなっていく自分。
広い世界へのパスポート。
閉じこもっていく自分。

私と JASC との出逢いは 2 年前に遡る。
57th JASC 「共に創る明日」～戦後 60 年を振り
返る～
整理できない感情の群れ。
泣けない自分。

58th JASC 「二国間を超えた未来」～伝統へ
の回帰と私達の挑戦～
虚勢と現実の自分とのギャップ。
深く深く落ちていく・・・

でも、いつもあいつらがいた。
“自分”という不自由からの自由。
“世界”の相対的位置変化。
「修身齐家治国平天下」

太平洋を超えて、二国間を超えて

いつもあいつらがいた。

涙がとまらない。

小迫由依

全身を使って歌う聖歌。体を左右に振り、
手を叩き、何度も同じフレーズを歌う。私は
無宗教だが、オクラホマのこの教会で宗教の
パワーを肌にした。今回訪問した St. John
Missionary Baptist Church は、三角の塔の教会
のイメージとは全く違い、まるで学校のよう
だった。牧師さんの後ろにはゴスペル隊がひ
かえる。Washington D.C.で行ったフォーマル

な教会と比べると、とてもノリのいい感じだ。
一方、牧師さんはものすごく力強く聴衆に呼
びかけ続ける。教会に集まる人たちも、みん
な同じフレーズで答える。こんなに信仰深い
人たちに会ったのは初めてだった。“Stand Up
for Jesus”この日の朝の賛美歌である。このフ
レーズを何度も繰り返していると、私は何だ
か怖い気持ちになった。私が思い出したのは、
N.Y.のグランド・ゼロにあった、建築材で組
み立てられた大きな茶色の十字架だった。イ
スラム教と対峙しているように感じられた。
アメリカのヒーローとされた 9.11 の犠牲者。
キリスト教が正義？キリストのために戦う
の？正しい戦争なんてあるの？もし宗教が戦
争の原因になってしまうのなら、どうして私
の目の前にいる人たちは、こんなにも熱心に
信じているの？私の頭の中で、らせん階段を
駆け下りるように質問が次々と生まれた。

オクラホマのホームステイ先で、私はホス
トマザーに尋ねた。彼女は、宗教戦争は宗教
の悪用なのだと説明してくれた。なぜ教会に
毎週通うのか、と聞くと、この習慣が彼女を
支えているようだった。何かつらいことがあ
った時に聖書を開くと、そこに必ず答えがあ
るのだそうだ。アメリカ人のメンバーでクリ
スチャンの人も、神は自分が一番必要な時に
支えてくれる、と言っていた。Oklahoma City
Bombing Memorial で生存者から体験談を聞いた
時も、彼女は死を予感した時、神とのつな
がりを感じた、と語っていた。フィールドト
リップの際、ネイティブ・アメリカンのバス
ガイドさんと話していて驚いたのは、ネイテ
ィブ・アメリカンにクリスチャンが多いこと
だった。私は、キリスト教は彼らにとって敵
の宗教だと思っていたからだ。しかしそのキ
リスト教は、ネイティブ・アメリカンが独自
に伝統的な信仰と融合させて形を変えたもの
なのだそうだ。こうやって宗教は、それぞれの
形で、それぞれの人の一部になっている。
こうやって多くの人を支えている。

私の所属する「科学技術と社会」の分科会
では、バイオエシックスについて議論した。宗
教の違いが、人間の根本である生命の始まり

の違いにつながる。事前活動でうかがったNHKのディレクターの方が、こんな話をしてくれた。「人間の心はどこにあると思うか?」という質問を30代40代の若い科学者に聞くと、例えば脳神経だとか自分の研究している専門分野を答える。一方ノーベル賞を受賞した70代の科学者は、「わからない」と答えながら、人間が横になっている絵の上に何かがあって、それと人間の身体が結びついている絵を見せたそうだ。この話を聞いて、どこか宗教的なものを感じた。

今回のJASCで、宗教について様々な視点から考え、経験することができた。行く先々で宗教が関連し、日本とは全く違う状況に驚いた。しかし、まだ宗教については良くわからない。それでも、宗教が多くの人にとって大切な役割を占めていることに、何か大きなことがある気がする。私の「今」を支えてくれるもの—それはどの宗教というわけではないけれど、今までの経験であり、出会った人たちであり、その人たちとのつながりであり、そしていつも応援してくれる家族である。このJASCが、私の「今」と「これから」を大きく支えてくれるだろう。



佐藤友紀

得た事が山よりたくさんあるこの1ヶ月間を文字にするのは、私には、なかなか至難の業の様にも思える。文字にしてしまうと、思い出が整理され夏が完結してしまって少し寂

しくなるのが分かっているの、ちょっと切ない気持ちになる事もある。実際、この夏が完結するなんて事は一生かけてもないのだろうけれど、気持ちを整理するのが苦手なのは、JASC後も以前と変化は無いようだ。

71人と一緒に過ごした1ヶ月弱は、集団生活と言うよりも、家族で生活をしているようでとても心地が良かった。大学、地域、地元に住る家族、友達と沢山のコミュニティーに属している私だが、「居心地のいい場所」はそう簡単に見つけられるものではない。その中でもJASCerと一緒に時間を過ごした時間は、沢山の刺激と、沢山の安心、そして沢山の愛情を与えてくれた。時間が過ぎ、話を深めていくにつれて無意識的に、相手を理解し、受け入れ、認める作業が私の中で行われていたようである。完全に理解し合うよりも、理解する体勢をお互いに用意しながら、仲良くなっていくことは、とても心地のいいものであった。

在り来りだが、一番印象に残っているワンシーンについて書いてみようと思う。オクラホマというアメリカ人でもなかなか訪れる機会の無い、大変興味深い土地に足を踏み入れることが出来た私たちは、内陸特有のネイティブアメリカンの歴史を、目で、耳で、肌で感じ、沢山のネイティブアメリカンの人たちと直接お話をし、学ぶ機会を得た。歴史専攻の私が、この1ヶ月で最も、「うずうずしていた」瞬間かもしれない。この「うずうず」は、かなりポジティブな「うずうず」だった。歴史の継承が困難であること、政府との関係が広い視野で考えてもなかなか友好的でないこと、プライド、葛藤、現実。今でもあの時のAnquoeさんの、ちょっと切なそうだけど、現実を受け入れないといけないのかな、と思っている節を感じさせる表情が脳裏に焼きついている。その後、歴史や伝統の継承について、数人のJASCerと話をしていた時の事だ。歴史や伝統を重んじる姿勢に対して私はいつも積極的な意見を持っていたが、そうでない意見に出会った。先人たちも、伝統を時代に合わせて変化させながら、より生活しやすい

環境を創造して来たにも関わらず、ここにきてなぜ継承に拘っているのか。途絶えてしまうその文化・習慣も、途絶えるということが歴史の一部ではないのだろうか、という趣旨の意見だったように思う。少なくとも私の理解ではそうだった。衝撃というか、悲しかったというか、なんとも言われぬ気持ちを抱いた。歴史の継承が難しく、多くの「デントウ」が途絶えているのは、全世界で見られる現象である。もちろん、それも歴史の1ページであり、次に生まれてくる新しい「もの」がまた新たな歴史の側面を創造していくのだろう。しかし、私たちを生み出した先人への感謝と尊敬の意を込めて、先人が築き上げてきた土台を保ち、維持していくのは現代を生きる私たちにとって、とても大きな意味を持つのではないだろうか。こんな抽象的な言葉でしか気持ちを表現出来ないが、新しい1ページを創造していく事が出来るもの、先人のおかげなのだ。時間が流れ、様々な世界で次々とイノベーションが行われる現代でも自分ひとりでは何も出来ないし、過去があつての現在ではないだろうか。対極の意見に出会って、自分の意見を再確認することが出来たとてもいい機会であった。そんな経験が出来るのもJASCならではの、とても興味深く、心に残った瞬間であった。

アメデリには非常に申し訳ないが、関東にかなり集中しているジャパデリは夏以降も頻繁に交流し、非常に活発に戯れている。刺激し合え、支えてくれる存在が近くにいると言う事が、どれほど私にとって心強く支えてもらっているだろうか。関東以外に住んでいるはずのデリも、かなり自然に出現したりするので、距離の感覚が麻痺してしまいそうだ。得たものは山よりも多く、これからもっと増え続けて行くだろう。

2006年の夏の終わりを悲しむよりも、これからのJASCを考えて、積極的に、ずっと「うずうず」して行こうと思う。

真田雄太

4月に第58回日米学生会議の参加許可が届いた時に最初に思ったことは信じられないということ、そして次に喜びがこみ上げてきた。けれども一方で大きな不安もあった。それはうまく参加者の人たちとコミュニケーションができるかということであった。使用言語は英語であるということは英語圏内の国に留学などしたことのない私にとっては大きな壁であった。しかし結局私の不安は杞憂であった。私が自分の思っていた以上に英語を運用できたというわけではない。通訳してくれたジャパデリに私のつたない英語を理解しようと努力してくれたアメデリのおかげで、私は彼らとコミュニケーションがとることできた。

日米学生会議の間にいろいろなことを「知り」、そして何より大切に大きな収穫であるたくさん「すごいやつ」に出会うことができた。自分に足りないものを沢山見つけて、そしてきっと永遠の財産といえる友に何人も出会うことができた。一緒に1ヶ月を過ごしたみんなに感謝の気持ちでいっぱいだ。本当に楽しい時間だった。第58回日米学生会議の本会議は終わった。けれど、委員長が最後に言った「JASCerはずっとJASCerだ」という言葉がすごく胸に残っている。この会議で得たもの、自覚したものを今後の私の人生に生かそうと思う。



島村明子

自分はとてつもない愚か者なのである。

一年間の JASC を通じて学んだことはたくさんあるが、自分の未熟さをより理解することができたというのが一番重要で大きな発見であろう。

10 人を変えることができなければ、
100 人を変えることができない。
100 人、1000 人を変えることができなければ、
社会は変わらない。

という格言を私は信じきっていた。1934 年、日米学生会議の創設者たちも、まずは自分たちのできる範囲で日米の学生の相互理解を深めることで、学生、そして社会を変えていこうという理念でアメリカに渡ったのであろう。誤解を恐れずに言えば、日米学生会議も人を成長させる一つの人材教育機関として、その企画・運営に関わることができることに喜びと使命感を感じていた。自分は何と傲慢だったことか。一つ重要なことを見逃していた。上記格言は一部真なのだが、補足ないし訂正が必要である：

自分を変えることができなければ、
他人も社会も変えられない。
自分を知ることができなければ、
自分も変えられない。

そして、日米学生会議は自分をより良く理解し、変える大きなきっかけとなった。

日米学生会議が創設された 1934 年から 2006 年まで、世界平和は一度も訪れたことがない。軍事技術の進化などで戦争・紛争・テロなどで死ぬ人数は 20 世紀前半と比べると格段に増えている。

けれども、同時に私たちは着実に一步を踏み出している。61 年前まで殺し合いをしていた国の若者たちが、1 ヶ月を寝食を共にして

いる。寝食を共にするだけでなく、一緒に歌ったり、ドッジボールをしたり、飲んだりしている。米軍再編とイラク戦争について議論し、一緒にグラウンドゼロを見て、一緒に泣いたり笑ったりしている。議論に議論を重ねて、一緒に会議を企画運営している。1 ヶ月間自分と他者を見つめることで、成長していく。希望の灯火が次の代へと受け継がれ、日米学生会議を経験した人たちが、社会に羽ばたいて行く。

このような未来に向かう歴史の積み重ねを絶やさないことが、一番大事なのではないか。財務活動などを通じて、安定している日米間で会議を開催することの意義を疑問視する声も聞いたが、安定していると言われる時だからこそ、気を抜かないで日米間の結束ないし協力関係を促進する意義があるのだと思う。そして、そのためにはまず自国のこと、そして自分のことを知り、自分から変えて行くことが重要だと思う。

最後に、最も印象に残っているエピソードを紹介させて頂きたい。

2006 年 8 月 1 日の朝、私は、ほとんど不眠の状態で荷物片手に、仲間と一緒にコーネル大学の寮の前に立っていた。午前 5 時であった。道路の向こう側から、登場するはずのバスを待ちわびて、首を長くして待っていた。異変に気づいたのは、午前 6 時である。来るはずのバスが来ない。午前 8 時、太陽の光も強くなってきたので、とりあえず脱水器や病人が出ないように飲料水と食べ物を買出しに行く。午前 8 時、バス会社と連絡がとれるがバスの運転手は「あと 30 分後に着く」と曖昧にごまかし続ける。午前 9 時、とりあえずお昼を確保するために、ネットで NY 周辺のケータリングを検索する。結局バスが到着したのは予定よりも 5 時間遅い午前 10 時であった。

けれども、5 時間待たされても、ニューヨークシティでの企業訪問がダメになっても、参加者は不満や文句を全く言わない。逆に「楽

しく歌を歌い、よさこいを練習できたから気にしないで」「今まであんまり話すことができなかった人と喋れた」と実行委員を励ましてさえられる。実行委員をやっている良かったと思えた瞬間である。同時に、何事も楽しむことが大事であると参加者に教えてもらった瞬間でもある。

参加者の皆、最高の夏をありがとう。実行委員の皆、こんな私でも一緒に活動してくれてありがとう。そして、協賛者、主催者財団法人国際教育振興会の方、支援してくださったOBの方々、ありがとうございました。

自分は愚かである。だからこそ、学ぶことがたくさんあって楽しいし、謙虚に色々なことを吸収していきたいと思う。

杉山亮太

日米学生会議で過ごした1ヶ月は人生の中で最も充実した1ヶ月であったと思う。色々な人と出会い、色々な人と話し、色々な人と分かり合った。JASCが終わって1ヶ月が経ち、結局なんだったのかと聞かれると答えられない。ただ確実にいえるのは、いい面も悪い面もあったけど、それらすべてひっくるめてトータルで本当に本当に楽しかったということだけである。

初めてアメデリに会った時の事、一緒にドッジボールやサッカーをした事、BARにくり出して杯を交わした事、カラオケで踊り歌った事、レセプションから抜け出して散歩した事、誰が可愛いかで盛り上がった事、インディアンとダンスした事、夜の散歩でカップルと遭遇してしまった事、Homestay先でのハブニング、Angel Islandの頂上で見た景色、極寒のBeachでの異常な盛り上がり、closing ceremonyでの涙、出発を惜しんでした数え切れない hug、そして飛行機で読んだ沢山の手紙…

Priceless

どの場面をとってもそれは自分にとってのJASCのかけがえのないOne piece。そしてそのピースはこの72人の最高のJASCerによってしか作ることが出来なかった世界にひとつだけのmaster piece。お互いのことをまったく知らなかった72人がこうして一ヶ月を通してかけがえのない友情を育むことが出来たという奇跡はJASC LOVEの本物の姿なのだと思う。

これからも日米学生会議が友情の輪を一生つなげていきますように。



須藤淳

私の過ごした21歳の夏は人生で最も刺激的で、濃密で、最も物事を考え、感じた季節であった。3ヶ月前までは全く未知の71人の人間が、2006年の夏を経て友になり、親友にもなり、自分を支えてくれる大切な存在にもなった。

日米学生会議とは自分にとってなんだったのか？この質問の意味はとても大きいもので、現在でもはっきりとした答えを見出せない自分がある。これからの大学生活や社会人生活を送る際に少しずつその答えが見えてくるのだと思う。ただ、一つ言える事は、JASCの存在がなかったら今の自分は存在し得ないし、そこで得た友人たちも当然のことながら存在

しない。

不思議なもので、72人で訪れたアメリカの各サイトは個人で訪れるのと較べて72倍の意味を持っていた。自分は常に日本の学生として意見を求められ、日本の学生として質問をする。JASCに存在する前に持っていたアメリカ像が少しずつ崩れ、少しずつ形成されていった。以前に持っていたアメリカ人像も半分ほど崩れ、新しい半分が加わった。

JASCの報告書を初めて読んだ8ヶ月前は「そろいもそろって照れるような文章を書きますねえ」と考えていた私だが、今現在は彼らが報告書を書いていたときと同じ心境であると確信している。同じ場所、同じ時間を共有し、異なる意見を交換、ぶつけあって新しい自分の考え方を作りあげる。同じ朝食（文字通り毎日同じ時も…）を食べ、同じ公園を散歩しながら、異なる価値観に巡り合い、新しい人間関係を築いていく。このプロセスを一ヶ月間続けることがJASCなのだと思ふ。

72人のJASCERには72人のJASCと未来がある

今後も自分を含む72人は58回のJASCERとして生きていく

一人ひとりにとってJASCの意味は異なるけれど、共有した時間を再共有していくJASC FOREVERというのは本当のことなのだろうと感じる。

JASCに応募を考えている人が、この文章を読んでいるとしたら、私は間違いなくこの素晴らしい会議を作り上げることを勧める。

高井竜輔

いつの間にか夢を見なくなっていた。正確に言うなら夢を失っていた。腐臭と偽善に塗れた2年間の汚辱の日々に僕は将来に思いを馳せる力さえ無くしていたのかもしれない。

人はいつ死ぬのだろう。心臓を弾丸で打ち抜かれた時？致死量の毒物を仰いだ時？はたまた挑戦する心を忘れ、未開の荒野を開拓する精神を失った時？違う。夢を無くしたとき、

人は死ぬのだ。思えば君に出会うまでの僕は、夢を失い、心が徐々に、その働きを弱めていくのを自覚しながら、ゆっくり死んでいくだけの存在だったのかもしれない。

「実学を超えた、人間存在の深淵に迫りたい。心の奥底で人間を突き動かすシステムに触れたい」希望に満ちた心でミネルヴァの門をくぐった僕の心を現実という名の処刑器械は瞬間に打ち砕いた。教授、級友、駒猫、学食のおばちゃん・・・駒場的価値観の一切が僕を落胆させ、これ以上なく失望させた。そうして僕は、金輪際「大学なるもの」への接近はするまいと心に誓い、ひとり渋谷駅前、TSUTAYAの2階のスターバックスで世界文学全集に向き合う日々を送った。18歳だった。

君と出会った切っ掛けは何だっただろう？君と初めて交わした言葉は？あの夜、君は、何を見、何を考えていた？語りたい。伝えたい。言葉は溢れ、記憶は足場を失う。行き場を失くした思いは走馬灯のように頭を駆け巡る。キーを打つ手は止まり、僕は天を仰ぐ。

こんなの、初めてだ。

本会議中の君について、ここに詳しく書くつもりは無い（千言万語を費やしても表せない、というのも事実だけれど）。コーネル、ワシントンD.C., オクラホマそしてサンフランシスコ。直前合宿を含めこの夏の君は、どんな鳥も飛べないほど高く僕の心を高揚させ、世界中のありとあらゆる光を集めても到底かなわないくらいまぶしく輝いていた。君から教えられたことは数え切れない。ただ反対に、僕から君に与えられたものが少しでもあったらどうかと考えると、少し、胸が痛む。

新学期を向かえた文学部の教室で授業を受けながら、友人と談笑しながら、あるいはひとり夜空を見上げ家路に着きながら、折に触れて思う。この夏君に会えてよかった。もし君に会えなかったら、あるいは僕は夢を見ることも無く、心を閉ざし、身体は冷え切ったまま、ゆっくりと生の機能を停止させていただけだっただろう（かつて自分が、そうであったように）。君に出会って久しぶりに、自分の心臓が鼓動する音を聞いた気がする。

今僕は再び夢を見ている。2つの夢だ。1つは来年の第59回JASCを絶対に成功させること。これは第58回に参加した皆との約束でもある。そしてもう一つは外交官になること。サンフランシスコの日本大使公邸で会った齋木昭隆駐米公使から受けた鮮烈な印象は、僕に生涯を傾けるべき仕事の存在を教えてくれた。

こうしてまた夢を見られるのも、君のおかげだ。君は今までそうして来たように、これからもずっと、若い人の夢を育む場所であってほしいと思う。

最後に。

繰り返しになるが、言おう。

この夏、君に、会えて、本当に、よかった。

君の名はJASC。1年後実行委員として成長し、再び君に会えるのを心から楽しみにしている。

高橋裕美

JASCHOLIC---

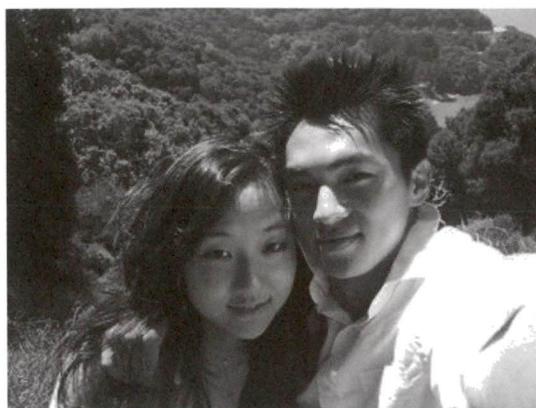
adj. addicted to JASC/JASCers, caused by participating in JASC

noun. a person who loves JASC/JASCers too much and cannot easily stop thinking about it/them, so that it has become an illness

FYI This syndrome can be seen in most of (or maybe all of) JASCers. It is highly contagious among JASCers. Symptoms include insomnia during the conference, a fondness for discussion, and addiction to forums, your roundtable and your fellows. Patients with this syndrome often have subjective symptoms after JASC. The disease often changes patient's life. No treatment for this sickness has been found yet.

So.... JASCers!!! I need your help. Please take full responsibility for my disease caused

by you all. You can do this by sharing your opinions, stimulating my thought, and making me laugh and smile ☺ as you always did for a month!! Basically, you need to keep in touch with me throughout my life!!



長崎智裕

1か月に及んだ会議の最終サイトであるサンフランシスコを離れ、日本へと帰国する日を迎えた朝。それまでに身体に溜め込んだ睡眠不足と疲労からか意識がもうろうとしていた僕は、まったく「準備」が出来ていなかった。アメリカ側参加者と別れる準備、日本に戻るまでにこれまでの1か月の体験を整理し、ふり返る準備、そして第58回日米学生会議を終える準備。それでも、ぼんやりとしたままスーツケースを運び終え、JASCerひとりひとりに“とりあえず”のさよならの言葉をかけ始めた途端に流れ出して止まらなくなった涙は、この夏の体験がいかに自分にとって大切な意味を持つものになったのかを再確認させるものとなった。

日本とヨーロッパで生まれ育った自分がなぜ今、「アメリカ」なのか。単純に好奇心から「行きたい」という答えの他に、アメリカという良くも悪くも現在世界で最も注目を集めている国を実際に自分自身で確かめたいという理由があった。メディアや音楽、食べ物など自分の周りに氾濫する様々なアメリカ的なもの

を通じて間接的に触れてきたこの国を、もっと直接知り、理解したいという思い。このように感じていた僕の欲求は、会議でさまざまな場所を訪れ、参加者との交流を通じることでますます強まっていったように思う。

夏の1か月の間、71人の仲間と生活を共にし、四六時中誰かと一緒に食べ、飲み、語り、笑っていた。それは、同じ時間と空間を共有し、互いの感情と考えを通わせ、理解し合うというもの。JASCは僕にとって、今までに経験したことのないような特別な体験だった。「対話」を通じて互いを理解し合うという言葉はよく使われるけれど、第58回日米学生会議には自分にとって、それを超える何かがあった。単純に、言葉を通しての交流だけではなく、身体全体で感じ取ったJASCの日々は自分にとってかけがえのないものとなった。

日本とアメリカ。2つの国で学ぶ学生たちが、期限付きで集まり、融合するのがJASC。1ヶ月に及ぶ会議を経た今、家族のように親しくなった参加者たちが自分の周りにいないことに寂しさを感じると共に、ひとりひとりの存在がこれからの自分の活動の支えとなっていくことを感じている。会議終了直後にカリフォルニアでの留学生活が始まった僕にとって、日本とアメリカ、または世界のどこかで活躍している仲間がいるということは新しい生活を歩み始めている自分への励みとなるし、誇りに思える。これは、これから先も変わらずに思い続けることになるだろう。JASCer 72人の2006年の夏は終わったけれど、会議中に築いた関係を温め、更に深めていくこれからの本当のJASCの始まりなのかもしれない。

永田隆介

JASCの感想を文章化しようとする、どうもためらいが生じてしまう。何か安っぽくなってしまふからである。毎日を一生懸命過ごし、毎日様々な感情が掻き立てられる。そのような濃密な夏を簡単には表現しきれないこ

とと、それを消化しきれないことが原因にあるようだ。そこで、今回はまとまりを気にせず、ただ思うままに書き綴ろうと思う。

JASCに参加して一番の経験は個性ある素晴らしい仲間との出会いであり、それを通じて「人間の魅力」について知ることができた。彼らは固有の魅力に溢れていて、そのような仲間と約四週間を駆け抜けたことで、人を引きつけ、心を動かす魅力の素晴らしさを実感できた。そして、自分はこれが好きだ、これなら誰にも負けないという軸こそが人間の魅力を引き出すということも学んだ。それは、理系の大学院生でありながら、自分の研究に身が入らない自分にとって耳が痛いことであった。しかし、今の自分の中に研究を頑張ろうという気持ちがあらたに芽生えている。自分と異なる文系の世界を覗こうとしてJASCに参加したが、結果的に自分を見つめなおし、研究へのモチベーションへと繋がったのである。これから就職をどのようにするかは決めていないが、自分の軸を持った上で選んでいきたいと心から思う。

その他にもJASCにおいて多くの貴重な経験をした。異文化交流、勉強会、フィールドトリップ、ディスカッションなど挙げればきりが無い。それらの経験の持つ意味、可能性は計り知れないものである。しかし本会議を終えた今、その可能性を活かしきれたのかという自問に不安を覚えることがある。もっとああすれば良かったという後悔がついてまわるのである。そこで取り上げたいことは「我々はスタートラインに立つ学生である」ということである。今、真っ白な学生という立場で、JASCから多くの課題をもらった。それは知識やコミュニケーション能力であったり、生き方であったりする。これにより物事で最も重要な方向性、目標を定められたといえる。後は自分の軸を支えに、ひたすらに前に進むだけである。幸い、魅力に溢れた仲間という最高の羅針盤が自分には備わっている。何も恐れずに仲間と進める未来が楽しみである。

生板沙織

毎日の忙しい生活の中で、ふとラップトップの作業を中断し、別のファイルを開けて夏の写真を眺めてみる。同じような写真を含む数百枚の写真を何度見ても、飽きない。画面を覗き込んでみると、またあの場所に戻れるような気がしてくる。もしかしたら、その数分間は戻っているのかもしれない。

「私は、アメリカを心の底から愛している。」

いつも写真を見終わると同時にその想いがこみ上げてくるのだ。

運営に携わった1年間は実に早く過ぎ去ったが、あの短い時間に収まっていることが不思議であるほどの思い出が詰まっている。昨年の会議が終わりに近づくにつれ、私は「やっと終わる。日米学生会議は1回でいい。実行委員は絶対になりたくない。」と思うようになっていた。そんな私がなぜそこからまた1年間、日米学生会議に魂を打ち込むことになったのか。それは、アメリカを本当に愛していたからである。

私は日本で生まれ、大学に入学するまでアメリカで育った。そのため、国籍は日本人でも、心の中は常にアメリカ人だった。帰国してから、イラク戦争を受けて、同世代の若者が「反米」となったことに非常にショックを受けた。アメリカをもっと理解してほしい、そして好きになってほしい、という思いが徐々に強くなっていった。メディアに惑わされずに実際にアメリカに行き、「アメリカ人と触れることができたなら、アメリカ人は戦争好き、横柄、傲慢だというステレオタイプを緩和することができるのではないか」と思い、それを達成するには日米学生会議が絶好の場だと思った。

そのような思いから始めた実行委員だったが、本会議まで多くの失敗や苦い思いも味わった。私は選考を担当していたのにも関わらず、選考が一番忙しい時期にもう辞めてしまいたいと何度も思った。しかし、その都度、

11月に日本側実行委員で1ヶ月も費やして話合った会議の目的と理念を思い出した。各年度によって設けられる会議のテーマは異なるが、常にその根底にあるのが、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という日米学生会議創立以来の理念である。今、面倒くさいと思っている作業も、辛いと思える時間も、平和のためなら一つも無駄にならない。もちろん、私一人や実行委員16人で世界を変えることができるとは到底思わなかったが、その理念が私の原動力となったのである。

アメリカに対するイメージがどれだけ改善されたのか、はっきりと数値で表すことはできないが、一つひとつの写真に映し出される笑顔を見ていると、日米学生会議という小さなコミュニティの中だけでも平和が生まれたのではないかと思う。

最後に、本当に家族のように愛している実行委員に心から感謝を伝えたい。Thank you Yuta, Akiko, Machaaki, Eichen, Hatako, Hanchan, Philip, Sheehan, Yoko, Geoff, Kenchan, Loc!, Rachel, Benchan, Daichan, and Sydnie!! I LOVE YOU SO MUCH!!



波多野綾子

最初に断っておきます。この感想文は、非常に個人的な様相が強く出ております。と申しますのも、実行委員として、全体に言及した、

公的な・まともなものを残すべきかとも思いましたが、それは他のセクションにおいて行われております。この部分では、正直に自分の想いを残すこと、どんな人間が何を求めて参加しているんだろうとこのセクションを読むであろう次期参加を検討されている方々の役にもたつのではないかと思い、極めて個人的な感想を残すことにいたしました。

第58回日米学生会議実行委員へ立候補するかしないか。

今年の会議の最後で、その決断を迫られたとき。

一瞬も迷いはなかった、といえばそれは嘘になる。

個人的な事情であるが、休学をはさみ、在学を6年目にした私は、この会議と自分の将来目標を平行できるのか、とても不安だった。しかし、日米学生会議の理念とその事業に思いを馳せたとき、ふと、気づいた。この会議は将来への布石などではなく、私が人生を通して実現したいと思えることの直線上にあるものであった。自分に今できることが何かあるのなら。迷いはなかった。この会議を創るブロックとなること自体が、私が生きる理由の一部なのだと、純粹にそう思えた。

所詮は学生の会議、とそう考える人もいるかもしれない。その重みも意義付けも、一人ひとり異なるものであるだろう。しかし自分にとっては、この会議を生きることが自己実現につながった。逆にいえば、そうでなければ私はこの事業に参加していなかったと思う。

また同時に、私にとって、日米学生会議への挑戦は、自分への挑戦でもあった。

今まで、与えられることに慣れすぎて、与えることに積極的でなかった自分。

頭の中で考えることは得意でも、それを実行することが苦手だった自分。

1人で行動することは多くても、集団で、チームで行動することに、ずれを感じていた自

分。

吸収することではなくて、今まで自分が得てきたものを、知識を、チャンスを、喜びを、どうやったら周囲に、参加者に、社会に還元できるのか？

不満や愚痴だけ、口だけの人間には終わりがたくない。でも、渦巻くアイデアを、どうやったら周りに伝え、協力し、効果的に実行できるのか？

試行錯誤の毎日。衝突、トラブル、ミスタイク。

自分のキャパシティの不足にいらつくことも、コンプレックスにさいなまれることも、単純作業に自分は一体何をしているのか、と思うこともあった。

それでも楽しかった。心から尊敬できる仲間がいたから。

参加者の、一人ひとりの笑顔を思い浮かべることができたから。

一日一日、育っていく会議が愛しくてしょうがなかった。

そんな日々は飛ぶように過ぎて、唐突に終わりを迎え、『日常の中の非日常』から日常に引き戻されて。今振り返ってみてどうだったかなんて、まだうまく言葉にできない。

自分は1934年からのバトンを次いで、時代を創っていこうと主体的に動いた過去の学生の熱い思いを少しでも、かけらでも次につなげたのだろうか。きっと、5年後？10年後？時が経たないとわからない。1つの組織の可能性に向けた自分の挑戦はまだ終わっていないし、その結論もまだでていない。

いや、どれだけときがたっても確定した「感想」なんて生まれてこないのではないかと思う。振り返ったそのとき、どんなところに自分がいるかで、あらゆるものの見方は変わってくるだろう。

ただ今本当に確かに感じるのは、この会議を通して本当にたくさんの方がたに出会い、本当に様々なご支援やご助言をいただいたと

いうこと。やそれは、現在はもちろん、日米学生会議の創始者の想いや、過去の参加者の試行錯誤の歴史も含めて、全て。そして自分はまだそれに対してのお礼を十分にしきれていない。

どうすればいいだろう？

その1つは、自分自身が、自分がお世話になったような方々のような人間に成長すること。出会いは化学変化を起こす。化学変化を起こせるような人間になりたい。いつになっても変化できる人間でいたい。

そしてもう1つは、過去からいただいたこの美しいバトンを次代にしっかりと渡すこと。この社会と地球を持続可能な、そしてもっともっと、生きるのが楽しい場所にしていくこと。きっと幾年かあとに見返したら、恥ずかしくて笑ってしまうのかもしれないが、今の自分の想いは1つ。世の中のものより多くの人が、より多くの可能性と未来への希望に満ちた時代を創り、生きていけますように、そう願ってやまない。「伝統への回帰と私たちの挑戦」はまだ、未完。

最後に、主催の財団法人国際教育振興会や財団・企業のスポンサー、後援者の方々、お忙しい中講演を引き受けてくださった方々、そして1年間苦楽を共にした実行委員や参加者のみんな、この会議を創るため、実現させるためにお世話になった全ての方々に、心から御礼を申し上げます。



平岡萌子

私は今年の春専門学校を卒業し、大学に入り直した。周りの友人は働き始める人も多い中、まだ学生でいることを選んだ私の心の中では、極個人的な一大プロジェクトが密かに、そして着々と練られていた。それは、「学生の間にしかできないことをやりつくす」という、極めて単純なプロジェクト。そして、その記念すべき第一弾とも言えるのが、この日米学生会議だった。

それまで、学生が中心に何かを行っているという団体とは、ほとんど関わらないで生きてきた。私の勝手な想像で、そういう活動をしている人たちはきっと自己満足に違いないと、全く根拠のないイメージを作り上げていたからだ。そんなマイナスイメージを持ち続けたまま、たまたま日米学生会議のパンフレットや過去の報告書に目を通す機会があった。最初は、やはり自分とは関係ない世界に見えた。日米両国の学生が集まって様々な地を移動しながら会議を行う。確かに面白そうだが、そこから何か生まれるのだろうか。熱く議論を交わすということは一見価値あるものにも見えるが、結局自己満足に終わるのではないか。結局学生にはたいしたことはできないだろう。学生会議なんてものは、きっと自分とは違う世界の人たちがやるもの。物事を冷めて見る習慣のあった私はそんなことを考えていたが、知らない世界にはどうしても心を奪われてしまうもの。食わず嫌いではなく実際どんなものか確かめたくて、学生にだって何かができるという希望を捨てたくなくて、参加を決めた。

そして参加した結果。私の持っていたマイナスイメージは、嬉しいことにほぼ不正解、そして一部正解だった。一部正解だったと思うのは、日米学生会議を通して、学生が非常に無力であるということを実感したからだ。いくら真剣に力を注いでも、学生という立場でできることにはやはり限界があると思う。様々な好機が重ならない限り、学生に世の中を動かすような大きなことはなかなかできな

いだろう。しかし、だからと言って日米学生会議のような学生団体に大した意味がないかという、そのような考えはとんでもなく大きな間違いだった。

日米学生会議を通して得た数多くの素敵な出会いや経験はここに語りつくせるものではないが、たくさんの貴重な経験や些細な出来事、その全てを通して私の考え方は変わった。学生が集まって生み出されるものは、必ずしも形あるものでなくてもいいのだと、会議が終わった今は思う。私たち学生は無力だからこそ、あらゆる機会を逃さずに経験を積み、そこから学び、吸収していかなければいけない。同じ経験をして、人それぞれの感じ方があり、学ぶことも違うだろう。大切なことは、それぞれが得たものを、いかに後に活かしていくかということ。今回集まった72人は、それぞれに強い個性を持った素敵な人たちだった。その全員がこの日米学生会議を通して得たもの、そして漠然とした想いを、今後の人生に最大限活かすことで、この夏の会議の意義はこれから何百倍にも膨れ上がっていくのだろう。そして、72人全員がこの夏を通して感じたものを糧に成長し、様々な分野で将来社会に還元できる力をつけていけることを確信している。

このような貴重な経験をできたことは、実行委員を始めとした第58回参加者の皆と、日米学生会議を支えて下さっている多くの方々のおかげである。この感謝の気持ちを将来何らかの形にして返せる人間になるよう、ますます力を入れて残りの学生生活を過ごしていきたい。

廣瀬裕子

58th JASC が終わってもうすぐ3週間が経とうとしている。

今でも一ヶ月間、71人のデリゲートと共に学び、議論し、生活した経験を一言で表すことは出来ない。ただ思う浮かぶ言葉は“incredible”である。

私のJASCへの興味は12年間アメリカで育

ったという自分の過去から始まった。アメリカでは日本人として育ち、日本では帰国生として「中身は限りなくアメリカ人に近い日本人」として過ごしてきた中、どちらにも属していないというアイデンティティーに自分自身も疑問を持っていた。どちらの要素の方が強いのかを分析し、「日本人らしく」なろうと努力する中、私が見つけたのは、アメリカと日本の架け橋になりたいという思いだった。

JASCに参加し、具体的に日米間をつなぐことの難しさを感じながら、多くの場面で悩んだ。しかし、今振り返ってみるとJASCにおいては私が目指していた架け橋というものは必要なかったのではないかと思う。それはJASCer一人ひとりがお互いに interact していき、自ら関係を築いていったからだ。文化が違っても、言語が違っても、お互いが分かり合いたいという気持ちを持っていれば、分かり合えるのだと強く感じた。日米の学生が1ヶ月間共に過ごすことで、本音で語り合うことで、お互いを互いの国の国民としてではなく、「人」として試みる事が出来る。

自分を分類しようとせず、ありのままの自分で“Just be yourself!”このことを fellow JASCers は教えてくれた。自分のありのままを受け入れ、そこから自分にしかないパッションで貢献していく。こうして初めて、他の仲間のありのままを受け入れる事が出来る。1ヶ月前までは出会ったことがなかった72人が1ヶ月間、24時間を共に過ごし、最終日には一人ひとりが驚くほど愛しい人になっていた。家族になっていた。

同じ空気を吸い、暑さを感じ、言葉を交わすことで、時には衝突しつつ、感情をシェア出来ること。これは同じ空間を共有することによって可能であり、だからこそたくさんの刺激がある。Fellow 58th Delegates とだけでなく、スピーカーやアラムナイ、サポーターと空間を共にすることによって私たちはより多くの刺激を受け、他者を理解する力を鍛えた。今では一瞬一瞬が貴重に思え、一人ひとりを大切に思う。

JASC taught us to be ourselves, 100% and the

combination of our identities by working together with fellow delegates, alumni and all supporters creates something truly wonderful.

JASCers の教えてくれたことを胸に、まずは日米の架け橋となるような、お互いを受け入れる場を作ること、つまり JASC を続けていくことに精一杯力を注ごうと思う。



黄アラム

「そのときの出逢いが
人生を根底から
変えることがある
よき出逢いを」

これは 相田みつをさんの言葉です。そして、私の大好きな言葉の一つでもあります。初めて聞いたときには何も感じられなかったこの言葉が、ある瞬間から、私の人生を一番良くあらわしている言葉、一生胸の奥に大事にしまっておきたい言葉になっていました。もちろんたった1つの出逢いで価値観がまるっきり変わったりする劇的な経験はまだありませんが、この22年間の道のりを振り返ってみると、自分が歩んできたこの道は他ならない「出逢いの連続」だったのではないかと思います。親に人生を学び、先生に学問を学び、友達と喜怒哀楽の感情を分かち合ってきました。その一つひとつの出会いが、幼かった私を今の私に変えてくれたと言うことも、否定できない事実でしょう。正に相田みつをさん

の言葉の通りなのです。

うまくは言えませんが、誰であっても生まれた時から人生の方向性はある程度定められていても、実際にどの方向に進んでいくか、または目的地までどの道を選んで行くかなどの決定は、その都度、自分の判断と置かれている環境によって変わってくると思います。「何かを始めてみよう」、「チャレンジしてみよう」、「この道を歩んでみよう」などの決心をうながすきっかけというのは、「人との出逢い」から生まれて来るのではないのでしょうか。それは友達、先輩、先生といった身近な出逢いだったり、大学外、国外など、自分とは違う境遇にいる人との、全く新しい出逢いだったりもします。

私にこのような新鮮な出逢いの機会を与えてくれたもの、そして、何よりも私に未来の夢と希望をもたらしてくれたのはほかでもない、第58回日米学生会議でした。日本での最後の夏ということでもっとも充実した夏を過ごしかった私はいろんな選択肢の中で日米学生会議を選びました。その理由としては、今まで参加してきた様々な学生交流の中で日韓のものがもっとも多かったことが決定的だったのではないかと思います。なにより多元的な理解を深めていきたかったため、将来その重要なパートナーとなってくる日米を理解することこそとても大事だと思いました。日本人でも、アメリカ人でもない留学生が日米学生会議に参加することは珍しいことかもしれませんが、だからこそその珍しい機会を得られた私はとても幸運な者だと思いました。日米だけではなく、第三者としての見方、それを72名のみんなの共有できた気がし、とても嬉しい限りです。

人と出逢うたびに色んなことを学び、視野を広げ、選択肢を増やし、その中で何かを選ぶ。この繰り返しこそが人生の根底を成していると思います。だから積極的に第58回日米学生会議から得られた新しい出逢いをこれか

らも大切にしていきたいと思います。将来、韓国の外交官を目指している身として、日米学生会議に参加できたことは私の心の奥に一生忘れられない宝物として大事にしまっておきたいのです。

「とうとう世界の人口が60億人を超えてしまいました。

私たちが、世界中のすべての人と出会おうと思っても、それは無理なこと。なぜですか？

それは、私たちが1秒に1人の人と出会ったとしても、190年の年月が必要だから。

人と人との出逢いは偶然。

人と人との出逢いは運命に等しい。

あなたとの出逢いは私の一生の宝物。」

今までたくさんの出逢いがありました。

国境を越えて多くの人と知り合うこともできました。

今までもそうだったように、これからもいろんな人と会う度に、自分をもっと多くの面で成長できるきっかけを必ず見つけられると信じています。

私のこれからの人生にも少なくない影響を与えてくれる第58回日米学生会議72名の参加者一人ひとりに一つひとつ感謝しながら、この感想文を終わらせて頂きたいと思います。

どうも有難うございます。

松田浩道

日米からのすてきな仲間とともにアメリカを旅行した1ヶ月間は毎日が本当に充実していて実りが多かった。”JASC is a life changing experience.”と会議のはじめのほうに聞いたときは「そんな大げさな」と思ったが、今思えば確かにそうかもしれない。今まで国際的な場で働くことなどほとんど考えていなかった私が外交官の方と話す中で大きな関心を持つようになったし、外国語で議論をする重要性に改めて気づいてはじめて留学を試みたい

と考えるようにもなった。

英語での議論については、ゆっくり話してもらえばアカデミックな深い内容であっても十分議論が可能であると自信を持った反面、まだまだ自由に英語を使うには多くの訓練が必要であることも痛感した。会議中、語学堪能なデリゲートに刺激を受けたこともあり、向学心を奮い立たせることができた。これは語学に限ったことではなく、様々な夢を持って努力をしている友人の姿を見てとてもよい刺激を受けた。向学心も重要だが、何よりも多くの友人を得たことが心からうれしい。“JASC Family”はまさに一生の宝である。

最後に、個人的に特にJASCで実感したことをあげておくと、それは音楽の持つ力である。私は中高とコーラス部をやっていた経験を生かし、有志を募ってTalent Showの場でアカペラを歌うことを企画したのだが、これを通して国を超える音楽の力を再認識することとなった。アカペラの練習をする過程では国を超えて友情が深まっていく様子を目の当たりにすることができたし、アカペラ練習以外の場所でも、さらっとピアノを弾くメンバーの周りに自然とみんなが集まっているのを見たり、クラシック音楽の話題でアメリカ側参加者と会話が弾んだりといった経験を通じて、音楽のすばらしさを実感した。特に、会議の後半で多くのメンバーと一緒に新しいJASC SONGを作ったことは本当にかげのない経験となった。私は幸運にも来年の学生会議に実行委員として参加する機会を得た。来年もぜひ音楽を通じて日米の絆を深めることに貢献したい。

三窪英里

“You deserve.”

会議終了の前日、来年のECになることが決まった私に対して、あるAECが繰り返しかけてくれた言葉である。「私も去年同じ気持ちだったからあなたの不安な気持ちはよくわか

るけど、大丈夫だから。」と彼女が目を見てゆっくり話してくれたことは決して忘れられない。この濃厚な1ヶ月間に会った全ての人が私を大きく成長させてくれた。

春、憧れの日米学生会議への参加が決まり、事前活動として弁護士事務所や法務省を訪問したり、著名人の講演会に参加したりする中、私の知的好奇心はぐんぐん高まるばかりであった。しかし、いざ本会議となったとき、胸躍る一方で大きな不安に苛まれていた。それは、どちらかというところ積極的に他に働きかける性格でもなければ、英語力も十分とは言えない私が果たして会議にどう貢献できるのか全く自信がなかったからだ。

しかし、その心配は杞憂に終わり、疎外感やストレスを感じることなく本会議を過ごすことができた。JASCは私にとって常に挑戦し続ける場であったと同時に、自分自身の可能性を模索するチャンスを与えてくれ、そしてまたありのままの私を受け入れてくれた71人の素晴らしいJASCerとの出会いの場であった。

中でも分科会での経験が上記のことを印象づけた。アメリカ側参加者と一緒に一つの目標に向かって協働し達成するという試みは貴重だった。私の所属した‘Global Mobility’では、難民、移民、マイノリティの問題を主に扱い、街頭で「アメリカ人の移民問題に対する意識調査」を行い、統計学を用いた分析はtangible resultとして成功した。時には日米間の問題の違いや考え方の違いに戸惑ったもののお互いがお互いの国を知ることの楽しさ、そして世界を知り問題を直視することの重要性を実感した。「多様な人種がいるアメリカでお互いをよりよく知ることによって差別が排除できると思うか。」という私の問いに対して「相手を本当によく知りたいなら、知らなくていいことがある。」というアメデリの意見は日本人との価値観の違い、問題の差を表しているように思えた。

今手元にある2冊の書きなぐったノートは、ときにアメデリに助けてもらいながら英語を必死で聞き取った結果であり、またJASCer

から届いた沢山の手紙は、この1ヶ月が決して儂く夢のように消える時間ではなく最高の時間を過ごした証として私の手に残っている。戦争メモリアルで共に辛い思いをしたこと、グローバルな問題について真剣に意見交換したこと、一緒にタレントショーで歌やダンスをしたこと…、振り返ると分ち合った時間すべてがJASCerに励まされ勇気付けられた。このような生涯の財産となる仲間に出会えたことに大きな喜びを感じる。この仲間がいたからこそ、私たちが未来に向かって考え、同じ苦労や悩みを共有しあい奮闘し続けることが非常に大切であり、将来的に社会貢献そして世界平和に寄与できる可能性をそれぞれが持っていることを感じられたと同時に、挑戦の中で新たな自分を発見する日々となった。この感動は言葉で到底表すことができず、自身の表現の陳腐さと言葉の無力さに落胆せざるをえないが、私の2006年の夏はこうして生涯忘れられないものになった。

最後に、これから1年間第59回ECとして、支えてくださるすべての方々に感謝し、会議の成功に向けて精一杯努めたい。



宮崎あゆみ

22万円でアメリカに行ける。

私がJASCに参加しようと思った理由はそれだけだ。

1月なかば、テスト前にはじめて出席した授

業で偶然配布された JASC のリーフレット。

いま振り返ってみるとこの頃の私は京都から、学校から、そして日常生活から抜け出さたくて必死だった。全く興味の湧かない授業に飽き飽きして人間関係に疑問を抱いて体内時計がおかしくなって夜しか活動できないことに美学さえ見出していた。

JASC を経験して何が変わったか。周りから見たらきっと何も変わってないと思う。

「アメリカの生活リズムのまま日本に帰ったら早寝早起きが習慣になっちゃったりして。」
「きっと国際関係学の必要性を見出してこれでもかかってくらい学校行くんやろーな。」

なんて甘い幻想を抱いていたものの現実はやっぱりそんなに甘くはなくて相変わらず早起きもできないし。

ただ、言葉にはできないけれどやっぱり何か少しずつ変わっていて JASC は確実に私のなかに存在する。

ビーチサンダル、ベージュ、止まった腕時計、スケッチブック、ブルーベリージャム、道路標識、CD、電車、マグカップ、コーヒー、手紙、そして写真。

すべてが思い出すタイミング。



源飛輝

「JASC という夏が私に残したもの」

この文章は、爽やかな西海岸を立ち残暑のまだ厳しい関東平野に着陸してから、つまり私にとって初めてのアメリカに別れを告げて久しぶりの日本に戻ってから、51日目に書かれたものだ。何も JASCer でサンフランシスコのラーメン屋に座っていた時、シアトルマリナーズのイチロー選手に居合わせたという偶然があったから背番号と同じ「51」にこだわったわけではない。ただ単に私の体内では未だにあの心地よいゆったりしたオクラホマタイムが流れているのであろう。本稿の編集担当者はワシントンにいたビジネスマンや学生のようにきっちりとしてテキパキ者なのだろうか。そうであればこのカウボーイ的きまぐれな筆者と文章とがいらぬ心配をかけたかもしれない。"Oh, I'm sorry." それでも、ある程度の時間が経ってから書いたほうが有り余る興奮を除いて多少は冷静に書けるので、そういうのもそれはそれでいいことではないかとポジティブに捉えてみた。この流儀はクールなニュー Yorker に教わったものだ。

今回の訪米はこれまでの知識やイメージの確認の場となった。いよいよアメリカを好きにもなったし嫌いにもなった。日本のことが嫌いにもなったし好きにもなった。

そして面白いことにアメリカに行って英語が下手になった。これは周囲のレベルが一気に上がったからかもしれない。愉快で有能ないい仲間が一気に増えた。寝る間も惜しんでみんなとの時間を過ごしたから睡眠時間が短くなった。間違いなく 2006 年の 8 月は今までで一番寝ていない 1 ヶ月だ。

…と、ここまで筆の任せるまま徒然なく書いてきた。他にもアカデミックなこと、馬鹿みたいなこと、様々な感想がフツフツと沸いて出てくるのだが、頭の中で整理がつかない。言葉にできやしない。残念ながら私の気持ちとは裏腹にこの文章は長くなりそうもないとここで気が付いた。という

のも、文字に落とせば落とすほど皮肉にもそれでは言い表せないことに苛まれ、自分のボキャブラリーのなさを実感し、あたかもパンクしそうになるからだ（決してオーバーな表現ではなく）。それがまた歯がゆいのだが、充実という単語では収まらない、それ程のレベルの経験と財産を得たということの裏返しでもあろう。

夏の1ヶ月間、5月からの準備を含めれば3ヶ月間、全く違うバックグラウンドを持つ両国の色々な学生が共同生活をしながら、色々な場所で色々なことを話し色々な人に出会って、色々なアクションを起こし色々なことを通じて色々な経験を積み、そりゃあ色々なことが出てくるさ。この現象に終わりはなく、これからも続いていくのは間違いない。

何かを決めるということは同時に何かを切り捨てるということだ。そして今年の夏、私は JASC の一員としてアメリカの土を踏んでいるという選択をして、成功だったと思う。

感想を求められて結局出てきたのが「Without JASC なんてもったいなさすぎる！！」言葉足らずなのは十分承知の上だが、シンプルな表現が一番力強いのだと思うし、強い思いを形にしようすると、どうしてもシンプルな表現に収束してしまう。最終的な感想が通信販売の売り文句のような調子となり、我ながら苦笑いしてしまうのだが、本心である。

おっと、フランクからメールが来たぞ。なんと、日本にやって来るそうなの！

そうかそうか、こりゃ楽しみで仕方がない。それじゃあ、"See you soon!"

安田雅治

「刀屋ラーメン。」

それはサンフランシスコの中心部ユニオンスクエアの近くにあるラーメン屋、日本料理屋。味も気に入ったし、雰囲気もよかったし、SF

では毎日 commute してしまった。

自分たちのいたホステルから近かったこともある。

店員さんは、みんな日本人。でもサービスはアメリカ流。日本ではありえない会話も、そこがまたクセになる。

一番のお気に入りには、スパイシーねぎラーメンのこってり味噌味。

天井、鯖寿司も◎

熱燗もよかった。house small を"ハウゼン"と間違えたのもいい思いで。メニューを逆さから見ていたし、他の酒はみんな"大関"だの日本のだったから。

日本酒とあげだし豆腐の組み合わせが最高かも。

最後の日には、一番愛想の悪かった店員さんと仲良くなった。

あそこに行くと毎回一組くらいは JASCer に会った気がした。

一番会ったのは Justin & Eunice かな。

この店であったことは自分の中でかなり大きかった。

自分は間違えていなかったし、これからの勇氣にもなったし、何よりもっと正直になれるから。

JASC の自分にとっての財産はこういうことの集まりだったと思う。

"life changing experience"とはまさにその通り。ちなみに、実は刀屋ラーメン初日、SF 到着日、

そこで本物のイチローに会って握手した。

あのままのイチローだった。

そして22日に帰国。

飽き足らず、成田からの帰り、なぜか船橋にて、有志で打ち上げしました。

もうそれから1週間になる。JASC後遺症はないけれど、でもさびしい。今日から新EC合宿。明日花火大会だからみんなに会えるかな。

やっぱりもう東京の景色も前とは少し違う気がする。



安田立

2006年8月20日の夜、すなわち58th JASC最後の夜、僕は幸せな気持ちに包まれていた。

英語力と一般教養（政治、経済、歴史、国際関係等）の不足から分科会や各種フォーラム、フィールドトリップにおいて内容がなかなか理解できず、会議に貢献できない苦悩の日々が続いていた。普段から医学の勉強のかたわら英語や一般教養の勉強を少しはしていたつもりだったが、会議に参加しているintelligentな学生達のレベルには到底及んでおらず、文字通りの挫折を味わったわけである。しかしながら、海を越えて日米の学生が本音

で1ヶ月も語り合うというこの素晴らしい会議に呼んでもらっているだけでも光栄なことであり、多少の劣等感を味わおうとも最後まで全力で喰らいついていこうという思いで毎日を過ごしていた。

8月20日の夜はJASCを締めくくるclosing ceremonyが行われた。講評のあと、58th JASC参加者の中から選ばれた59th JASCの実行委員16名が次回会議の概要を発表した。それを聞いていると「やっぱり実行委員を含め皆JASCの事が大好きで、この会議をより良いものにしていきたいという思いがあるのだな。そして、会議はもうすぐ終わってしまうけれど、ここにいるメンバー達は強い絆で結ばれており、JASCの歴史はこれからも続いていくのだ」ということを強く感じ、何とも言いえないhappyな感情が湧いてきた。必死に皆に喰らい付いてきた1ヶ月は意味があったのだ。

思えば、この会議からは多くのものを与えてもらった。僕は「開発：貧困と発展」という分科会に所属し、5月の春合宿で初めて分科会メンバーに出会ってから、何を最終目的にし、どんなリサーチをし、どんな人に話を伺いに行くのか、貧困解決のためには何が必要なのかといったことを皆と考えてきた。それぞれタレントを持った集団の中で0から新しいものをcreateしていく喜びというのは何にも変えがたいものだった。分科会だけでなくもっとgeneralな話題、例えば自分のアイデンティティーとは何か、ホモセクシャルについて、台湾問題、同時多発テロ、沖縄の米軍基地、ネイティブアメリカン、といったことについても意見を交わしたのは大きくて貴重な経験である。あるいは、サッカーや踊り、クッキングといったノンバーバル・コミュニケーションを通して互いの絆を強くすることができたと感じている。

繰り返しになるが、多くのものを与えてもらいながら、自分から与えられるものはあまり無かった。それに関しては今後の人生においてゆっくりと恩返しをしていきたいと考えている。JASCを糧にこれから何ができるかが勝負である。最後に58th JASCを作り上げてくれ

たアメリカ側実行委員、日本側実行委員、スマートで優しくてユーモアに溢れたアメリカ側参加者、日本側参加者、JASCを支えて頂いている企業、団体の皆様に心から感謝したい。

山田裕一朗

人は弱い。
だから、光と影のバランスをとりながら懸命に生きている。
人は恐れている。自らの存在が定義されない世界に身を置くことを。
だから、不安定を満たす何かを求めている。自らの実存を探すかのように。

今振り返れば、ぼくは常に逃げてきた。
大学生活への落胆、そこから生まれる虚無感から、海外へ逃げた。
現実の生活の怠惰さから、大きなことしたいと、第57回日米学生会議へ逃げた。
第57回日米学生会議、自らの弱さを隠すため、英語力の低さを言い訳に自らを語ることから逃げた。

2005年8月、僕は実行委員になった。逃げたくなかった。

2005年12月初め。実行委員の活動にメンバーの8人が疑問を持ち始めていたころ、いつものオリンピックセンターで緊急合宿を行った。夜更けまで語り、それでも納得できなかったぼくは裕太（井上裕太）にこうけしかけた。

「お前のビジョンを語れや。」
妥協はしたくないし、真剣だった。裕太はこう答えた。

「人はそれぞれ違った価値観を持っているんだ。その価値観を磨くの、それぞれみんなが人生の中でより多くの人と出会って、より多くの価値観と触れること。そして語り。だから、終わった後に参加者みんながそれを経験できるような会議にしたい。」

第58回日米学生会議はこの日から、まるでス

イッチが入ったかのごとく動き出した。

ぼくが出会った仲間は、こんなやつらだった。最高の仲間はこんな言葉をくれた。

「おれは、枠組みをつくる。おまえはそこに血と肉をつける。いいコンビだった。」
JASCを通して、一番長い時間を過ごし、一番たくさん語った裕太。

「ふいりっふ、英語うまくなったね。」
英語の苦手なぼくをいつも優しく助けてくれた、JECダンスパートナーのさり（生板沙織）。

「ソーシャルイノベーターズ、おつかれさま」
企業と一緒にアポなしで飛び込み、共同から共創を生み出した戦友のはんちゃん（唐沢由佳）。

「いま、メッセしていいかな」
真夜中、いつも不規則な時間とともに広報戦略を練ったまちゃあき（井上雅章）。

「ふいりっふならできるよ。」
いつも関西で一人活動するぼくを電話越しに励ましてくれたはたこ（波多野綾子）。

「はじめは何回もけんかしたね。でも、今だからこんなに仲良くなれたのかな。」
けんかばっかしたけど、それだけ本気でぶつかり合い語り合った明子（島村明子）。

そして、会議の最後にえいき（国松永喜）がくれた手紙にはこんなことが書いてあった。

「いろいろあったけど、あの時(実行委員に)誘ってくれてありがとう。…。"縁"とか"運命"とか"必然"とか、そういう言葉は嫌いだったけど、自分の人生にとってのこの時点でお前に出会えたことは大きな意味があったよ。」

2006年8月21日深夜、東京からの夜行バスの中。
ぼくは涙が止まらなくなった。



由井啓太郎

「人間の不幸というものは、みなただ一つのこと、すなわち、部屋の中に静かに休んでいられないことから起こるのだ」（パスカル『パンセ』より）

たしかに居心地のよい部屋の中からでも、世界は「書物」という窓を通して眺めることができるし、そこから得た知識をもとに人間は自分を支えるための精神の砦を築くことができる。あえて部屋の外に足を踏み出すことで、安定した砦を破壊しかねない、予期せぬ出来事や未知なる他者との遭遇という危険に身をさらす必要などないはずだ。ところが、人間は部屋の中にはじっとしてられない。外の世界に満ちあふれる「経験」を求めるからだ。

自分を超越した人や物との接触・交流は、自己の一貫性を確保してきたアイデンティティを破壊してしまう。そして、いったん破壊されたアイデンティティはもう一度再建されなければならない。地道で忍耐を必要とする精神的な作業によって。しかし、立て直したはずのそれも新たな出会いによって再び破壊されてしまう……。こうした絶え間ない破壊と再建のサイクルに身を置き続けさせ、人間の存在を常に未来に向かって開かせること、私はこれを経験と呼ぼう。そして、人間の成熟には経験が必要だと強く信じる。

第58回日米学生会議は、私にとって「経験」の場となった。日頃フランス文学を研究して

いる学生が、この会議に参加しようと思ったきっかけは、善い意味でも悪い意味でも国際情勢を牽引するアメリカという国を直接に見聞きしたいと考えたからだ。実際的に視野を広げることで、書物とにらめっこの日々のなか習慣化してしまった抽象的な思考方法をマッサージしたいという気持ちもあった。しかし、ひと月近いロング・ジャーニーはすっかり私を変容させたのだ。経験は思いも寄らぬ場所へと私たちを導く。

まず、アメリカを一つのイメージとして定義しようという目論みが打ち破られた。アメリカという国は大きい。オクラホマでは残酷な暑さに苦しめられ、サンフランシスコでは夏だというのに上着なしでは過ごせない寒さに困惑した。気候の面だけではない、会議の中で出会ったアメリカの学生たちの多様さは「アメリカ」に明確な輪郭を与えようとするのをためらわせる。彼らは中東や北欧、ユダヤやハワイなど様々な民族的出自を背負い、それぞれが自由で個性的な意見や考えをもっているのだ。必死に耳で聞きとり、拙いながら全力で相手に投げかけた英語による会話のひとつひとつが今も記憶に残る。日本のアニメや漫画に興味があり、その知識が日本人をはるかに圧倒する者。彼とは、日本とアメリカにおける「サブカルチャー」の意味の違いについて議論した。アメリカの歴代の大統領の名前をすべて暗記し、その業績にも通暁している者。彼は沖縄の歴史を研究していて、さらに「空海」や「(学生運動に使用された)火炎瓶」などの単語を発しては、私たちを驚かせた。SF作家を目指し、すでにいくつか作品を発表したことのある者。古代ギリシアの叙事詩に登場するような絶対的な「英雄」が現代の文学にも必要なのかいなか、「靈魂」はどこに由来するのか云々、文学を愛好する者として国境を越えて精神と精神でぶつかり合う希有な時間を彼とは共有できた。

こうした学生との直接的な触れ合いを通して、私は国家としての断定的な定義付けがアメリカにはそぐはないと感じた。世界を善悪の二分法で割り切り、デモクラシーの理念を

人類に普及させるという使命感で鼻息を荒くする一部の指導者だけが「アメリカ」を代表するのではない。私たちが出会った思慮深く人間的な魅力にあふれた学生たち、彼らのような国民一人ひとりが「アメリカ」のイメージを支えている。そして、それは個人の自由かつ尊厳ある生き方を何よりも大切にする国家としてのイメージではないだろうか。

そして、このような「個人」についての考察は、私自身にも向かってくる。今後日本において私はどのような個人として振る舞っていくのか？私の個人としてのあり方が、どんなにわずかであれ「日本」という表象を背負う宿命にある以上、私はそれに自覚的でないといけない。たとえば、そのような国民国家的なイデオロギーを批判する立場に身を置くとしてもだ。大学での文学研究で深い教養と見識を養い、それに裏打ちされた批判精神に照らして日本と世界の現実を見据えること。過去の歴史から学ぶことと未来について思索をめぐらすこと、決して車輪をひとつにすることなく双方のバランスをとっていく。そして、アメリカに関する自分の「経験」を一人でも多くの人々に語り伝え、日米学生会議の「経験」の輪をさらにもっと広げていくこと。これが今の精一杯の決意である。

最後に、実り豊かな「経験」の場を提供してくださった関係各位の団体、実行委員の皆さんに感謝したいと思う。そして、予期せぬ行動(?)ときらりと光る発言で会議を素晴らしいものにしてくれた旅の仲間たちに友愛と敬意を表したい。私たちの「経験」は、これからの未来に対して大きく開かれたところであり、いつか訪れるやもしれぬ「成熟」に向けてのロング・ジャーニーは始まったばかりだ。

王雄揆

飛行機の中での12時間、太平洋の海を眺めながら、この1ヶ月間のことをいろいろ思い浮かべてみた。

アメデリと最初に出会ったコーネルの寮で

ルーカスが僕の名前を持って『ウンギュー〜』っとか言って迎えてくれた。ルーカスの第一印象は、『ヤベッ、イケメンじゃん』だった。それが僕のJASCの始まりだった。

そこから、JASCは僕が乗っていた時速900キロの飛行機よりも速く一つのパノラマのように、そして、思い出を積み重ねながら、飛んでいった。

コーネルでのドッジボール、その後のサッカー、そしてクライマックスだったのは10メートルぐらいの橋からみんなで川にジャンプしたこと。数えられないぐらいいっぱいあったリセプション、バーベキュー、また、RT時間にファイル忘れてコーネルのキャンパスで一人で迷ったことか〜。

ワシントンではやっぱりホステルが一番記憶にのこる。でも、今考えるとそのおかげで、思い出がもう一つ増えたからなんかありがたい。ミュージアムに行って、ボーちゃんと一緒に公園ですわり、ジャスクラブを語ったのも、すごく楽しかった。

オクラホマでは、みんなが披露してくれたタレントショー、僕はスキットとアカペラやったけど、JASC中、一番一生懸命だったかもしれない。今でもアカペラやった人には感謝しているし、『最高だったよ!!』っていつかあげたい。そして、ホームステイでアメフトを始めて見に行ったことも思い出となっている。

最後のサイトであったサンフランシスコは、僕にとってはみんなとの別れを準備する期間だった。最後のフォーラムでみんな頑張っていた姿が今でも頭の中に生々しく浮かぶ。アダムが作曲したJASCソングをファンちゃんと一緒にレストランで歌詞を考えたことも思い浮かぶ。

そして、成田空港に到着した。だが、JASCは最後まで僕にスリルを感じさせた。その主人公はハタコ!! なんかパスポート忘れて、ちょっと面白かった。

そして、最後の最後、パーマンの最後の言葉で58th JASCは終わった。

みんなお疲れ様でした。

第8章

第59回日米学生会議概要

第 59 回日米学生会議テーマ

“Advocating Japan-America Participation in Global Change”

太平洋から世界へ ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念の下、1934 年満州事変を契機に悪化していた日米関係を憂慮していた 4 人の日本人学生が太平洋を渡り、日本初の国際学生交流プログラムである日米学生会議を創設した。以後、太平洋戦争勃発に伴う会議中断をはじめ数々の困難を乗り越えながら、学生同士の率直な対話が相互理解を深め、平和の実現に貢献するという創設者の信念が継承され今日に至る。

日米学生会議は創設時より学生独自による会議の企画、運営が行われ、毎年夏日米交互で開かれる約 1 ヶ月の会議は、日米の学生による相互理解と友情を醸成する場であり続けた。第 59 回日米学生会議は「太平洋から世界へ ～グローバルパートナーシップの探求と次代の創造～」というテーマの下で、秋田、東京、京都、広島で開催される。

グローバル化の進展により、日米両国には環境、テロ、貧困、人権、移民などの世界規模の課題に対処するため、2 国間の枠組みを超えた協力関係を築くことが求められる。その主体は決して政府に限定されず、企業、NGO、個人などを含めた多様なものになる。太平洋の平和が続き、日米関係が成熟しつつあると指摘される今、会議設立当初の理念に回帰し、地球規模の問題に対応できる協力関係、すなわち「グローバルパートナーシップ」のあり方を探求していく。

分科会活動、アカデミックなフォーラム、実際に現場を訪れるフィールドトリップ。本会議中、1 ヶ月にわたる共同生活を通し、日米両国の学生が特定の利益に拘束されない率直な議論を重ねる。時には互いの価値観を衝突させ、受容しながら、自己を相対化することができ、個人間の絆を深め、異文化間の相互理解に向けて心を開いていく。第 59 回日米学生会議によって育まれた豊かな人間関係は、必ずや日米両国の国境を超えたパートナーシップを実現すると同時に、太平洋の、そして世界の平和と安定をもたらす創造的な時代を切り拓く礎たり得ることだろう。

主催

財団法人国際教育振興会

企画・運営

第 59 回日米学生会議実行委員会

開催期間

2007 年 7 月 26 日～2007 年 8 月 20 日

開催地

東京

江戸開府から四百余年。千二百万の人口を擁する巨大都市に成長した東京は日本の政治・経済的中枢であると同時に常に新しい文化の発信地であり続けてきた。米国を始めとする各国の企業、公館、国際機関が集中する世界有数の大都市である一方、浅草・上野に見られる情緒溢れる古き良き日本の一面をも残す。東洋と西洋、歴史と現在、そして未来。様々な人種と価値観が交錯するエネルギッシュなこの街で、第59回日米学生会議全体の理念であるグローバルパートナーシップの構築に向けた前進を図る。

秋田

山に囲まれ日本海に開けた「美の国」秋田。世界最大級のブナ原生林である白神山地や、日本一の水深を誇る田沢湖をはじめ、豊かな自然に恵まれ、なまはげや竿燈祭りなど、独自の伝統文化の宝庫である。それだけでなく、日本有数の米どころであり、野菜やりんご、牛肉など、全国の食料供給基地として重要な役割を果たしている。秋田ではホームステイや農業体験などを通し、東京、京都、広島などの都市では味わえない、日本の「地方」を参加者に体感してもらおう。また、少子高齢化による人口減少、経済格差などの現在地方が抱える課題についても考察していく。

広島

原爆資料館で人類がいかに恐ろしい兵器を開発したかを目の当たりにすることは、多くの人々に人生観を揺るがすほどの衝撃を与えるだろう。惨劇を振り返り平和の願いを新たにすることは人間として何度でも繰り返しやらねばならないことである。しかし、単に願望するだけではなく、個々人が受ける衝撃にしっかりと向き合った上で、いかに核と向き合うか、我々に何ができるのか、現実的な議論を展開したい。原爆の悲劇をパールハーバー以前から戦後復興に至るまでの広い歴史的視野の中でとらえながら、日米の歴史観の相違についてもどちらにも偏ることなく考察したい。このような作業を通し、共に創造する未来に向けて戦争と平和の意味を見つめ直す。

京都

大都市として世界的に長い歴史を持つ京都は、神社仏閣などの建築物、有形無形の伝統文化を有し、観光都市としても世界的に有名である。戦争による破壊から免れた文化の力があつたからである。そのため東京に次いで多くの外国人が訪れる都市であり、彼らの存在なく今日の京都は語れない。さらに、ここは大学、ヴェンチャー企業、NGO・NPOを多く抱え、未来を向いた都市でもある。過去を大切に、頑にアイデンティティを守る。そのことでむしろ高度に国際化したユニークな都市、京都。この場所で過去・現在をとらえ直し、その先にある日米のこれからをローカルとグローバル双方の視点から考えていきたい。

会議の過程

第58回日米学生会議の参加者から選出された実行委員が、日本側の主催団体である財団法人国際教育振興会、米国側はJASC, Inc.の協力の下、本会議開催のための準備活動を行なう。参加者が決定後、所属分科会のテーマに関するレポートを作成し、講演会や勉強会、合宿などを事前に行ない、夏の本会議に臨む。

本会議では、日米各36名、合計72名の学生が約1ヵ月にわたって共同生活を送る。本会議の主な活動として、討論が中心となる分科会、各種のフィールドトリップ、そして様々な社会活動、終盤に開催されるフォーラムなどが挙げられる。参加者が7つの分科会に分かれ、第59回会議のテーマである「太平洋から世界へ～グローバルパートナーシップの探求と次代の創造～」の下、ディスカッションを行なう。また、フィールドトリップでは、各自の視野を広げ討論の充実化を図る。さらに、本会議では議論にとどまらず、ホームステイやフォーラムなど積極的に地域の方々との交流を図っていく。また、フォーラムでは、分科会での討論の結果など本会議の成果を社会に向けて発信する。

本会議終了後には、参加者は会議の内容を報告書にまとめ、第59回日米学生会議の総括とする。各参加者は、本会議で得られた経験を胸に社会へと巣立っていく。

会議中のプログラム

分科会

本会議において活動の中心となる分科会は7つ設けられており、日米双方からなる参加者が、本会議期間を通じて議論を重ねる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪れるなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。なお、第59回会議における分科会は以下の通りである。

- ・ 開発：貧困撲滅への新たなアプローチ
Innovative Approaches to International Development
- ・ メディア：グローバル社会の影響
Media Influence on Global Society
- ・ 暴力と平和：武力行使に対する価値観の再考
Pacifism and Belligerence: Examining Different Perspectives on the Use of Force
- ・ 教育：次代を担う市民の育成
Creating a Global Citizen: Education Focused on International Concerns
- ・ 日米両国のナショナリズム
Nationalism: Patriotism or Xenophobia?
- ・ アイデンティティの社会学
Opposed Identities: Ideology, Ethnicity, and Inequality in Conflict
- ・ 文化：グローバリゼーションの渦中で
Eastern and Western Popular Art: Who is Imitating Whom?

フィールドトリップ

分科会の議題や各開催地に関する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO および研究所などへ訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることができる貴重な機会であり、現実に即した議論をするための基礎とする。

Special Topics

議題がすでに固定された分科会と異なり、参加者が個々の興味や便宜に沿った議論を自由に設定し、異なる視点からの議論を行なう。参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見、論題設定能力を養う。同時に、より広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想の獲得により、会議をより充実させる。

Conference Wide Discussion

分科会では扱わないテーマを対象とし、専門家を招き、第 59 回会議のテーマである、日米両国による地球規模の問題に対応できる協力関係、すなわち「グローバルパートナーシップ」のあり方を探求していく。

Conference Wide Reflection

参加者が一同に集い、会議中に感じた悩み、不安、感動、喜びなど、様々なことを自由に話し合う。自分の思いを全体に伝え、また他者の思いを共有することで、自己を振り返り、他の参加者との相互理解を促進することを目的とする。

フォーラム

会議の最終開催地、京都で行なわれる。本会議における分科会の発表など、第 59 回日米学生会議の成果を提示していく。現代社会が抱える問題を来場者と共有し、会議の成果を社会に発信することを目標とする。

第9章

ご協力頂いた方々

第58回日米学生会議 協力者.....118

第58回日米学生会議 賛助者.....122

第58回日米学生会議 協力者・協力団体

主催・後援

主催

財団法人国際教育振興会

後援

外務省

文部科学省

米国大使館

日米文化センター

財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会

会議全般

財団法人国際教育振興会

理事長

大井孝

日米学生会議事務局

相澤始枝

総務広報部

水野詠子

青柳明子

国際教育振興会賛助会

会長

山室勇臣

事務局長

伊部正信

事務局

佐々木文

The Japan-America Student Conference, Inc.

理事長

Robin L. White

専務理事

Regina McGarvey

八木沢ひろ子

外務省

文部科学省

米国大使館

ブルー・バンブー株式会社

株式会社実業広報社

株式会社千修

日米文化センター

財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会

京王観光株式会社

立命館大学

企画・運営協力

JASC ジャパン (旧OB会)

名誉会長

山室勇臣

会長

天野順一

副会長

降旗健人

中瀬正一

顧問

堀内宗忠

小林規威

宮沢喜一

グレン・フクシマ

山崎秀之

第9章 ご協力頂いた方々

幹事長	山本東生	
役員	辻喜久子	山田勝
	大高巽	中山智生
	井上敏之	木之上高章
	宮本昭八	市川裕康
	古澤昭子	
地域担当役員 (国内)	梅崎渉	呉明仁
	竹内幸美	
地域担当役員 (国外)	野原克也	小林洋輔
	宮崎久	山田良子
SC	千代明弘	飯田智紀
	乗竹亮治	杉田道子
	Hana Heineken	

事前活動 (分科会活動を除く)

孫崎享	防衛大学校
Bain & Company, Inc.	藤原帰一
京都・オクラホマ交流会議	フードエックス・グローブ株式会社
株式会社インテグレックス	農林水産省
らーのろじー株式会社	NPO 法人 学習学協会
経済産業省	鈴木透
株式会社 AI コンサルティング・ジャパン	大江博
井上敏之	橋爪大三郎
北川敬三	

本会議活動

コーネルサイト

Cornell University	Clarke Consulting Group
Visionary Strategies Institute	

N.Y.C.サイト

Ernst and Young	A&E Entertainment Television
Common Ground	The Japanese Mission to the UN
The Japan-America Association NY	Pfizer, Inc
Center for Global Partnership	

第9章 ご協力頂いた方々

ワシントン D.C. サイト

The White House	Dr. Cynthia Stanton Moody
American University	Dr. Jennifer Amyx
Embassy of Japan	Mr. Paul Reynolds
Department of State	Ms. Thea Lorentzen
The World Bank	Ms. Claudia Anyaso
Chemonics International, Inc	Mr. Randolph Carter
Mrs. Kristy Holch	Ms. Gigi Mckendric
Mr. Earl Cook	Mr. Mukubanya Magnat Kavuna
Ms. Linda Zhang	Mr. Kevin Melton
Ms. Rachel Brunette-Chen	Dr. Abdul Karim Bangore
Mr. Michael Benefiel	Dr. Robert Kramer
Ms. Kay Negishi	梅崎渉

オクラホマサイト

University of Oklahoma	Dr. Cornel Pewewardy
Memorial Institute for the Prevention of Terrorism	Mr. Jerry Tahseuah
First Baptist Church of Moore	Mr. Lancer Stephens
St. Thomas More Catholic Church	Mrs. Lily Shangreaux
St. John Missionary Baptist Church	Mr. Dan Bigbee
New Life Bible Church	Sterlin Harjo
Mr. Gary Pitchlinn	Mr. Jason White
Dr. Richard Allen	Dr. Jerry Bread
Mrs. Susan Arkeketa	Mrs. Molly Shi Boren
Mr. Jim Anque	Ms. Sydnie Brown
Mrs. Gena Timberman-Howard	Mr. Quinton Roman Nose

サンフランシスコサイト

The Japanese Consulate of SF	Asian Law Caucus
Starbucks Coffee Company	Filipinos for affirmative action
Mrs. Masaye Nakamura	Asian communities for Reproductive Justice
International Forum on Globalization	Bay Area Immigrant Rights Coalition
Adobe	The Tides Center
Eth-Noh-Tec	Global Exchange
Zenrin USA	Accenture
NASA AMES Research Center	
Mr. Richard Kiwata	

分科会活動

外務省	NGO エクマットラ
厚生労働省	UNICEF
法務省入国管理局	HAATAS
米国大使館	SHARE
東京アメリカンセンター	アフリカ日本協議会
宝酒造株式会社	在タンザニア日本大使館
日本郵船株式会社	渡邊彰悟
東京ガス株式会社	山脇啓造
石油資源会社株式会社	新宿多文化共生プラザ
日本検査キューエイ株式会社	難民支援協会
帝国石油株式会社	Inter-American Development Bank
富士通株式会社	District of Columbia Commission on
有限会社ビッグイシュー日本	the Arts and Humanities
株式会社資生堂	International Forum on globalization
三洋電機株式会社	CIS
京都 CSR 研究会	CPA
近藤文樹	軽部謙介
吉原健吾	NRE World Bneto
西田尚弘	New United Motor Manufacturing, Inc.
船山直子	Ms. Gina Giambattista Cesari
グリーンピース・ジャパン	渡辺靖
アジア開発銀行	徳久剛史
三井物産株式会社 CSR 推進部	Mr. Arshad Mahmud
ピースボート事務局	Mitchell P. Smith
JANIC	中野東禅
ほっとけない世界のまずしさ	赤林朗
キャンペーン事務局	矢作直也
日本放送協会	迫田朋子
社団法人	西川伸一
アムネスティ・インターナショナル日本	櫛島次郎
河東哲夫	亀田病院
北川敬三	Ms. Sylvia Smith
C-fa フォーラム	(敬称略、順不同)

第58回日米学生会議 賛助者・団体・企業

財団法人吉田茂国際基金

財団法人石橋財団

財団法人鹿島平和研究所

財団法人国際教育財団

社団法人日本歯科医師会

社団法人京都日米協会

社団法人大阪日米協会

財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会

財団法人日商岩井国際交流財団

財団法人平和中島財団

社団法人日本自動車工業会

社団法人神戸日米協会

エアバス・ジャパン

株式会社オリエンタルランド

キッコーマン株式会社

株式会社三和

新日本製鐵株式会社

住友不動産株式会社

セコム株式会社

株式会社セブン&アイ・ホールディングス

大成建設株式会社

株式会社竹中工務店

株式会社電通

東京海上日動火災保険株式会社

東京ガス株式会社

東京電力株式会社

トヨタ自動車株式会社

中辻産業株式会社

日本アイ・ビー・エム株式会社

野村ホールディングス株式会社

株式会社日立製作所

富士ゼロックス株式会社

富士通株式会社

本田技研工業株式会社

松下電器産業株式会社

三井不動産株式会社

三井物産株式会社

三菱地所株式会社

三菱重工株式会社

三菱商事株式会社

株式会社三菱東京UFJ銀行

明治安田生命保険相互会社

メルシャン株式会社

橘・フクシマ・咲江

堤清二

宮澤喜一

伊藤忠商事株式会社

エクソンモービル有限会社

協和発酵工業株式会社

株式会社公文教育研究会

住友商事株式会社

住友スリーエム株式会社

日本電気株式会社

WIP ジャパン株式会社

富士ゼロックス株式会社

おたふくソース株式会社

山元学校

NPO 法人学習学協会

第9章 ご協力頂いた方々

秋間修	関口孝子
浅沼澄	竹本秀人
池園悦太郎	田村和生
池園登美子	富永宏
石樽和夫	友末優子
市川比呂也	中瀬正一
井上敏之	中山智夫
今井康一郎	奈良靖彦
大橋英雄	西田尚弘
小泉冷三	布川俊彦
小林規威	橋本徹
近藤文樹	藤原帰一
佐々木毅	降旗健人
佐々木健至	堀内宗忠
塩崎哲也	宮里一馬
清水直樹	宮澤喜一
須崎真二	渡部千里
関口和一	渡部麻弥

(敬称略、順不同)

The Japan-America Student Conference Since 1934

主催
企画・運営



財団法人国際教育振興会

第58回日米学生会議実行委員会